

歪んだ愛をアタタに(完結)

ちやるもん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

歪んだ愛をアナタに捧げましょう

これは、幻想郷に迷い混んでしまった一人の男の物語。

目次

第1話	森の中	1
第2話	アリス・マーガトロイド	6
第3話	幻想郷	12
第4話	外への憧れ	17
第5話	疑い	23
第6話	一筋の光	29
END 1	人形	33
第7話	足手まとい	38
第8話	金属	43
第9話	館の主	48
第10話	恐怖	52
第11話	少女	57
第12話	憧れ	63
第13話	優しい世界	67
第14話	生きづらい	71
第15話	約束	76
第16話	気配	80
第17話	踏み込んでくる者	85
END 2	甘い夢	90
第18話	こんな俺でも	96
第19話	弱いもの虐め	101
第20話	停滞	107
第21話	臆病者	112
第22話	狂人	116

第23話	止まない雨	120
第24話	一人	124
第25話	迷走	126
第26話	地べたに座って	130
第27話	夢	134
第28話	出会い	138
第29話	立派な成長	140
第30話	率直に	143
第31話	棚からぼたもち	146
第32話	その疲れは	148
第33話	見守っています	151
第34話	理解しています	154
第35話	住居	159
第36話	しこう	161
第37話	笑顔	164
第38話	材料	167
第39話	話し合い	170
第40話	ごめんなさい	173
第41話	扉	176
END3	知識欲	178
第42話	贅沢	187
第43話	おやすみなさい	189
第44話	疫病神	191
第45話	願い	197
第46話	心残り	200

第47話	詰み	203
第48話	ありがとう	205
第49話	言い聞かせながら	208
第50話	歪んだ愛をアナタに捧げましょう	211
最終話	歪んだ愛をアナタに	216
エピローグ		223

第1話 森の中

冬が過ぎ、まだ春と呼ぶには肌寒い時期。桜は小さな蕾を付け梅の花は芳しい爽やかな匂いを漂わせる。その匂いで梅酒を飲みたくなるのは日本人全般に言えるのか、もしくは、俺だけなのか。いや、どちらでも無いのだろう。大人の過半数は仕事に明け暮れそんな事を気にする余裕なんてないだろうし、子供はそもそも酒の匂いなんて分からないだろう。

そんなどうでも良いことを考えながら、数少ない街灯を目印に、月明かりが照らす街道を歩く仕事帰り。

電車を使つて、家の近くまで来て、後は歩き。月明かりが明るく照らしているとはいえ、やはりどこか一人と言うものは寂しいものだ。とは言つても家に帰つても一人なのだが。その事実を苦笑いを浮かべる。

ふと横を見るとそこには月明かりよりも圧倒的に明るく光を放つ物があった。どこにでもある自販機だ。ただ、こうやって見ていると、かなり明るいな。と何故か実感させてしまう。まったく意味がないことにもこう一々反応してしまうのは寂しいかだろうか。またしても苦笑いを浮かべてしまう。

(どうせだから何か買うか)

車が来ていないのを確認し、反対側の歩道に渡る。自販機にはお馴染みのジュースやお茶、コーヒー等といった飲み物。変わり種であるうちョコレートのジュースが置いてあった。

「まあ、無難にコーヒーだよな」

自販機の口に百三十円を入れ缶コーヒーのボタンを押す。するとガタンツと固い物が落ちてきた音が聞こえた。少ししやがみ取り出し口からコーヒーの缶を取り出す。

「……なんでだよっ!？」

しかし、取り出してみたらあら不思議。缶は缶でもお汁粉缶が出てきてしまっていた。

慌てて自販機の商品を確認。缶コーヒーの右隣にひっそりと潜む

お汁粉の姿……そして値段は百四十円と少しお高め。

「お汁粉……いや、たしかに玉に飲みたくなるけど……しかも損はしてないって所が……なんだこの勝ったのに負けたみたいなの……」

はあ……と溜め息を吐き、今日何度目とも分からない苦笑いを浮かべる。

しょうがない。と諦めお汁粉を取り出し両手を暖めるように、その温かい缶を握りしめた。

「はあ〜あつたけ〜」

どうせだからゆっくり飲みたい。どこかにベンチか何か、座れる場所はないかと見回す。

自販機の少し先にある公園にならあるだろうか？早歩きで公園を目指す。公園には滑り台等と言った良く見掛ける遊具に加え、案の定ベンチが一脚あった。流石にブランコに乗ってリストラされた大人のような格好になりたくはない。いや、夜中にベンチに一人座ってお汁粉缶を啜る大人もどうかとは思うが……。まあ、そんな思考はこれらのゴミ箱に捨てておけばいいのだ。

どっこいせ。と、年より臭くベンチに座る。手に持ったお汁粉の缶のプルトップに指を掛け力を加える。カシュツと心地よい音と共に小豆の甘い匂いが鼻を燻る。

まだ中身は熱いので、意味は無いと分かっているながらふうふうと息を吹き替えける。そして、飲み口に口を付け、ゆっくりと缶を傾けると、少しドロツとしたお汁粉が流れ出してきた。まだ熱いそれを口の中で冷まし、冷めた所をゴクンツと飲み込む。口の中全体に広がる甘さにどこか懐かしさを覚え、二口、三口と一気に飲み干してしまった。

「……意外と行けるじゃねえかチクショウ」

まるでその事が悪いみたいに見えるのはご愛敬である。

「帰るか。とつ、その前にゴミ箱」

ゴミ箱は何処だ？と、少し顔をずらすと少し離れた場所にゴミ箱があった。ゴミ箱の位置を確認しちよつとした遊び心で缶を投げる。缶は緩やかな放物線を描きカンツとゴミ箱の側面に当たって地面へと落ちた。少し面倒に思いながらもベンチから立ち上がり、缶を拾い

にいく。

「ゴミはキチンとゴミ箱につてね」

缶を拾い、ゴミ箱の中に入れる。

「よしっ。帰るか」

脇に挟んだ鞆を持ち直し、振り返る。

「……………はっ」

間の抜けた声が静かに響いた。

しかし、驚くのも無理はない。何故なら、唐突に、瞬きもしていないのに、目の前の景色が変わっているのだから。

先程までの都会でもなく、田舎でもない中途半端は街並みも、昼間は子供が遊んでいるのだろうと思わせる公園も、それどころか、さつき缶を捨てた筈のゴミ箱ですら姿を消し、ただ木が連なる深い森となっていたのだから。

「は……………はは……………」

乾いた笑い声が漏れる。目の前の怪奇現象に目を奪われていながらもなお、目を背けたい気持ちで代弁したかのように。

どうなってるなにおきたどうすればいいなをすればいい

頭の中がかき混ぜられたように思考がぐちゃぐちゃになっていく。

まるで、この先が見えない森のように、思考はドンドン深く、暗い場所まで潜っていく。そして、一つの答えを導き出した。

「そうだ……………そうだよ……………これは悪い夢なんだ……………ああ、最近疲れが溜まっていたんだろう。だから、無意識にふらふらくってこんな森に入ってしまったんだ!!そうだ!!そうだよ!!まったく、俺は何をしてんだか。さっさとこんな森からは出てしまおう」

そう。現実逃避である。

男は歩き出した。しかし、進んでも進んでも景色が変わることはない。まるで、終わりのない一本道を歩いている感覚に陥ってしまう。だが、それでも男は立ち止まらない。立ち止まったらこれが現実だと知ってしまうから。そして、不意に変化が訪れる。

体から力がふっと抜けたのだ。まるで蠟燭の炎が風に掻き消されるごとくふつと。

(どうなるんだろう……俺……死ぬのかな?)

視界が薄れていく。

何も感じない。むしろふわふわと浮いているような感じで心地よい。

『!!』

なんだろうか？誰か居るのだろうか？………どうでも、いいか……。ああ、ねむ……い……。

そうして、男は意識を手放した。

□ ■ □ ■

私の名前はアリス・マーガトロイド。魔法の森に住む魔法使いだ。主に人形を操る操作系の魔法を扱っている。

そんな私の習慣として週に二回人里に行き、人形劇を披露する。と言うものがある。今は森に迷いこんだ旅人が美しい女性に助けられ恋に落ちる。と、オリジナルで作った劇だ。一応最後は旅人は去っていくハッピーともバッドとも取れない終わり方をするのだが、劇ではどうするか決めあぐねている所だ。

「最後……どうしようかしら」

自宅へと帰りながら考えを纏めていく。

子供に人気が出るであろうはハッピーエンドだろう。しかし、自分が初めて作った物語をねじ曲げるのもなんだか嫌だ……。

「………ああもう!!」

頭をガシガシと掻き、一度考えを振り払う。

「はあ……。つて、あら？誰か……倒れてる!？」

少し先の草むらから片腕だけが飛び出していた。妖怪に襲われたのだろうか？それとも、迷いこんだのか……恐らく後者だろう。

魔法の森にはキノコや魔法植物等の孢子が満盈しているのである。中には無害なものも有るが、有害なものの方が圧倒的に多い。妖怪の私ですら孢子が濃い場所に生身では行けない程には危険なのだ。そんな危険な場所に普通の人間はまず来ない。来たとしても此処まで奥深くまで入ってくる事はなく、入り口付近の薬草を取って帰る程度である。まあ、例外もいると言えはいるのだが。

なんにせよ今はこの誰かの安否を確認しなければ。

草むらを掻き分けると、そこには一人の男性が倒れていた。

「もしもし?・聞こえますか?・大丈夫ですか!?!もしもし!!」

じよじよに声量を大きくしていくが、反応はなかった。しかし脈は安定しており、息も確りしている。恐らく睡眠系の毒素を含んだ胞子を吸ってしまったのだろう。

もしかしたら遅効性のもものも吸い込んでるかもしれないわね……。

家まで連れていきましょうか。

私は男性の体を担ぎ、帰路を急ぐのだった。

第2話 アリス・マーガトロイド

ふわふわとした感覚から一転、ひたすらに落ち続ける。暗い暗い、深い深い、終わりが見えない闇の中をただひたすらに……。

何れくらい経ったのか分からない。これが夢なのか現実なのかも分からない。いや、夢であってほしい。

そんな願いを叶えるが如く、終わりは唐突に訪れた。

目の前に現れた一本の突起。鋭く、闇の中でも目立つそれは、正確に落下し続ける俺の右肩に突きささき――

「――うわあああ!!……はあはあはあ……ゆ、め?」

ガバツ!!と起き上がり胸を押さえ付ける。少し落ち着いた所でドツと疲れが襲いかかってきた。額から流れ落ちた汗が握り締められた拳の上に落ちる。そうしてようやく『アレ』が夢だと確信を持てた。

恐る恐る右肩に手をやってみるが勿論何の変化もない強いて言うのであれば汗でグツチョリなっている事ぐらいか。

「……そう言えば、ここ、何処だ?」

夢だと確信出来たからか心に余裕ができたのだろう。漸く自分が森の中ではなく、かといって自分の家でもない、別の何処かの部屋である事が分かった。

「にしても、随分とオシャレな部屋だな」

額に浮かぶ汗を拭い部屋を見回す。花瓶に活けられた花や木製のテーブル。優しい印象の落ち着いた部屋だ。

「勝手に部屋の中を歩き回っても良いものか……」

現状を知るためには行動を起こした方が良いのだろうか……。

どうすれば良いか考えているとコンコンツツとノックの音が響いた。そして、俺が返事を返す前に誰かが入ってくる。

『あら、起きてたのね。どう?変な感じとかしない?』

「……………」

『ねえ、大丈夫?』

「……………ハツ!!あ、ああ。大丈夫。特に変な感じはしないよ」

いかんいかん見とれていた。いやはや、現実には誰かに見とれるなんて現象起こりうるんだな。

美しい金色の髪。サファイアのように輝く青色の瞳。服装こそ奇抜なものだが、整いすぎた容姿と絶妙にマッチしている。西洋の人形のように可愛らしく、手が届かない。いや、触れては行けない儂いものに感じた。

「えっと、貴女が助けてくれたのですか？」

「ええ。貴方道端に倒れてたのよ？驚いたわ。わざわざ人間が魔法の森のこんな奥まで来てるなんて思わなかったんだから」

「えっと、なんかすいませ……ん？あれ？『人間が』？」

まるで自分は人間ではないです。と言っているような口振りに違和感を覚える。

「何か可笑しな事を言ったかしら？」

「いや、あの……まるで人間ではないような言い回しだな。ああ、すいません。俺の勘違いですよね」

「……………ああ!!」

軽く頭を下げ謝ると、女の人は何かに気が付いたかのように声を上げた。

「貴方外来人なのね」

「がいらい、じん？」

外国人みたいなものだろうか？

「そう。貴方幻想郷って場所に聞き覚えは？」

「いや、聞いたことがないですが……」

「でしょうね。幻想郷は、貴方が迷い混んだこの世界の名前よ」

「はあ。それで？」

「少しは興味を持ってくれても良いと思うのだけれど……。幻想郷には外の世界で忘れ去られた者達が集う最後の楽園。つまりは妖怪や神。妖精なんか実在しているのよ。ねえ……何してるの？」

何って……こんなにイタイ発言ばかりする女性を風邪かなにかと勘違いすると言う方が難しい話である。流石に熱を計るために額に手をやったのは不味いと思うけど。

「あ、すいません。つい」

「疑っているのね。まあ無理もないか。そっちの世界では既に忘れ去られているんだから。因みに私は魔法使い。アリス・マーガトロイドよ。アリスで良いわ」

「俺は佐々木 松。助けてくれてありがとうアリスさん」

「呼び捨てで構わないわよ？」

「俺が構うんですよ」

いきなり初対面の女性を呼び捨てにしろなど、本人に言われても出来る筈がない。その相手が美人であれば尚更だ。にしても、容姿からして想像はしていたがやはり外国の方のようだ。それにしても日本語がかなり上手であるが。小さい頃から日本にすんでいるのだろうか？

「さて、少し話を戻すけど。幻想郷にはさつきも言った通り人ならぬ存在が存在しているわ。私もその一人ね」

「魔法使い……でしたっけ？」

「そうよ。どうせまだ信じていないようだし簡単な魔法でも見せましょうか」

アリスさんは右の手のひらを俺の方に向けパチンツと指を鳴らす。するとどうだろうか。俺の腕が勝手に動き始めるではないか!!その事に驚きを隠せずにいると今度は足が勝手に動き始めベットから立ち上がった。そうしてそのまま部屋の中を大きく一週し、またベットへと座る。

「どう？少しは信じてくれたかしら？」

「あ、ああ……。信じたくはなかったが、当事者として信じるしかないだろ……。なあ、今のはどうやったんだ？」

「今の？今のは貴方の体に魔力、魔法の源となるものを糸状に張り付けて動かしただけよ。操りに人形ならぬ、操り人間みたいなものかしらね。抵抗すれば簡単に糸が千切れるから戦闘には向いてないけど」
「すごいな……。アリスさんみたいなのが幻想郷には一杯居るのですかね？」

「口調、無理しなくても良いのよ？ええそうね。むしろ私なんてまだ

優しい方じゃないかしら？」

開いた口が塞がらない。呆れではなく驚きで。人間を操ることが出来るような存在がまだ優しい？幻想郷……一体どんな魔境なのか……。むしろ良く生きてたな俺……。

「さてと、幻想郷の事や種族の事について信じて貰えたところで別の話をしましょうか」

「別の話？」

「ええ。ぶっちゃけると貴方の体について。もう少し詳しく言うのなら貴方が吸ってしまった毒素の治療についてね」

「毒素……。具体的にどんな毒を吸ったのかったのは分からないのか？」

「難しいわね。百年近く住んでるけど森全体の環境を把握しているわけではないの。最悪なパターンとしては突然変異種。即効性だったらもうお手上げだったけど、その様子はなさそう。でも、遅効性の可能性はまだ残っているわ——って、ちゃんと聞いてた？」

「聞いてた……。聞いてたけどこんな可愛い子が俺よりも圧倒的に年上だったという事実を知って放心仕掛けていただけだ……」

「それってちゃんと聞いてたのかしら？それと、幻想郷で『見た目〓年齢』は通じないわよ。特に力が強い奴等はね」

「そ、そうなのか」

「ええ。それと、もうひとつ言っておくと、幻想郷で長生きしたいなら年齢の話は極力しない事ね。特に妖怪の賢者に対してはね。下手したら存在を消されるわよ」

妖怪の賢者……。一体どんな化け物なのか……。大男？いや、年齢の話がタブーだからお女性だろうか？案外絶世の美女だったりな。いや、それはないか。

なんにせよ年齢の話はしないこと。これは覚えておかないとな。

「はあ……。また話がそれた」

「なんかすいません……」

「……謝られたら私が悪いみたいじゃない。兎に角話を戻すわよ。で、戻して早速だけど数日の間は此処で暮らしてもらおうわ。長くても

「一週間ぐらいね」

「え？いや、どうして？」

「どうしてもなにも折角助けたのに死ねたら後味が悪いでしょ？」

「悪いでしょ？って言われても……いや、俺は願ったり叶ったりなんだろうが……。アリスさんは良いのか？こんな見ず知らずの男と一緒に住むなんて」

そして俺の理性も壊れそうで怖い。と言う本音もある。

いや、手を出すつもりはないが……。万が一と言うことも有り得るからな。

「住人が一人増えたところで特に問題はないわ。あ、襲おうなんて考えないことね。でないと……」

アリスさんがゆっくりと窓辺に近付き、窓辺にあつた花瓶を手に持った。そして……

「こうなるから」

パリンッ

花瓶がガラス細工を地面に落としたときのように、アリスさんの手の中で粉々に砕け散った。

もしあれが、あの手の中に自分の頭が有ったとしたら……恐らく、いや確実にザクロが弾ける事だろう。

「い、イエッサー」

「よろしい。それじゃあ……まずはお風呂ね。もう少しで沸くでしょうから待ってて頂戴」

「分かった。何から何までありがとう」

「困った時はお互い様よ」

「そう言ってくれると助かる」

アリスさんは俺の容体を確認しにきただけの様で（起きていたせいで少しの間話したが）、最後に砕け散った花瓶を魔法で元通りにした後部屋を出ていった。

「魔法ってのは便利なものだな……花瓶が元通りだ」

少しばかり魔法と言うものに憧れながら呟いた。

『松ーお風呂いいわよー』

「分かったー」

こうして、俺の幻想郷でのんびりとした生活が始まった。

第3話 幻想郷

家主であるアリスさんよりも先に風呂を頂き、軽く汗を流す。流石に女性の使っている石鹸を聞きもせず使うのは躊躇われた。

汗を流し、風呂から上がり、アリスさんが準備してくれたのであらう洋服に袖を通す。少しばかり小さいがそこは気にしてはいられない。あまり激しく動かなければ破れるようなことはないだろうし。生活に支障はでない。はずだ。

そして、風呂場から出た俺は目を疑った。現代でもあり得なかったその光景に、口を閉じることを忘れていた。

「アリスさん。あがりまし、た……よ？」

「あ、もう上がったの？男性のお風呂は早いつて聞くけど本当なのね」
そう微笑みながらお茶の準備をしているアリスさん。そして、その傍らにはせつせと動いている人形。空中に浮き、戸棚からお菓子をとり出している『人形』があつたのだ。

そして、その人形には表情があつた。楽しそうにお茶を出す姿は人形と呼んで良いものかと考えてしまうほど。しかし、その大きさは赤子ほどしかなく、もっと言えばそれ以外に人形と判断する材料がなかった。

「……どうしたの？」

「え、あ、いや……その人形は一体」

「ああ、上海のこと？」

「人形……ですよね？」

「ええ。自立型人形の完成形。今は人形と言うよりも付喪神の方が正しいけどね」

「付喪神？」

「ええ。付喪神。一応他の子達も居るけど成功したのは上海と蓬萊ほうらいだけなのよね。一体何が鍵となっているのか……。それで？他に質問は？」

アリスさんは手を休ませることなくスラスラと簡潔に説明を済ませた。しかし、その興奮した声色やキラキラと輝く目は見た目相応

の、こう言つてはなんだが子供らしさを感じた。もし、アリスさんに犬の尻尾が存在したのであればブンブンツと忙しなく揺れている事だろう。

ふむ、アリスさんも色々話したいのだろうし、どうせだから色々話を聞かせてもらおうことにしようか。



「つ、疲れた……」

あの後魔法、魔術について永遠と語られた。晩御飯を作っている最中も食事中もずっと。その事自体は情報を得ようとしている身として有り難いことではあったが、如何せん専門用語らしきものが多すぎて分からないことの方が多かった。

魔術回路やら神秘やら呪術について。魔法と魔術の違い。研究している完成形自立型人形について等々……。正直魔法と魔術の違いなんて細かすぎて良く分からなかった。あれだ、奇跡的なことは魔法的感覚だ。他の事についてもそんな簡単な事しか分からなかった。

ただ、同時に幻想郷と言う場所に付いても教えてもらうことが出来た。

まず幻想郷と言う場所について。幻想郷とは忘れ去られたもの（妖怪や神様等といった存在の事）の最後の楽園らしい。なら、そこに迷いこんだ俺も忘れ去られたものに当てはまると言われると、一概にそうとは言いい切れないようだ。幻想郷に訪れる。または、迷い混む方法は三つ存在している。

一つ。外の世界で忘れ去られる。もしくは、必要とされなくなる。
二つ。幻想郷を隔離する結果に綻びが生じ、偶々そこに居合わせる。自殺願望者等は自然と引き寄せられる傾向があるらしいが、幻想郷に迷い混む事は希らしい。

三つ。八雲紫と言う妖怪の賢者に連れてこられる。もしくは、八雲紫の開いていた境界と言うものに落ちてしまう。

この三つが幻想郷に迷い混む方法。これに当てはめるなら二つ目の偶々結界の綻びの近くに居て迷いこんだか、三つ目の八雲紫に連れてこられた。境界に落ちた。の何れかだろう。

そして、さらにそこから絞り混むと、一番強い説は二つ目か。缶を拾って、振り返ったら幻想郷に迷いこんでいた。落ちていく感覚も、誰かに会った記憶もない。

「まあ、だからなんなんだって話だけどな」

さつきまでの考えを簡潔に纏めてみたメモ帳をベットのの上に放り投げ、自身も一緒にベットへと寝転んだ。

両親とは仲が良いわけでも、悪いわけでもない。一言で言えば、冷めている。両親へ積極的に関わろうとしない。両親も同じく、俺に執念に関わろうとしない。だから、家を出て一人暮らしになって約六年。両親への連絡は右手の指で足りる程で、その内容も形としての引越しが無事終わった事を知らせるだけのものではあった。

その後はそこそこの企業に付き、寂しい生活を続けるばかり。女性なんかにも縁はなかった。それでも何不自由なく、誰にも邪魔されず生活できる。と言うのだけで俺は満足していた。それでも、あの夜のように寂しく感じることもあったのだが。

「ほんとと、悲しいことに帰る理由が殆ど無いんだよなー」

強いて上げるとするなら……：仕事が残っている事ぐらいか？

それ以前に俺が居なくなった事に気付く人は居るのだろうか？いや、仕事場の誰かが流石に気付くか。

「さてと……：幻想郷への無駄な考察は止めにして、次はこの森、魔法の森について無駄な考察を始めるとしよう。完全に暇潰しになってるな……」

頭の上辺りに落ちているメモ帳を取り、ペンを持つ。

この森は魔法の森と呼ばれている。

その名の通り魔力と呼ばれる精神の源の様なものを多く含む植物が多く生息しているらしい。食人植物もせいそくしているとアリスさんは言っていた。

そして突然変異種も数多く存在しており、長年住み続けているアリ

スさんでも把握仕切れていないとのこと。俺がアリスさんの家にゴ
厄介になるきつかけとなったのも突然変異種の毒で死ぬ可能性がゼ
ロではないからだ。一応解毒はしたと言っていたが。それでも、安心
は出来ないとのこと。

「……………こんなもんか？にしても俺が女と同居……………ねえ。人生何が起こ
るか分かったもんじゃねえな」

再度メモ帳をベットのの上に放り投げる。対して俺はベットから起
き上がり窓から外を眺めた。

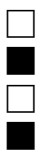
まるでおとぎ話に出てくるような深い深い真つ暗な森。空には満
点の星空。その中でも一際目立つ半月。多分上弦の月だろう。現代
日本でもそう見ることが出来ないであろう美しい世界がそこには広
がっていた。

「そう言えば……………月の明かりで活性化する植物も有るとかなんと言っ
てたな」

名前は忘れたが満月の日には青白く発光する魔法の森にしか生息
しない植物で、確かな形を持たないらしい。キノコのようなものも有れ
ば、蔦や雑草の形のモノもある。ただ、性質は一緒だとかなんとか。
今研究している植物らしいので特に熱く語っていた。そりやあも
う、食べていた料理のソースが俺の顔に飛んでくるレベルで……………。

「……………やることないし寝るか」

子供のようにベットに飛び込み、襲ってくる微睡みに身を任せ、俺
は瞼を閉じた。



眩しい光が瞼が越しに突き刺さり、俺は半強制的に目を開くことと
なった。

「う……………まぶし……………」

「シャンハイ」

「……………うおっ！」

瞼を開けた俺の目の前には、俺の腹の上辺りをプカプカと浮いてい

る自立型人形『上海』が居た。

「起こしに来てくれたのか？」

「シャンハイ」

上海は大きく頷いた。子供には縁がなかったが、もし娘が居たらこんな感じなのだろうか？

ふよふよと回り始めた上海に癒しを感じ、俺は重たい体をゆつくりとベットから起こした。

上海に先導され台所まで来た。そこにはこの家とは似つかわしくない和風な朝食が並んでいた。

「あ、起きたのね。おはよう」

「あ、えっとおはよう」

少し詰まってしまったのはしょうがないと思う。助けて貰って、一日共に過ごしているとはいえそれでも他人であることにはかわりない。

しかし……挨拶とは良いものだ。心からそう思った。

第4話 外への憧れ

台所に二つの影。俺と上海のものである。

アリスさんは俺の生活用品を買いに人里と言う場所に向かった。流石に俺も付いていこうとしたが、仕事の次いでだから、それに今結界の外に出て下手に毒を吸ったりでもしたら本末転倒よ。と言われ付いていくことは出来なかった。

「かと言っても何もしないのもなあ」

「しゃんはーい？」

関係はないが上海は俺に何か有ったときの為にアリスさんが置いていってくれた。

「結界からは出れんしなあ」

「シャンハイー」

上海が出ちやダメだ!!と言うよに両手を広げた。可愛いなコンチクシヨウ。

とは言っても、上海がそんな事をしても俺は外には出られない。何故ならこの家一帯には結界が張られており、毒の孢子等が入ってこないようになっていられるらしい。仮に外に出たとしても結界の範囲は狭く、家から出て三步後には結界の外だ。

「……動かないって意外と暇なんだな」

「しゃんはーい」

うんうん。と、共感するように頷く上海。

これまだ動いてるから良いが、上海が普通の人形だったら完全に危ない人だな。

「……っし!!掃除すツか!!」

「シャンハイー?」

「掃除するんだよ。流石に人に自分の物を買に行かしてる。それに居候の身だからな。それぐらいはやらないと。流石にやれたとしても台所だけだろうが。許可なく他の部屋に入ったらマナー違反だからな」

「しゃんはーい!!」

「お、手伝ってくれるのか？」

上海は何処から出した雑巾を片手に拳を天高く突き上げていた。

もう、本当、あれだ……可愛い。うん。俺にも子供(?)を可愛いと感じる感情が有ったんだなと思う今日この頃である。

「よし、それじゃあ頑張るか!!」

「ジャンハイ!!」

□ ■ □ ■

「……………やり過ぎた感がヤバイな」

「しゅんはーい……」

俺と上海は時間を忘れ台所のみをひたすらに、ただひたすらに……それこそ少しくすんでいた木材たちが太陽の光を反射し眩しいほどには。

上海は何処か疲れた様子で机の端でぐでーっとなっている。

そして、掃除も終わり二人してぐでーっただらしなく突っ伏していると、家主であるアリスさんが帰ってきた。

「ただいまー……なにしてたのよアンタたち……」

「おかえりなさいアリスさん。まあ、なんと云うか掃除に熱が入ったといえますか……」

「しゅんはーい……」

「はあ、まったく……掃除してくれたのはありがたいけど、一応自分が病人だって事忘れないようにね」

アリスさんは優しく微笑んだ。

本当に、幻想郷に迷い混んで最初に出会った人がアリスさんで良かった。

■ □ ■ □

今日の人形劇も無事終わった。

一回で終わるストーリーではなく、オリジナルの長編の為か客足も安定している。それは大変喜ばしい事だ。事なのだが、物語の最後がまだ決まっていない。かといって時間は待つてはくれない。

「はあ……本当にどうしようかしら」

そんな事を呟きながら松用の服を数着見繕う。流石に人形用の服をある程度縫い合わせた物では可哀想だろう。後は食品類を買いうぐらいか。

「おや？アリスがこんな所に居るとは珍しいな」

「あら慧音じゃない。その言葉そっくりそのままお返しするわ」

青を基調にした服を着こなす、銀髪の女性。人里で子供たちに勉を取っている『上白沢^{かみしろさわ} 慧音^{けいね}』。この人里の守護者でもある。しかし、彼女は人間ではない。人と妖の間に生まれた存在。俗に言う半妖と言うやつだ。

「これは手痛い返しだな。それで？なんで男性用の服を見ているんだ？」

「つい先日魔法の森で倒れてた男性を助けたのよ。一応解毒はしたけど念のため一週間ぐらい家で様子を見ようと思ってね」

「なるほど。確かに魔法の森の毒は厄介な物が多いからな。にしても不思議なものだな」

慧音はその顔に面白いものを見つけたといじの悪い笑みを浮かべ私の顔を覗いてくる。

「な、なによ」

「いやなに。今アリスがやっている人形劇とそっくりだなと思ってな」

「……なにかと思えば……そんな馬鹿な事を言っていないで仕事でもしてなさいな」

内心焦っていた。

言葉には力がある。言霊と言う言葉が存在するように。たった一言で運命が変わるなんて日常茶飯事だ。そして、それはその者の力が強ければ強いほど、言葉の意味を知っていれば知っているほど、想いが強ければ強いほど、劇的に変わっていく。それは最早一つの在り方だ。世界の法則だと言ってもいいかもしれない。

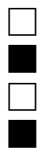
つまり、だ……。私の人形劇への、あの物語への思い入れが強すぎて何かが変わってしまったのかもしれない。

「……そんな事あるはずがない……っか」

気が付けば既に魔法の森へと戻ってきていた。手には今日買うはずだった男性ものの衣類や食材たち。どうやら慧音に言われたことについて深く考え込んでいたようだ。

はあ……。と、小さく溜め息を一つ。もう何百年と生きているのだ。今さら幸運が去ったとしても気にはしない。

早く帰って紅茶でも入れましょう。そう心に決め私は帰路を急いだ。



歩いて十分程度で私は家にたどり着いた。

何時もの道程が異様に長く感じれたのは勘違いではないだろう。だが、そんな長い道程を歩き、私は遂に我が家へと帰ってきたのだ。

何時ものように取っ手に手をかけ、開く。そして、何時ものように声を出す。

「ただいまー」
と。

しかし、何時もの私に待っていたのは何時もとは違う光景であった。松が居ることは知っているから関係はない。しかし、しかしだ……。

「……なにしてたのよアンタたち……」

流石に同居人が机に突っ伏していたら驚くだろう。しかし、私の場合は呆れが来た。何故か？彼等の近くにある片付け忘れたのである。う箒が一本立て掛けてあったから。

「おかえりなさいアリスさん。まあ、なんと云うか掃除に熱が入ったといえますか……」

やっぱり。掃除でそこまで疲れるなんて……いや、掃除してくれたのは嬉しいのだ。ただ、自分が一応病人だつて事を覚えているのだろうか？

「しゅんはーい……」

上海まで……

「はあ、まったく……掃除してくれたのはありがたいけど、一応自分が病人だって事忘れないようにね」

二人は小さく返事を返した。

それがなんだか可笑しくて少し笑ってしまった。

□
■
□
■

あれから一週間。相も変わらずアリス亭にご厄介になっている。

もうそろそろ外に出られる頃だろうか。外に出たら取り敢えず人里に向かつて職を探さないと。

□
■
□
■

それから四日。あまり体調が宜しくない。

病人モドキだからと言って動かなすぎたのが原因だろうか？

□
■
□
■

更に一週間。窓を開けたりと体調管理をし始め健康そのものとなった。

だが、アリスさんは外に行くのは危険だからと外に出してはくれない。

□
■
□
■

更に一週間。流石の俺でも疑わざる終えない。

本当は信用したいが、疑いたくはないが、過保護と言い切ってしまう。せばそれで終わるのだが、何時しか俺は外に憧れを持ち始めた。持つてしまった。鳥籠に囚われた鳥のごとく。あの青空の下を。優々と

自由気ままに歩きたいと。



外に出たくなかった。だから、アリスさんに問い掛けた。『もう外に出ても大丈夫じゃないのか?』

しかし、アリスさんは俺の思いを一蹴した。

「だめよ」

「なんでだ?」

「危険だから。大丈夫。私がどうにかしてあげルから」

「最初は一週間もすれば大丈夫だろうって言っていたじゃないか。なあ、少しくらいいいだろ?」

俺はしつこく言い続けた。そのこと事態は良くない事だと自覚している。

だが、外への執念にも似た憧れ。その思いだけが俺を突き動かしていた。

「いい加減にしなさい松」

怒鳴るわけでもない、まるで子供を諭すかのように放たれた言葉。その言葉に俺はハツとし、自分がとても情けなかった。

アリスさんは俺を見捨てても良いのだ。なのにこうして衣食住を留意してくれ、看病までしてくれている。なのに、俺は……………。

『大丈夫……………エエ。だいじようブヨ。松はずっと……………ズーツト私を頼ってればいいイノ』

その笑顔はとても美しかった。

三日月のような口。光を宿さない瞳。その整った顔立ちはそんな不気味なモノを顔の上に置いてなお美しく、そして気味が悪く、俺が彼女を疑うようになるには、余りにも強烈すぎた。

第5話 疑い

何時からだっただろうか。彼が私の生活の一部、私の日常と化したのは。

『ただいま』と言えば『おかえり』と返ってくる。

何時も一人の家、冷たい家に温もりを感じた。

私が人形に望んだ『ナニカ』を、既に彼はもっていた。

だから聞いてみたのだ。

いや、ただ私は彼との話の種が欲しかったただだけだったのかもしれない……。

□ ■ □ ■

「ねえ、松。少し……少しだけ良いかしら？」

「？何か分からないけど俺なんか力が力になれるのなら力になるよ」

彼は優しく微笑んだ。

だから、私は安心して話を切り出した。

「実は……」

それは、私が作った物語のこと。

私が決めあぐねているあの物語のこと。

「そうですね……突っ込みじゃいますけど、それってどっちがハッピーエンドなんですかね？」

「え？どういうこと？」

「だって男は何か目的あつて旅をしていたのでしょ？それを諦めてって言ったならあれですけど、兎に角手放して男はその場に残る。旅を続けるなら女をおいていくことになる……。夢か愛か、どっちかを犠牲にしてどっちかを手に入れる。つと、すいません。ド素人がこんな知った顔して話しちゃって」

「ううん。ありがとう。まさかこんなに意見してくれるなんて思ってたなかったから。うん。本当にありがとう」

「そう言ってくれると言ったかいましたよ。頑張ってくださいね」

彼は頭を下げてお礼を言う私に、少し困った笑顔を浮かべながら激励の言葉を投げ掛けてくれた。

その顔が、その表情が、何故だか、異様に、愛しく感じて、悪戯をしたくなった。

「……少し前ね」

「？」

「松との関係を話したの。その相手がね？こんな風に言ってきたのよ『いまやっている人形劇とそっくりだな』って」

「……言われてみればそうだな」

「ねえ、もし、もしよ？私と夢を選ぶ事になったら……どっちを選ぶ？」

「……へ？」

まの抜けた声が静かに部屋の中を木霊する。

彼の顔には、どうしてそんな事を聞くのか？と言うのが浮かんで見えた。

しかし、そんなこと私にも分からない。ただ、何故か愛しく感じてしまっているのだから。

「ねえ、どうなの？」

「いや、えっと……その……俺は外に行きたい、です」

「……そう」

「で、でも、俺がちゃんとお金を稼げるようになったら、その時はきちんとお礼をしに戻ってきますよ」

彼は困った笑顔で微笑んだ。



私は嬉しかった。

私は嬉しかった。

私はうれしかった。

私はうれしかった。

私はウレシカッタ。

私はウレシカッタ。

私はウレシかった。

私はウレシかった。

だから手放したくなかった。

でも、彼は外の話ばかりを話していた。

このままじゃ彼が外にいつてしまう……。

また、一人になってしまう……。

どうにかしないと……。

どうにかしないと……。

ドウニカシナイト……。

ドウニカシナイト……。

ドウニカシナイト……。

ドウニカシナイト……。

取り敢えず今はまだ心配だからでどうにかなっている。

だが、それではダメだ……それだけでは足りない……。

だから毒を盛った。料理はバレる可能性がある。だから、花瓶の花を毒の花粉を飛ばすものに移し代えた。

だめだ。

だめだ。

ダメダ。

ダメダ。

ダメだ。

ダメだ。

彼は気付いていなかった。

少し体調が悪いと言っていた。そして、換気を始めた。

体調が良くなってきたから運動した方がいいかな。と、運動をするようになった。

彼は外に出るつもりだ。

いけない。

いけない。

イケナイ。

イケナイ。
イケナイ。
イケナイ。

遂に彼が聞いてきた。

焦ったかのように、鬼気迫った様子で……。

だから私は言った。ずっと私を頼ってくれればいいと。

まずい。

まずい。

まずい。

まずい。

まずい。

まずい。

まだ準備が整っていないのに……どうしようドウシヨウドウシヨウ……。

取り敢えず道具を揃えないと……。



アリスさんが人里に向かった。

今日は遅くなると言っていた。

これを逃したら次いつ逃げられるか分からない。

アリスさんを疑いたくはなかった。しかし、疑わざるを得なくなっ

た。最初に違和感を覚えたのはアリスさんに助けられて一週間過ぎた頃。彼女が聞いてきた物語への質問の後ぐらいだった。

その先日は俺がアリスさんの家を出るための準備を進めていたのだ。俺は手伝わなくても良いと言ったのだがアリスさんは率先して手伝ってくれた。が、質問に答えた翌日になればどうだ？荷物を纏めるどころか荷を解いて俺を押し止めた。まだ、その時は何でだろう？程度にしか思っていなかった。むしろそこまで他人の俺を気遣ってくれているのかと嬉しくさえ思った。

その違和感がハッキリしてきたのそれから……三日か四日ぐらい

経ったころ。アリスさんが花を取り替えた。それ自体は特に何の違和感もない。しかし、その花が妙に毒々しい。そして、その日から妙に体が気だるく感じるようになった。そして、換気を小まめにするようにしたら一週間もすれば気だるさを感じなくなった。十中八九あの気だるさの原因はアリスさんが取り替えた花が原因だろう。

そして、更に一週間。今までも疑ってはいた。が、心の大部分で命の恩人であるアリスさんを疑いたくはなかったし、何処か信頼していた。だが、夜中に聞こえてくる声が俺のアリスさんへの疑いを強くしていく。微かにしか聞こえはしないが『準備をしないと』や『はやくはやくはやく』そして、決定的になった『新しい手足を……』。

手足はまだ日常で使うかもしれない。しかし、その言葉の前に『新しい』が付いたら……想像したくない。けれど、脳が連想してしまう……。嬉々として俺の手足を切り落とすアリスさんのすがた『しよう……』

ビクッ!!

「な、ななんだ?こんな夜中に」

「いえ、少し要が出来たから……寝てなかったみたいだから一応言いに来たの。出来るだけ早く戻るわ……イッテキます」

「あ、ああ、そうか。気を付けてな。いつてらしゃい」

キィィ……バタンツ……

木製の扉が軋む音が静かに鳴り、そして妙に重々しく閉まった。

窓の外には里へと続くであろう街道をゆっくりと歩いていくアリスさんの姿。

どうする……逃げるか?いや、しかし命を救ってもらった身としてそれはどうなんだ?もしこれが俺の勝手な勘違いだったら……。

いや、でも、どうしてこんな夜中に出ていったのだろうか?『新しい手足』とやらと何か関係しているのだろうか?そもそも『新しい手足』とは一体何なのだろうか?そう言えばアリスさんは人形を作るのが趣味、仕事?のようだし、人形用の手足の事かもしれない。いや、そうに違いない……ちがいない……んだ!!

「……………クソツ!!」

どうしても嫌な方向に考えを進めてしまう自分に嫌気がさす。

「……はあ。駄目だな俺。命の恩人を信じられない屑だったなんて……。出ていくか」

メモ帳に『今までお世話になりました。ありがとうございます。何時かキッチンとお礼をしに来ます』とだけ書いてテーブルの上に置く。

命の恩人にキッチンとお礼を言わないのはどうか思うが、恩人を疑うような屑と一緒に居るのは少なくとも良い気持ちではないだろう。そう心に言い聞かせるようにしながら外へと続く扉に手を掛ける。

そして、約一ヶ月ぶりに外へと出る。

外は満月。十六夜だろうか？生憎と月には詳しくはない。

振り返り、一度アリス亭にお辞儀。

思い越すことは数多くある。今ならまだ戻ることもできる。戻ってキッチンとお礼を言うことも、出来る。

しかし、今の俺では心からお礼を言うことは出来ないだろう。

「また戻ってくるから」

そう、小さく呟いて、俺は外へと足を踏み出した――

『……………』

第6話 一筋の光

一ヶ月と少しぶりの外に多少の感銘、何も言わずに出てきてしまったと言う罪悪感等が入り交じり、訳がわからない感情を生み出している。

外へと続いているのであろう街道は真夜中だと言うのに月明かりで問題なく歩けた。

アリス亭を出て早十分。もうそろそろ外に出られるのではないだろうか?と思いつながら進んでいると、前から見慣れた人物が走ってきた。

俺は反射的に上げようとした手を止めた。

挨拶も無しに出ていこうとした屑が家主に対して気軽に挨拶をしていいものなのか?

と言う自問自答からから、友人のように手を上げて挨拶するのが躊躇われた。

俺がそんな事を考えていると、その人影は、アリスさんは俺の目の前まで迫っていた。

「あ、えっと……」

「何をしてるのかしら?」

「その……」

「何をしてルノカしら? 言えないコトナの? ネエ?」

「うぐツ……アリス、さん……」

アリスさんが伸ばした腕は俺の首を掴み、宙へと吊り上げた。

息が出来ない苦しいクルシイくるしい。酸素を取り込もうと口をパクパクと何度も開くが、一向に肺まで酸素は届かない。手先足先から徐々に感覚が無くなっていき、目の前が赤く点滅する。

『だいじよウブよ松。直ぐ二直してアゲルカラね』

白と黒と赤とが点滅を続ける世界でアリスさんはそう言った。

まるで死んでも生き返らせてやろうと言うかが如く、淡々と、恍惚に、そよい放った。

感覚が既がない体がぶるりと震える。

本能が逃げろツ!!と言っているのが分かった。

必死にもがく。感覚がない体を必死に動かしてもがき続ける。すると、足先に何かがぶつかつたと同時に地面へと叩き付けられる。

「がはあ!!はあはあ……」

唐突に体内へと侵入してきた酸素は口を鼻を通り、肺に溜まり、体全体へと流れていく。赤、黒、白と点滅していた視界も正常に元の景色を写し、目の前には木を背に横たわるアリスさんの姿も写った。恐らくがむしやらに振った足がアリスさんにぶつかつて、そのまま後ろの木に後頭部でも強打したのだろう。多分死んではいはず……。死んで……ないよ、な?」

ピクリとも動かないその姿に、やってしまったのか?と不安を覚える。いや、気絶しているだけだと言い聞かせるも、不安は増していく一方。

どうする近付いて安否を確認したほうが良いのではないか?だが、こつちも殺されかけた身……。いや、だが……。そう、そうだ……。死んでないのを確認して逃げればいい……。それなら大丈夫……。だいたいしようぶ……。

そろりそろりと近付き、アリスさんの肩を揺らす……。反応はない。身体中の血の気がサーツと引いていく。少し震える手で右手首を掴み、脈を確かめてみるとドクンツドクンツと力強く脈打っていた。生きていた事への安心に体から力が抜ける。だが、ここで起きてまたさつきと同じような事になったら……。つい先ほどの恐怖が蘇り、早く逃げようとアリスさんの右手首から手を離した――

――ガシツ!!

「ひツ!!」

『ねエ……ドクにいくのオー?』

耳にまとわりつくようなネットリとした声が静かに届く。

逃げようとしても、逃げられない。さつきまでアリスさんの手首を掴んでいた腕が、今度は逆に自分の手首掴まれたからだ。逃れようと

腕を引っ張ってもまるで石像を相手にしているかのようにビクともしない。

「くそッ!!くそッ!!クソッ!!」

目から止め止めなく涙が溢れてくる。兎に角逃げないと、逃げないとッ!!そんな考えだけが渦巻いている。

『ネエ……ドコにいくの力聞ってるデシヨ?ねエ』

ビキビキビキッ!!

「うぎゃああああアアアああッ!!アッ!!アアア!!はな、はなぜエエ!!」

握り絞められた手首から嫌な音が鳴り響く。

どれだけ泣き叫ぼうとも、どれだけ逃れようと引っ張っても、何も意味をなさず、そして――

――グブウチャ

その呆気ない音と共に握りしめられ、腕と手首が離れた。

急に訪れた解放に、尻餅をつく。何が起きたのかが理解できない。したくない。

右腕の先には本来有るべきはずの五本の指も、手のひらも、手の甲も何も存在していない。手首から先が消え、手首が繋がっていないければならない場所からは紅い液体が湧き水のように吹き出している。

では、手首から先は何処に行ってしまったのか。目の前にはアリスさんしかいない。そして、アリスさんはその両手に赤黒い妙に生々しい『ナニか』を大切そうに抱えていた。

しかし現実はあまりにも非常で、残酷で、残忍で、目を反らす事すらも許してはくれなかった。

「あ……ああああ……あああああああつあおあつああああ
!???!?!?!?!」
もはや痛みですらない激痛に声を荒げる。

しかし、そんな中ですらハッキリと聞こえる一つの声があった。

『アは……アはアはあハアはアハアはアハアはアハアハあハアハアハアハアはアはあはあはハハはアアハハハハはあはは——』

その笑い声とも、奇声とも取れる声に体が震え、気付けば背を向けて走っていた。痛みも忘れ、ただがむしやらに。耳にまとわりつくようなあの声から逃げるように、ただがむしやらに走り続けた。

『そとはア……アブないのヨオ?』

「!?」

唐突に目の前に現れた人形。その人形の手には一本の武器が握り締められていた。

月の明かりを艶かしく反射するソレは一本の針、ランスと呼ばれるものであった。ランスを持った人形はゆっくりと、正確に右肩を狙い突進。少しその針が刺さった所で急停止。そして、ゆっくりと俺の肩を挟り始めた。力を入れる度に血が吹き出し、人形の青い服を赤く塗りあげていく。

声なんて出なかった。いや、出せなかった。まるで口を縫い合わされたように。

目からは紅い涙が流れた。声が出せない代わりとなつて、紅い涙が。

『んツ——!!』

そこから何が起きた力なんて分からない。

人形が地面に落ち、後ろからはさつきまでとは違う荒げる声が聞こえた。

訳が分からなかった。けれど、逃げられると希望を見いだした。真つ暗闇のなかで一筋の光を見た。

走った、走った、走った走った走った走った走った走った走った走った走った走った走った走った走った走った

そして、見つけた。

淡い光を放つ建物を。

あの家とは明らかに違う建物を——

の靴だろうとも推測できる。

さつきまで痛みに悶え苦しんでいたのに、今は何故だか痛みを忘れられていた。

恐怖

痛みを忘れられていたのが何故か……。俺はこのあと、当然現れた扉から入ってきた女性を目にして文字通り痛感する事となる――

美しい金色の髪。暗い深海のように酷く澄んで、酷く濁った、サファイアのような青色の瞳。その奇抜な服には所々に赤黒い斑点が浮かび上がっている。西洋人形のようにかわいらしいその顔は、頬が赤く上気しており、美しさの中に隠しきれない不気味さを漂わせている。

彼女の名はアリス……アリス・マーガトロイド。俺の右手を……握り潰した女。

理性が、本能が、願望が、動こうとしない体に逃げろと命令を下すも、蛇に睨まれた蛙の如くビクともしない。今俺の体で動いているのは、目とそこから流れる涙のみ。

彼女はゆっくりと、ゆっくりと、怒りとも歓喜ともとれる濁った瞳で俺のことを見つめながら近付いてくる。

そして、そつと伸ばされた量腕が俺を優しく押し倒す。抵抗することもせず、なされるがまま押し倒された俺は、後ろのベットに倒れた。ポフンと間の抜けた音が奇妙に部屋に響く。

『……………』

彼女は何も発しなかった。代わりにピーーと甲高い音が耳につく。それは糸だった。細い、細い、タコ糸よりも細いであろう糸であった。彼女は糸を俺の右肩に巻き付けた。

もう、この後起きることなんて想像出来ていた。しかし、抵抗でき

なかった。抵抗してはいけなかった。

そして――

「あ――」

――右腕が切り離された。

「ミギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

意図も容易く行われた現実へのうち回る。

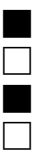
熱い熱い痛い痛いいたい痛いイタイイタイイタイイタイ痛いいたい痛いイタイ痛いいたい!!

のたうち回る体を彼女は力付くで抑え、今度は左の肩に血に濡れた糸を巻き付ける。

『大丈夫……スグにナオシテあげるカラ……アは……アハハハはははハ!!』

――ブチンツ!!

そんな音が聞こえた――



深い深い森のなか……。そこには二つの影がある。

「それじゃあ行ってくるわね松」

「ああ。気を付けてね。いつてらしゃい」

方や人形のように麗しい女。方や車椅子に座った男。

女と男は仲むつまじい夫婦のように挨拶を交わす。

それは、何も知らぬ者からすれば羨ましくもあり、そして微笑ましいものである事だろう。そう……何も知らない者からすれば……。

男には手足がある。しかし、その手足はピクリとも動かない。ただ重力従いぶら下がっているだけだ。

パツと見では手足が折れているのかと思うだろう。よく見ればそれがただ折れている事ではないことが分かるだろう。しかし、その手足がどうなっているかは分からないだろう。

何故なら、男自身も自身の体がどうなっているのかを理解していないから。いや、違和感を、疑問を持つていないからと言った方が正しいだろう。

『クソ……ッ!!どこだよこッ!!』

それ以前に感情と言うものを持ち合わせているのかすら怪しい。男は女が去った今も、出入口である扉を光を通さないその目で微笑みを浮かべたままじっと見つめ続けているのだから。そして、その表情すらも一切動かない。完璧に『作られた』かのような笑顔は一切動かない。

『出せ!!出してくれッ!!』

男の心は動かない。動くことを許されない。

たとえ、心の奥底で何かが叫び続けようとも、決して、けっして動くことを許されない……。

『なんだよ……俺が、何をしたって……クソッ……』

しかし、その心の奥底で叫ぶ存在は今の状況が一番良いのかもしれない。

だれしも……自身が――

――『人形』になった現実を受け止めるなど到底無理な話だから

「ただいま松。良いコニしていたカシラ？」

「お帰りアリス」

そして今日も、光を通さない、色を写さないその瞳は女だけを写す。その手足は女の指と連動し女を抱き締める。

その口は女を満足させる為だけに声を出す。

そこには、一人の麗しく、狂った女性。方や良く作られた男の人形。端からみれば、幸せな空間かもしれない——

しかし、そこに女が望んだものは存在しているのか——

『愛しテルワ松』

『アイシテルヨアリス』

「誰か……助けてくれよお………」

——それは、言うまでもないだろう——

END 1

人形

END

第7話 足手まとい

右腕を必死に押さえ、家の扉を押し開ける。

『な!?!いきなりなんだ!?!』

中には人がいた。

これで助かる……ッ!!

血の涙とはまた違う何かがかぼれ落ちる。

『お、おまつ……随分とやられてるじゃねえか!!ま、待ってる!!え、えつと応急処置でつて、右手が……ッ!!それによく見たらこの武器つてアリスの……え、じゃあこれ……』

人影が何かをぶつぶつ言っている。声からして女の子だろうか? くそッ、涙と血で前が良く見えんッ……兎に角、兎に角事情を説明しない……。

『いやいやそんな訳ないか。大丈夫か?もうすぐ血が止まるからな?後は……一応魔法以外でも止血はしておいたよさそうだな。武器は……ちゃんと治療できる状態じゃないと抜くのは危ないか……つて、どうしんだ?口をパクパクさせて』

嘘……うそだろ?何で声が出ないんだよッ!!チクシヨウ!!どうか、どうにかして伝えないとッ!!アイツが、アイツが来る……ッ!!『なにか伝えたいのか?』

うつすらと視界に映るその姿に安堵を覚えた。心がスーッと溶けていくかのよう——



『魔理沙!?!ここに松が!!男の人が来なかった!?!つて、酷い臭いねッ。魔理沙!!いないの!?!松!!いるなら出てきて!!……』

声が響く。その度に体が震える。最早ただの直感でしかなかった。とてつもなく嫌な予感がした。まるで体全体をねっとり舐められているような感覚。気が付けば目の前の誰かを捕まえ、扉の影に隠れるように小さく踞った。

誰かの口を左手で押さえ、暴れないでくれッお願いだからッと必死に祈る。少しの間静かな空間が生まれ、そしてアイツが入ってきた。扉が壁となり姿は見えない。だが、部屋の中をコツコツと忙しなく歩く音が永遠にも感じられる程に長く続いている。

額から汗が流れる。ポタポタと、その歩く音と共に。汗が流れ、傷口へと入り込むと体全身が焼かれているような錯覚に陥る。必死に口を噛み締め痛みを我慢する。早くどっかに行ってくれッ!!頼む……ッ、頼む……ッ。

『………ほんとう二いないミタイネ』

不意にそんな声が聞こえた。

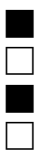
目の前の扉がゆっくりと閉まっていく。そして、視界が開かれる。アイツは居なかった。

助かったんだ。そう理解したのは窓からうつすら見える人影が森の奥へと消えるのが見えてから。

は……はは……たすかった………たすかったん………だ
………はは………たすかった………たすかったん………だ
………ああ………なんだ、か………さ、む
………い………

ドサッ

『!!』



「おい!!大丈夫か!?くそッ一体何がどうなってんだよ!!?」

魔法薬の調合をしてたらいきなり扉が開いた。血塗れで、目からは血が流れ、肩にはアリスの武器が、そして右手が無い男が扉を開いた。つまりは訪問者。そしてその後、アリスが入ってきた。男は見えていたか分からないが、私は見えていた。扉の隙間から、私の友人であるアリスの姿が。

その服には血がこびりついていた。近くをふよふよ飛んでいる人

形も真っ赤に染まっていた。

最初はその姿に驚いた。しかし、その様子はとても切羽詰まった、焦っている様子だった。私は何かしらのすれ違いが合ったのだろう。そう考えた。しかし、部屋全体を見回したアリスは、打って変わって冷静、苛つき、疑問等といった感情が溢れ出していた。そして、忙しなく部屋を漁って行った後、アリスは外に出ていった。

「くそッ……マジで何があったんだ？ 咄嗟に庇ったが……」

ああもう!!と頭を乱雑に掻きむしり情報を整理しようとするも、思考は複雑に絡み合った糸が如くほどけることはない。むしろ、こんな事に時間を割くくらいならこの男を早く医者に入れていかないと!! 床に倒れている男を魔法で持ち上げる。出来るだけ慎重に、かつ迅速に。そして、愛用の箒を手に取り外へ。そのまま空高く飛び上がった。

目指すは竹林。幻想郷随一の医学の持ち主八意永琳にこの男を診せるためだ。しかし一つ問題がある。彼女が住む永遠亭にどうやってたどり着くか。

「なんだよな……。妹紅を見付けられれば良いんだが……」

隣に浮かばせている男の首筋に手を当ててみる。

トクンツトクンツとゾツとするような肌の冷たさの中に弱々しく血が流れているのが感じ取れた。

「見付けられれば確実に助けれる……が、見つけられなかったら……」

『死』

たった一文字。その一文字が心を締め付けた。

私はまた誰の役にも立てないのか?と。

「……嫌だ……そんなのは、絶対に、イヤだ!!お前は絶対に助けてみせる!!アリスの事を聞かなくちやいけないんだからな!!」

最後にそれらしい理由を、逃げ道を作った。相変わらず私は弱い。もし、助けると誓った手前助けられなかったら……死なせてしまったら……。

相変わらず私は弱い。それで、何度も何度も友人達に迷惑を掛けてきたのにッ!!

頬を冷たい何かの流れ落ちる。

それと同時に、強引に進行方向を切り替えた。

まるで、逃げるかのように。深く、深く、帽子をかぶり直す。まるで何かを隠すかのように。頬を流れる感情の塊を忘れるかのように……。



紅い城

なにも知らぬものが見たら十中八九そう答えるであろう城。

大きな湖の孤島にそびえ立つ城は、目が痛くなるほどに紅く、かつ、どこか目を奪われるほどに美しい。

その紅い城の名は『紅魔館』。悪魔が住まう城である。



どれ程だろうか？何時もなら十分と掛からない空中移動が、これほどまでに永く感じられたのは。徐々に徐々に大きくなっていく紅魔館の姿がとても煩わしい。いつそのこと一気に加速したいところだがあまり負担を掛ける訳にはいけない。

「もう少し……ッ!!もう少しだけ持ってくれッ!!」

紅魔館まで残り一分足らず。近づくにつれ強くなる敵意を無視して私は紅魔館の門を駆け抜けた。

そのまま玄関を蹴破り、地下を目指す。右に曲がり、左に曲がり、階段を降り、扉をぶち破る。

「なっ!？」

その瞬間私の体は止まった。目の前には紫色の服を着た友人の姿が。

『こんな夜中にまで盗みに来るなんて……とんだひねくれた根性ね。魔理沙?』

彼女の名前は『パチュリー・ノーレッジ』。紅魔館の大図書館を管理

する魔女。そして、私が今現在頼りにしている人物でもある。

「待ってくれ!!今回は違うんだ!!コイツを、コイツを助けてやってくれ!!」

「コイツ?ああ、そっちの人間?まあ、助けられないこともないけど……随分必死なのね。もしかしげ恋煩いと言うものかしら?興味深いわね」

「私はコイツに聞かなきゃならない事があるんだ!!たのむ……ッ!!」
「……………分かったわ。貴方がここから盗んでいった本を全部返してくれるのならね」

「本当か!？」

「あら意外、もう少し渋ると思ったのだけれど。それじゃあ直しておくからさっさと本を持ってきなさい」

私はいつの間にか動くようになっていた体を勢いよく反転し大図書館を後にした。

その頃には、私のなかにあの男を助けた。私は人の役にたてたんだ!!私は足手まといなんかじゃない!!と、自分勝手な感情だけが私のなかを支配していた。



「本当に行った……まあ、約束を守ってくれと信じて修理に取り掛かりましょうか。魔理沙がアナタにご乱心な訳も聞いてみたいしね」

「何かしら小悪魔」

私の名前を呼ぶ声に思考を一時中断し、声の主に返事を返す。

彼女は小悪魔。私が契約した未熟な悪魔だ。俗に言うインキュバスに部類される悪魔だ。ただ好んで男は喰わないらしい。理由としては、現在は契約により強制的に魔力の供給をしている。これが、彼女たちの食事、つまりは『精』の代わりとなっている。そして、彼女いわく『インキュバスにだって襲う人を選ぶ権利は有ります!!』とのこと。

「いえ、深く考え込んでいたようでしたので」

「ええ、ちよつとね。そうね、折角研究対象に出来そうなのだから死なせるわけにはいかないわ。続けるわよ。さつきみたいな事態にならないように、しつかりと押さえておきなさい」

「はい」

小悪魔が彼の肩を押さえ付ける。両手両足を拘束しているとはいえ先程のようにいきなり目を覚まされ、暴れられたら堪ったものではない。いつそのこと首と胸の部分にも拘束具を付けたいところだが、首は純粹に危ない。かといって胸の部分に付けたら作業がしづらい。

魔理沙も厄介な者を連れてきたわね……。

小悪魔が頷き、私は彼に向き直った。そして、手首から先がない右腕に触れる。

そこから、二の腕、肩、心臓、脳へと魔力を循環させていく。これは血管、毛細血管の修復作業。と、同時に彼の霊力を強制的に引き出す作業だ。先程彼が熱がっていたのは魔力への拒絶反応のようなもの。吸血鬼を流水に浸けるようなもの。人間なら熱した鉄板で焼かれているような感覚だろうか？なんにせよ、かなりの激痛なのは間違いない。

だが、その作業ももう終わり。次の作業に移ろう。

「ふう……………次に移るわよ」

そうして夜は更けていった……



「……………ん……………あ、れ？」

目が覚めたと同時に目の前に広がったのは赤一色。その赤色が一つの部屋だと気づくのに少し時間が掛かってしまった。そして、それと同時に『アノ』出来事を思い出した。

ゆつくりと右腕を持ち上げる。なんの問題もなく持ち上がった右腕の先には、あの見慣れた肌色は一切なかった。

「……………なんだこれ」

そして、右腕の先には金属で出来た手のようなものがあつた。そして、その現実味のない事を前にしてか異様に冷静に右手が無くなった事。アリスさんの事がすんなりと受け入れることが出来てしまった。これが俗に言う一周回つてと言うやつだろうか？

「……………もう、右手で物を掴むことも出来ないのか」

小さく呟いた。言葉では簡単に現せれる現状に、体が鉄の塊になつたが如く重く感じられた。冷静な頭とは裏腹に心には傷を負っている。表すのならこんな所だろうか？

『ごんにちは。不思議な人間さん』

「うわ!」

唐突に声を掛けられ声を荒げてしまった。

目の前には一人の女性。薄紫色の服に身を包んだ、どこか病人のような儚さを醸し出す美女。

『声を掛けただけなのにそこまで驚かなくても良いのではないかしら?』

「す、すいません」

『まあいいわ。私はパチュリー・ノーレッジ。貴方は?』

「あ、えっと、佐々木松です。しよは松って書きます」

「松ね。覚えてたわ。早速で悪いんだけど右手を見せてもらえるかしら?」

おずおずと右腕を持ち上げ、金属と化してしまった右手を見せる。

正直見せたくはなかった。しかし、これからはこの右手で生活をしていかなければならない。なら、こんなところで恥ずかしがっている。どうする!!と、半ばヤケクソになっている。

「ちゃんとかくつついているわね。どう?違和感はないかしら?」

「えっと、動かせない以外は……。えっと、あれ?気持ち悪くないんですか?」

「気持ち悪い?自分がやった事の成功に対して気持ち悪いもなにも無いでしょう?寧ろ美しいわ。うん。この様子だと大丈夫そうね」

パチュリーさんは満足げに頷くと、俺の右手を手を取った。

待つてほしい、ただえさえ理解が追い付いていないのだ……。これ以上訳がわからなくなったら――

「何時もの様に手を動かしてみなさい」

「……………うご、く?」

親指が、人差し指が、中指が、薬指が、小指が、動く……。握り拳も作れるし、逆にその握り拳を開くことだって出来た。まるで、自分の手のように、生まれ持った右手のように……。金属の手は動いてくれた。

「問題ないようね。詳しく話をしたいところなんだけど、その前にレミイ、この館の主に会って貰いたい。いいかしら?」

「館の主に会えば良いんですよね?分かりました」

「そう、ありがとう。それじゃあ外に私の使い魔がいるから、その子に案内してもらって」

「分かりました。その、この手ってパチュリーさんがしてくれたんですよね?ありがとうございます」

「喜んでくれたようですねにより。さ、主が待っているわ。早く行きなさい」

俺はベットから起き上がり、パチュリーさんの横を通ってドアへと向かう。そして、ドアノブに手を掛け、押し開いたときだった。

「銀色のメイドに気を付けなさい」

部屋から一歩踏み出した俺の耳に届いた小さな声。

「どういう意味ですか?」

「行けば分かるわ。それと、そこは何も聞き返さず出ていくところよ」
振り向いた俺に、パチュリーさんは笑って答えてくれた。しかし、その妙に優しげな笑顔に対して、異様な不安が心のなかを渦巻いた。

ドアを開け、外に出る。そして、目の前の光景に驚きが隠せなかった。図書館。一言で表すのならこれにつきるが、その埋蔵量、図書館の形状に対して、一言に図書館と表して良いのか……。

『ふふ、すごいですよね。ここに来られた方は大体その様な反応をするんですよ。あ、申し遅れました』

いつの間にか隣に立っていた女性は、スカートの両端を摘まみお辞儀をした。

『私はパチュリー・ノーレッジ様の使い魔。小悪魔と申します。こあでも小悪魔でも、ご気軽にお呼びください』

こあくま？それって最早名前ではないのでは？

「えっと、よろしくお願ひしますこあくまさん。俺は佐々木松です。松って書いてしようって読みます」

「よろしくお願ひしますね。松さん。それでは、レミア様の所までご案内致します」

こあくまさんは小さくお辞儀をし、歩き始めた。その後を追うように俺も彼女に続いた。

この先に、なにが待ち受けているのかも知らずに――

第9話 館の主

「この先に館の主。レミリア・スカーレット様が居られます。粗相のないように。それと、危なくなったら図書館まで逃げてきてください。それでは、私は此処で失礼しますね」

「ありがとうございます」

彼女の最後のの言葉に首を傾げながら、一応お礼を言っておく。すると、こあくまさんは小さく微笑み、背中を向け来た道に戻り始めた。

一度大きく息を吸い、小さく吐き出す。

こんなにも緊張しているのは、心中を忙しなく駆け回るパチュリーさんとこあくまさんの言葉のお陰だろう。震える左手を、冷たい右手で押さえ、心を落ち着かせる。

そして、左手でゆつくりと……

……コンコンコンツ

三回乾いた音が静かに響く。

『随分と待たせたじゃないか。入ってくるがいい』

返ってきたのは楽しそうにコロコロと笑うかのような可愛らしくも、どこか重みのある声。

ギイイイ

ゆつくりと重たい扉を押し開き、中へと入る。

「し、失礼します」

『よく来たな。さあ、掛けてくれ』

指示に従い部屋の中央にある椅子に腰を掛ける。そして改めて目の前の人物を見る。人物と言えるかはどうかは疑問ではあるが……。

身長は座っているからハッキリとは分からないが、恐らく百六十センチはある。薄いピンク色のドレスを着た美しい女性だ。その深紅の瞳は何故か見いつてしまうほどに美しい。そして、一番目を奪われたその背中に生えた一對の羽。蝙蝠のような形をした羽は彼女が人間出はないことを知らしめていた。

『ふふふ……吸血鬼を見るのは初めてか?』

「えっと、そうですね」

『まあ、それもそうか。外来人であるお前が見たことがあるはずもなかろう。殆どどの吸血鬼は戦争で殺されたし、そもそも戦争を起こした理由が種族絶滅の危機を避ける為だからな。おっと、自己紹介が遅れたな。私は紅魔館当主、レミリア・スカーレットだ。レミリアで良いぞ』

「佐々木松です。よろしくお願いますレミリアさん。あの、ところで……何で自分が外人なのを知っていたんですか……？」

「少なくとも俺からは何も言っていないはずだ。考えられるとすれば……アリスさんが話をしに来ていた……とかか？正直今の状況だと会いたくはないな……」

「ふむ、もう少し驚いてくれた方が嬉しいんだがなあ。まあいい。それで？何でショウウが外人なのを知っていたのか。だったかな？能力で分かったと言えば簡潔で何だが……そうだな……能力についてはどの位理解している？」

「能力？確か……」

「強い願いが力として覚醒した特殊な能力……位しか」

「そう、正解だ。寧ろそれで説明がつくのが困るな。ならもう少し深く話をしようじゃないか。そうだな……私は『運命を操る程度の能力』と言う能力を持っている。これは私が子供の頃に目覚めた能力だ。私には妹がいるのだがな、良い関係を築けるかを心配していたときに目覚めた。まあ、結局あななってしまったのだが……。おっと、関係ないはなし……でもないのか。ショウウ、一つ問おう。能力はその能力の持ち主の強い願いが具現化したもの……間違いないな？」

「その筈だ。現にレミリアさんもその事について肯定していた。しかしだ、こうして問いかけていると言うことは何か見落としがあるのかもしれない……」

「……生まれ持った才能みたいなのに、生まれた時から能力を持っていた……とかですか？」

「お、正解だ。外界では能力の概念など空想の産物だと聞いていたんだが強ちそうでもないのかな？そう、生まれた時から能力を持っていた。このこと事態はそこまで珍しい事でもない」

「珍しい事でもない……ですか。でもそれだと可笑しいですよね？産まれたばかりの子供に願いなんであるのですか？」

「まず無いだろうな。そもそも感情を持ち合わせているのかも怪しい所だ。だが、珍しい事でもないと言うのは本当だ。これは人間には当てはまらないのだが、殆んどの妖怪には自身の性質とでも言えばいいか？まあ、生まれ持った役目みたいなものが有るのだよ。例えば病気を蔓延させたり、生物の視界を奪うような奴だったりな。そう言う奴等の多くは生まれ持ち能力を持ち合わせている。その性質や役目が願いの代わりをしているわけだな」

「なるほど……それなら妹さんも吸血鬼の役目のようなもので能力が？」

俺がそう問いかけると、レミリアさんはあからさまに顔を顰めた。そして小さく『それであればどれだけ良かったか……』と呟いた。

まずい事を聞いてしまったのだろうか……？と、内心焦っているレミリアさんは苦笑いを浮かべ口を開いた。

「聞こえてしまったようだな。あんまり話したいことではないんだが……、吸血鬼にはこのような能力はない。目的が合間だからな。代わりと言っては何だが、変態、変身の方が分かりやすいか？蝙蝠や狼に変身できるんだ。人間に血を与えれば眷属として吸血鬼に出来る。他にはチャームと言って、異性を強制的に奴隷にする力なんかもあるな。お前にはあまり効果がないようだが……他には流水に弱かったり、太陽光や銀に弱かったりも入るな。今あげた六つが吸血鬼が生まれ持ち持つ能力だ。だが……妹は……フランは……」

フランと言う名前を出したレミリアさん。机の上に握られた握り拳からは血が流れ、机の上を赤く染め上げていた。

「あの……無理して話さなくてもいいですよ？初対面な訳ですし」
レミリアさんの赤い瞳が、俺の目をじっと見詰める。それだけの事なのに手にはじつとりと嫌な汗が浮かび気持ち悪い。

「まさか初対面の人間相手に励まされるとはな……。ああ、確かに初対面だ。だが、お前はある意味では私の希望なのかもしれん。最後まで話させてもらう。心して聞けよ？」

フランはな……蝙蝠になれても、狼にはなれない。人間を眷属に出来ても、奴隷には出来ない。太陽光も、流水にも弱いが、銀には耐性がある……。そして、フランは生まれ持ち能力を持っていたんだ。父と母を生後一分で殺した、その身には大きすぎる『ありとあらゆるものを破壊する』能力がな……。

ふう……この話をしたのは……十年ぶりか？ そうだな……。今日はいままでにしよう。ああ、そうそう紹介しておこう。紅魔館のメイド長である十六夜咲夜だ」

『お呼びでしょうかおじょうさま』

レミリアさんが十六夜咲夜と名前を呼ぶと、その右一步後ろに銀髪の女性が現れた。まるで瞬間移動でもしたかのように。

そして、銀髪の女性と視線が交差する。次の瞬間――

――ズサツ

「はえ？」

何かが左肩に突き刺さる。恐る恐る左肩を触ってみると、ドロツとした液体のなかに何か固いもの。その固いものに触れてみると、よほど切れ味が良いのかスウーと指先が切れる感触が伝わる。

それが、銀髪の女性が投げたナイフだと気付くのに一体どれ程の間が掛かったのだろうか？

「うがああああああ!!!」

涙が目溜まり、決壊し、滝のように流れ落ちる。

視界の端には、二つの影。そして、その一方が何かを構えていた。

俺は訳も分からず走った。部屋から転がり出て、助かりたい一心で、唯一助けてくれるかもしれない相手の所に、ただ、がむしやらに逃げ続けた……。

第10話 恐怖

私がまだ子供だった頃……。

私には父がいた。しかし母は居なかった。何が原因かは今となっても知らないし、知る必要もない。もつと言つてしまえば、死因を知っている存在が既に存在していないから。

私のこの『時を操る程度の能力』は、ある一つの感情によつて芽生えた。それは『殺意』。父親への殺意である。

当時五歳だった私は、酒場で働いていた。汗水流して、店長に嫌味を言われながらもがむしやらに働いた。

辞めようと思えば辞められたらう。だが、私には辞めると言う選択肢は存在しなかった。いや、潰されていた。と言つた方が正しいのかもしれない。それは何故か……それは父の存在。酒を飲むために私に働かせ、贅沢をするために私は一日三等分にされたパンの一切れだけを投げ渡す。寝る場所は外。逃げないように首輪で犬のように繋がれた。私が逃げようとすれば暴力が降り注ぎ、文句を呟けば犯され、我儘を言えば服を剥ぎ取られ外に繋がれる。おまけに繋がれていた鉄の看板には、金を払えばヤつてもよい。明確な金額など書かれておらず、子供が親の小遣いを持って犯しに来るほどには回された。

何度願つたことか

腹一杯に食べ物を食べたい、と。

暖かいベットで眠りたい、と。

何度願つたことか

このまま時間が止まつてしまえばいいのに。

そうしたらお前の喉を噛み千切つてやるのに。

それから三年の時間が流れた頃に、私の運命を大きく変える出来事が起きたのだ。起こされたのかもしれないが、これもまた私の知る必要はない。

その日の夜の事だ。私は何時ものように犯され、そして外に繋がれた。私の首に繋がれた鎖が何時もの鉄の棒ではなく、直ぐとなりの朽ちかけた冊に繋がれていた。恐らく父が酔つたまま繋げるのを忘

れたのだろうか。

私はこんな場所から逃げ出したいが一心で鎖を引っ張り続け、そして、ボロツと冊が壊れた。『やった!!』あまりの感激に私は声を荒げ喜んだ。そうすれば当然父が酒瓶を持って外に出てくる。父は酒瓶を振り上げ私を捕まえようとしたが私は逃げた。何が嬉しくてあんな場所に居なければならぬのか……。後ろから聞こえてくる怒声に足から力が抜けそうになるが、恐怖を抑え込み逃げ続けた。

気が付けば私は紅い屋敷、紅魔館の敷地内にいて、目の前には吸血鬼の姿。

『美鈴め……またサボっていたな……まったく……それで？人間が何ようだ?』

血のように赤いその瞳が私を射抜く。私は口を開けなかった。

黙っている私に何を思ったのか、吸血鬼は小さな笑みを浮かべ口を開いた。

『ククツ……そう怖がらなくてもいい。別に取って喰う訳ではないのだからな。それに、貴様の事は知っているぞ？山を下った所にある村の奴隷娘だろうか？その鎖からして脱走してきた所か?』

まるで全てお見通しだと言っているが如く吸血鬼は楽しいように語る。そして、もうひとつの声が私の耳に届いてくる。父の怒声だ。

『た……たす……けて、くださ……い……ツ!!』

とっさに出た助けを求めた言葉。

『私は吸血鬼、悪魔だ。悪魔に何かを求めたらそれ相応の対価を頂こうか』

『掃除でも洗濯でも何でもします……!!だから……だから……ツ!!もうあんな場所には戻りたくない……ツ!!』

『なるほど……メイドになるかわりに助けると……良いだろう契約成立だ。だが、私が直接手を出すのは面白くないな……ふむ……これをやろう』

吸血鬼が投げ渡してきた物は銀色に輝く時計。忌々しく回り続ける時計……お前が止まってしまうば……私が……あの男を……殺してやるのにツ!!

そして、世界が止まった。

灰色に変わった世界で草花も、風も、音も、光りも、吸血鬼も、そして、忌々しい父と残酷な時計の針も……全てが止まっていた。本来であればここで取り乱したりするのだろうが、不思議とそんなことはなく妙に安心出来た。

私は吸血鬼が持っていたナイフを掴み、後ろで固まっている父に近寄り、手に持ったナイフをその胸に突き立てた。

『あ、あは……やった………やったんだ………私は………』

銀の時計をゆっくりと握り締める。すると今度は世界に色が戻り、時が動き出した。

父はその胸に刺さったナイフを見て口をパクパクさせ、ゆっくりと地面に倒れる。

『早速だが働いてもらおう。そのゴミを屋敷の外に捨てておいてくれ』

吸血鬼は初めから全部知っていたかのように言うと、屋敷の中へと戻っていった。

私は言われた通りにゴミを屋敷の外へと運び出し、近くの崖へと投げ捨てた。

こうして、私は紅魔館に雇われることとなった。何時も何時も忙しいが、あんな理不尽な暴力も、男どもに回される生活も……全てが終わりを告げた。

そう………ついさつき、お嬢様に呼ばれ、お嬢様の部屋を訪れるまでは………

どうしてどうしてどうしてどうして

????????????????????

何でお前が？なんでなんでなんで扉を開けた先にはお嬢様の姿と……殺した、死んだ筈の父の姿があった。

そこからは条件反射だった。ナイフを投げ、お嬢様の元へ。

私はもう、以前の私ではない。

時間が動き、父の絶叫が響き渡る。咄嗟の事で狙いを外してしまっただようだ。

「お呼びでしようかおじようさま」

「随分取り乱しているようだな」

「そんな事はございません」

「それにしても足が震えているようだが？」

「ッ!!」

足を押さえ恐怖を隠す。その様子が可笑しかったのかお嬢様は小さく微笑んだ。

「あれから十年……まだ完全に恐怖を拭いきることは出来ていないようだな」

「も、申し訳ございませんッ!!」

「別に叱っている訳じゃない。しかし、その男は必要なのだ。だがそれではお前の腹の虫が収まることもないだろう。そうだな……殺さない程度に遊んでやれ。出来るな？」

「御意に」

ナイフを持ち、父へと向き直る。父は怯えた様子で私を見ていた。まるで、以前の私のように、助けてくれと懇願しているかのよう。

ああ、貴様は実の娘にあれだけの仕打ちをしておきながら自分は助かりたいんだな……。

知っていた。知っていたことなのに、この苛立ち、この怒り、この殺意が沸き上がってくる。

殺してやる

殺してやる

殺してやる

徹底的に、徹底的に、もう二度と生き返られぬように、手足をもちで、眼をえぐり出して、内蔵を引き抜いて、脳をかき混ぜて、骨を砕いて、心臓を潰して……………そして、存在すらもコロシてやる!!!!

私が一歩進むと、父は狂ったように逃げ出した。

「咲夜……………殺すんじゃないぞ?」

「分かっております。息をしている状態でお連れいたします」

さあ、能力は使わないでいてあげる。精々逃げ惑いなさい…………。

『すまないなショウ。お前が生きて、私の目論み通りに動いてくれることを期待しているよ。』

そして、あわよくば……………

……………フランを救ってやってくれ』

第11話 少女

くそツくそツくそツ!!

何なんだよ!!俺が何をしたって言うんだよツ!!

すぐ目の前を銀色のナイフが通り過ぎ、赤い壁に突き刺さる。あと一歩前に出ていたらどうなっていたか……冷たい汗がじつとりと流れる。

『あらあら、そんな所で立ち止まっても宜しいんですか?』

「ウギイ!!」

背中に走る鋭い痛み。

こなまま殺されるのでは?そんな恐怖とその痛みから逃れたいが為に足は動き続けた。

幾度となくナイフが刺さり、掠る。動きを止めれば刺され、逃げればナイフが飛んでくる……。そんな悪夢のような時間を繰り返し、気が付けば見覚えのある扉の前に辿り着いていた。

■□■□

「たす……たすけ、て」

「はあ……やっぱり……」

何時ものように魔道書読んでいた所に聞こえてきた力なき声。

レミイの奴ちゃんと言明したんでしょね……いや、してないからこんなことになってるのか。まったく、嫌な予感的中するって言うのはあまりいい気分ではないわね。

「咲夜……図書館で暴れるってことはそれ相応の覚悟があつての事よね?」

「パチュリー様そこを退いてください」

松を庇うように前に出た私に問答無用でナイフを投げるメイド長。しかしそのナイフは急に動きが止まり地面へと落下した。

「相手が物理的に死なないからって、主人の親友に向かって殺しにかかるのはどうかと思うわよ?」

「今はそれよりも重要なことが御座いますので」

これは思った以上に頑固ね……めんどくさいから力で押し伏

せようかしら。

「松、巻き込まれないように奥の部屋に逃げておきなさい。後で迎えに行くから」

後ろを振り向かず松に呼び掛けると、少しの間が生まれた後走って逃げる足音が聞こえた。

「……どうして邪魔をするのですか」

「さあ、どうしてかしら？」

茶化すようにおどけながら言ってみせると、目の前にはナイフを私の首に押し当てる咲夜の姿があった。

「パチュリー様……私は貴女との交戦をこれ以上望みません。そこを退いてください」

「そんなに殺気を出されながら言われてもねえ……それに、まだ終わってないわよ？」

「な!？」

そう言えば咲夜は私と戦った事が無かったかしら? そうね、それじゃあ頑張つて攻略してみなさいな……廻る七曜の世界を……。

■ □ ■ □

「はあはあはあ……」

パチュリーさんに言われ奥の部屋へと逃げ込んだはいが、その先は長い階段となっていた。魔法と言う前の世界では存在しなかった得体の知れないモノ相手に一体何処まで逃げれば良いのかなんて皆目検討もつかない今、俺にその階段を降りないと言う選択肢はなかった。

壁に手を付き、ゆつくりとその階段を下って行く。意外と浅かったのか、それとも無意識に下っていたからか、気が付けば一枚の扉の前に辿り着いていた。その扉を押し開き、中へと入る。

部屋の中はランプの光がうつすらと部屋の中を照らしている。此処まで来れば大丈夫だろうか? どちらにせよもう歩く力なんてもなく、壁を背もたれに床に座り込んだ。座り込んだ時に分かったが、背中のナイフは何処かで取れたようだ。

『久し振りのお客様……』

「……どうかしたのかいお嬢ちゃん」

部屋の奥から現れた一人の少女に返事を返す。疲れのせいで随分と味気ない返事になってしまったが、少女は笑顔のまま近寄ってきた。

恐らくこの子がレミリアさんの妹だろう。髪色は金色でまったくの違うが、何処と無くレミリアさんの面影がある。背もレミリアさんと同じくらいだろうか？あまり年は離れていなさそうだ。

『それは私の台詞じゃないかな？……ここは私の………部屋、なのよ？』

どうしたのだろうか？

少女はこの部屋を自分部屋だと言うことに抵抗があるのか、妙な沈黙が生まれた。

「そうか……それは悪いことをした………そう、だな………なん、て言え………ばいいの、か………」

『ちよつと……大丈夫なの？』

「あ、れ？さっきの少女はどこに行ったんだ？この壁の赤色は何だろう？それに、急に体が軽くなった気がする……」。

■ □ ■ □

「ちよつと……大丈夫なの？」

『………』
男からの返事は無かった。代わりに、ゆっくりとその体が倒れ、その目からは光が消えていた。床には血溜まりがいつの間にか出来ており、素人目であっても男が死にかけているのが分かる。

「はた迷惑な話よね。二百年ぶりに来たお客様が死にかけているなんて………まったく……」

男の体を持ち上げ、ベットへと寝かせる。傷口には簡単な医療魔術を掛けこれ以上の出血は無いだろう。

「………」

じつと、自身の右手を見つめる。今しがた男の傷を治した自身の右手を。

もしかしたら……。と、その手を握り締めしてみた。当然何も起こらない。しかし、私の場合それは可笑しな事なのだ……。そう、何も起こらないことの方が……………。

□ ■ □ ■

「んっ……………」

『あ、起きた』

ぼんやりと光を取り入れる視界の中に、一つの影。その少女の姿がはつきりと見えると漸く何があったのかを思い出した。

『どう？取り敢えず簡単にだけど治療はしたけど…………』

不安げに言われたその言葉。治療と言うことは…………体のあつちこつちを動かしたり触ってはみたが特に痛みは感じられない。

「…………ああ、大丈夫みたいだ。ありがとう」

『ん』

少女は小さく返事をするそつぽ向いてしまった。誉めなれていないのだろうか？

『ねえ、おじさん』

「なんだい？」

『外から来たんでしょ？なら外のお話聞かせて』

「外の話？そんなに面白いものじゃないが…………」

『いいから!!』

「分かった分かった。そうだな…………」

俺は自分の人生、父母とは全く話さず、そこそこの高校に通い、そこそこの大学に進学。そして、普通に中小企業に就職。そんな、なんの面白味もない話を語っていった。

しかし少女はそんな面白味もない話を楽しそうに聞いていた。時には質問もしてきて話している此方もなんだか楽しくなって来るほどだ。

『そっかー外は楽しそうだね』

「まあ、外は外でも外界の話だけだな」

『あ、そっか…………でも、げんそうきよう、だっけ？にも楽しいところは有るんでしょ？』

「それはどうだろうなく俺も幻想郷に来てまだ一ヶ月位だし、その一ヶ月は森の中で暮らしてたし、今は今でメイドさんに殺され掛けるし……」

『メイドに殺され掛けてるの?』

「ああ、何もしてない筈なんだがな」

『……………だったら、さ。私が守ってあげる』

「いやそれはちよつと……」

『私は吸血鬼だからおじさんよりは強いよ?』

「いや、だとしても……だな」

確かに吸血鬼である彼女は俺よりも圧倒的に強いのだろう。だが、だからと言って女の子に守られるのは男としてどうなのだろうか?

『だったら、さ。私の願いを叶えてよ。おじさんは私の願いを叶えて、私はおじさんを守る。これじゃあだめかな?』

「願いの?」

『うん。私を外に連れていって。それが、私の唯一の願い』

何となくだが察してしまった。この子はずつと、それもかなり長い時間をこの部屋だけで過ごしてきたのだろう。恐らくはレミリアさんが言っていたその能力を恐れられて……。

「……………それでいいのか?」

『逆に聞くけど、最悪殺されるかもよ?お姉様に』

「その時はその時だし、そもそも二度も死の縁に立たされた身だからな。死ぬのが少し遅くなったただけだ。いや、そもそも俺は死なん!!何故なら……君が守ってくれる……そうだろう?」

左手を差し出し、彼女が握り返してくるのを待つ。柄にもなく言ってみたものは良いけれど、内容はかなり酷いものだ。せめて、自分自身の身は自分で守れるようにしないと。そして、レミリアさんと話もしなければ……。

彼女はゆつくりと、その可愛らしい手を出しては引つ込めを繰り返して、そして――

「うん。それじゃあ行くかうか」

第12話 憧れ

何時ものように本を読んだり、意味もなく右手を握っては開いてみたり……。認めたくはないが、それが私の日常だ。もうこんな生活を五百年近く過ごしている。まあ、実際にはもう少し短いだろうが……。

最初の頃はお姉様が人間を連れてきたりしてくが出来るようにとか何とか言っていたが、それも百年も続けば何時しか無くなり、二百年経てば訪れるものは一気に減り、それから更に二百年の間は誰も訪れなかった。

ご飯は毎日同じ時間に扉の前に置かれ、お風呂は備え付け。唯一の娯楽である読書は新しい本が一ヶ月に一回一冊の本が扉の前に置かれていたので、それを何回も読み返している。部屋の奥には、私の体が埋るほどの本の山が出来ているほどには沢山の本を読んだ。それが、外で沢山に含まれるかどうかも私には知るよしもないが。

まあ、そんなことはどうだっていい。そう……どうだっていいのだ。

今日、この日、この時、この部屋に、来客が訪れたのだ!!

しかし、その来客はズタボロだった。身体中に切り傷が、所々ナイフも刺さっている。出血も酷い。少し言葉を交えたら。パタリと来客は倒れてしまった。

どうしようか？

助けた方が良いのだろうか、処置の方法なんて分からない。取り敢えずは簡単な治療魔法で出血を止めれば……。

そう考えた私は早速行動へと移した。まずは男を治療しやすい場所、ベットまで移動させ、服をはだけさせる。後は男を包み込むように魔法陣を展開して……。うん。初めてだったけどどうにかできた。後はこの男が起きるのを待つばかりだ。

□ □ ■ ■

男は三時間後位には目を覚ました。

最初もそうだったがこの男は吸血鬼が怖くないのだろうか？まあ、

そんなことは些細な事。そうだ、どうせ助けたなら外の話をしてもらおう。

□ ■ □ ■

すごい……外にはそんな大きな建物が存在しているなんて……!!
男は私が一々大袈裟に反応するのが楽しいのかどんどん饒舌となつていった。しかし、大袈裟になる事許してほしい。此だけ長いときをこの牢獄で過ごしてきたのだから……。

おじさんが話していた物はげんそうきよの風景ではなく、更にその外の世界の風景らしい。ではげんそうきよの風景はどんななの？と聞いてみたが、おじさんもげんそうきよのように来たのはつい最近らしく、知らないと言を振られた。

ああ、此処まで外に出たいと願ったのは何時ぶりだろうか？

今ではお姉様が出した条件も覚えてはないけれど、ああ、外に出たい……!!

外に出て、外の外の世界と、幻想郷との違いをこの目で見たい、確かめたい!!

だから、私はおじさんに提案した。

私と契約してほしいと。私を此処から、この牢獄から解き放つてくれと。代わりに私は貴方の盾となる……だから、どうか……!!

おじさんは黙り、そして、私に手を差し伸べた。

私はおじさんの顔を見た。生まれて初めて見る笑顔と言うものだった。

私は手を取るのを躊躇った。だって、怖かったから……。この手を取れば……外に行ける……けれど、確実にお姉様と顔を会わせなければ行けない……そうしたら、私はここに連れ戻され、おじさんは殺されてしまうんじゃないのか……。

けれど、けれど……。

ごめんなさいおじさん。私が絶対に守って見せるから……。私を外に――

おじさんの大きな手に握りしめられた私の右手。

そして、耳を燻る心地のよい声……。何時か本で読んだ気がするこの感情……。この酔ってしまいそうな甘く、苦しい感情……。

ああ、これがきつと――

『うん。それじゃあ行こうか』

こうして、私は約五百年ぶりにこの部屋から踏み出したのだ。

□ ■ □ ■

未だに名前を聞いていない少女と手を繋ぎ、階段を上っていく。最初こそ少女の足取りはたどたどしいものではあったが、今は確りと自分の力で立っている。

そうして、今、漸く階段を上りきった。

「良かった……。無事だったのね」

階段の入り口にはパチュリーさんが心配そうな顔で佇んでいた。その額にはうっすらと汗が見えることから随分と心配させてしまったのだろう。

「心配させてしまったようで……。すみません。ところですあのメイドの方は？」

「ああ、咲夜の事？軽く懲らしめて今は隣の部屋で寝てるわよ……。いや、ちよつと待ちなさいな。聞かれたから答えちゃったけど何でフランもつて来てるのよ？」

「え？いや、外に出たいと言っていましたので」

パチュリーさんは俺の答えに小さく溜め息をつ吐いた。どうしたのだろうか？なにか不味いことでもしてしまったのだろうか？

「いい？その子は……いや、どうせだからレミィに話してもらいましよう。その後も話さなければならぬことが沢山あるのだから、それに、私だけが喋りばなつしと言うのも何だか詰まらないわ。小悪魔は咲夜の……メイドの世話をさせているから……此を持っていきなさい」

「これは？」

パチュリーさんが渡してきたのは手のひらサイズの半透明の球体。ガラス玉か何かだろうか？

「そこに館内の地図を出すからそれを頼りに進みなさい。それで、レミィの話が終わったら戻ってくるように。それとフラン」
『……………なに』

「そんな殺気を出さなくてもなにもしないわ。って言ってもムダでしょうけれど……それだけの事を私は、私たちはしてきたのだから……でも、でもねフラン……そんな最低な私だけど、少しだけ、少しだけでいいから、言わせて頂戴……」

パチュリーさんはその瞳から大粒の涙を流し、ゆっくりと少女の肩を掴み抱き締めた。

困惑している少女を、ただ、ただ、壊さないように抱き締め

「ごめんね……ごめんね、ごめんなさい……………おかえり、フラン……………」

少女は答えなかった。しかし、その噛み締められた唇。パチュリーさんの服を握り締めるその手。そして、その頬に伝うもの…………。

何とも言えない気持ち心が締め付けていく感じがした。

第13話 優しい世界

あれからパチュリーさんが泣き止むのを待ち、泣き止んだら直ぐに行動へと移した。とは言っても、水晶に映し出される方向に従いながら進んでいるだけだが……。

しかし、この何かに従いながらと言うものは些か懐かしいものがある。上司に指示されたことを淡々とやり続けるだけの作業。失敗があれば頭を下げ、愛想笑いで誤魔化し、成功すれば上司の機嫌を損ねないようにそこそこ同意をしながら適当な理由を付け足早に立ち去る。

同僚にも似たような感じだ。そこそこの関係を築きはするものの、友人までには行かない。食事に誘われてもやんわりと断り、あくまで仕事場で話す程度で終わらせる。それは飲み会などの騒ぎの場でも変わらなかつた。聞こえよく言えば、害を与えない。しかし、ざつくりと表すなら、人付き合いが悪い。もしくは、希薄と言うところだろうか。

何時からそうなったのか。

そう問われれば、最初からとしか言いようがない。何故か？小さい頃、小学校を卒業するまではそれが常識だと思っていたからだ。

俺の父親も母親も率先して人と関わらず、家族同士でもまず会話と言うものは殆ど存在しなかつた。学校から帰ってきたとき、母が他の誰かと話しているのを見ると疑問を覚え、それが作り笑いなのも何となく分かつた。

もつと言えばそれを教えてくれる存在が身近に居なかつたのも原因だと言えるのかもしれない。俺の家は両親共に働いていた。母は早朝から夕方。早いときは俺が帰ってくるのと同時くらいに帰ってきていた。父は朝から晩まででまず話すことはなかつた。

なら、母親と話せば良いじゃないかと思うかもしれないが、母親は帰ってくるのと直ぐにベットに潜り込んでしまう。それを一度起こした事があったが、睨まれて用事がないなら話し掛けてくるな。と言われて以来話し掛けることは無くなつた。父は……まず喋らない。障

害だとかではないが、三者面談なんかではない限り言葉を発するところを見たことがない。

要因はまだあるが、此処まででも十分子供の常識が刷り変わるには十分過ぎる事なんだと思う。

□ ■ □ □ ■

自己紹介も済ませていない少女と手を繋ぎ、紅い廊下を進んでいく。昔の事からはまず有り得ない行動に自分自身も驚いている。今の俺は昔と比べて成長出来たのだろうか？いや……きつと何も変わってない。でなければ、あんな感情は抱かない筈だ。

隣にいる少女をチラッと見る。少女は見たことのない景色に興味津々なのか辺りをキョロキョロと見回しており、窓の外から見える景色には勿論のこと、花瓶に花、額縁に飾ってある風景画を瞳を輝かせながら見ている。その姿は何処か微笑ましく、そして、少し――

「……はあ俺って最低だな」

「おじさん？」

「ん？あ、口に出てたか。まあ、何でもないから、ほら、もう少しで着くから行くぞ」

「……ん」

それ以降、少女がレミリアさんの部屋にいくまで口を開くことはなかった。

しかし、繋がれたその手は少し痛かった。

□ ■ □ □ ■

扉の前に立つ。

金属が木を叩き、少し高い音が三回続いた。

そして中からは小さな声。

その声に答えるかのように、左手の痛みが強くなる。そして今度は、その痛みに答えるために、目の前の扉のドアノブを捻った。扉は何の抵抗もすることなく開いた。

レミリアさんはベランダいた。その青みがかった銀色の髪を靡か

せ、此方を驚いた表情で見ている。

「ふ、らん？」

掠れた声が微かに耳に届く。少女の体がビクツと震えた。

「ふらん……ふらん、フラン!!」

その大きな呼びび声に少女はカタカタと小さく震えるが、レミリアさんはお構いなしに此方へと近付いてくる。

そして、その両手が、少女を抱き締めた。

力強く、されど壊さぬように……………

俺は此処にいない方が良くと考え、部屋をあとにした。



水晶を頼りに玄関へと向かう。

「にしても、この水晶は便利だな」

小さく呟いた。心を渦巻く感情を、今はもう求めることの無かったその感情を振り払うために。どうして今さらになつてこんな感情が湧いてくるのか、どうして今さらになつてこの感情が苦痛になるのか。何時ものように苦笑いを浮かべてみてもそれは変わらない。

玄関の重い扉を抜け、外へと出る。月の明かりが降り注ぎ何処か物寂しくなってしまう。

月明かりに照らされた中庭を進んでいくと、大きな門があった。ここを抜ければ外に出られる。別に出ていきたくて外に出たわけではないが……、俺なんかがあの場所にいってもいいのか？そんな何の意味もなさない事を考えてしまう。

そして、そんなことを考えていたらいつの間にか門の目の前まで着いてしまっていた。

後、一歩踏み出せば……。

ゆっくりと右足を上げ、門の外へと出す。分かっていた筈なのに、その呆気なさにやっぱり変わっていないんだなと安心した。左足も外へと出して、完全に館から出る。するとどうだろうか？さつきまでは動いてくれていた義手の動きが悪くなり、遂には動かなくなつてし

まった。それと同時に右手に持っていた水晶も地面へと落ちガシヤーンと大きな音を立て壊れてしまった。

「……………やっちゃまった。大丈夫なのかこれ……………高価なものだったり……………するよなあ……………」

『大丈夫ですか？』

しやがみこんでどうしようかと割れた水晶を見てみると、後ろから声を掛けられた。その声に振り返る。後ろに居たのは中国とかのドレスの様なものを着た一人の女性だった。

「ああ、まあ大丈夫ですよ」

『それなら良いのですが……………ただ、余り無理は為さらないよう気を付けてくださいね』

「そんなに無理をしているように見えますか？」

『ええ。だって貴方の気のりよ……………いえ、それは私より当事者に聞いた方が良いでしょうね』

一体何の話をしているのだろうか？

『知りたいのなら戻りなさい。割れたガラス玉は私が処理しておきますから』

「え、いや、大丈夫です。ありがとうございます」

『そうですか？ですが、その右手使えないのでしょうか？遠慮しないで、ほら、早く戻ってください』

女性は少し強い口調で背中を押し、俺を門の内側まで押し戻した。

『では、後は任せてくださいね』

ここまででされてまだ食い下がろうとするのは無粋だろう。ここは、彼女の好意に甘えるとするか。

「すみません。お願いします」

『お願いされました』

女性はその顔に笑顔を浮かべていた。

この世界は好人ばかりだ……………だからこそ俺には息苦しいのかもしれない。

第14話 生きづらい

門のところにいる女性に戻るように言われ、臆気な記憶を頼りに何とか図書館の前までやって来れた。

「それで？なんで館内から出たのかしら？」

「いや……その、大したことでは……アハハ」

「……まあいいわ。それにフランも居ないみたいだし此方としては都合がよくなっていると言うことであまり詮索はしないでおきましょう」

パチュリーさんはそう言って手に持っていた本を机の上に置いた。

「内容が内容だから分割して話すわよ。まず、貴方には霊力がある程度操ってもらえるようになってもらおうわ」

「霊力……人間のエネルギーみたいなものでしたっけ？」

「そうね。そんな感じの認識で大丈夫よ。それで、霊力を操って貰う理由としてはその手ね」

パチュリーさんは俺の金属の義手を指差した。

「それは魔道金属。アダマンティウムまでには届かないけれどかなりの強度を持っているからそう簡単には壊れてくれないわよ。まあ、使った材料が材料だしね。それで、その義手を動かす方法が霊力等による物なの。さつき館のそとに出たわよね？」

「……出ました……」

「どうだった？義手は動いたかしら？」

「いや、急に動かなくなりました」

「でしょう？そのお陰で私が渡した水晶も落としたみたいだし。別に大したものじゃないから良いのだけれど、今後は気を付けなさい」

「はい……」

パチュリーさんは良しツと満足げ頷き話を続けた。

「それで、さつきも話したけれどその義手の原動力は魔力や霊力等といったものが使われていて、この館内は私が防護魔法を掛けているから一度動かせばずっと動くだろうけど、外だとそうもいかないのよ。だから貴方にはその義手を動かす程度の技術は学んで、実行できるよ

うになってもらうわ」

霊力……何となく分からないでもないが、……あれだ、陰陽師とかの奴だ。だけど、自分がその霊力を使うとなったらどうすれば良いのだろうか？

「ああ、それなら私が教えるから気楽に構えなさい。そりゃあ最初は大変でしょうけれどね」

「そうですか。よろしくお願いしますパチユリーさん」

「それじゃあ、もう一つ……とは言ってもこれが最後の話になるのだけれど……」

■□■□

「そう……ですか……」

「ごめんなさいね。本当ならもう少しどうにかしてあげたかったのだけれど……私の専門分野ではないの……許してちょうだい……」

「許すも何もパチユリーさんは俺を助けてくれただけなんですよね？なら、俺がパチユリーさんに感謝する事はあれど、恨んだりするような事は有りませんよ。むしろ、こんな身体にしてしまった俺自身を恨むべきです。にしても……まさか俺の体がこんな事になるなんて……昔の俺は絶対に想像していなかったでしょうね」

「……ごめんなさい」

「謝らなくて良いですってば。むしろあれは自分への嫌みですよ。もっと自分の身体ぐらい大切にしろや!!って」

「……ふふふ、意外と優しいのね」

パチユリーさんは笑ってくれた。それは作り笑いであつたけれど、笑ってくれた。だから俺も作り物の本当のこの気持ちでおどけてみせるのだ。

■□■□

パチユリーさんに案内された部屋で一夜を過ごし、何事もなく目を

覚ます。すると、目を覚ましたのを見計らったようにこあくまさんが部屋へと入ってきた。

「佐々木様。レミリア様から部屋まで来るようにとの事です」

そう告げたこあくまさんは部屋から出ていった。

俺は直ぐに準備を済ませ（とはいっても着替えなんて無いので、歯を磨いて、顔を洗った程度だが）部屋を出る。また前回のようにかしらの方法で案内してくれるのだろう。と思いつつ部屋を出て、既に起きていたパチュリーさんとこあくまさんに軽く挨拶をした後、図書館から出る。案の定外にいたメイドさん（妖精という奴だろうか？）に案内され、レミリアさんの部屋の前まで何事もなく来れた。

扉をノックし返事を待つ。『ショウか。待っていた入ってくれ』と返事は直ぐに帰ってきた。

「失礼します。おはようございますレミリアさん」

「吸血鬼からしたら夜だがなつと、こんなふざける為に呼んだ訳ではないのだ」

最初こそおどけるように笑っていたが、一瞬にしてその顔から笑みは消え、真剣な表情で此方を見ていた。そして……

「この度は済まなかった」

膝を折り、地に額を付け謝ったのだ。俺はただ、それを見ているしかでできなかった。訳がわからなすぎて、動けなかった。何故なら、目の前で起きている出来事は、社長が平に対して土下座をしていることとほぼ同じだからである。

「えつと、あの……状況が理解できないのですが……。と、兎に角顔を上げてください!!」

「それは出来ない」

「どうして!?!」

「私は紅魔館の主。そしてショウは客人だ。だというのに私はショウに危険が及ぶと分かっているながら、ただの私欲の為に咲夜を煽った。紅魔館の主として、客人相手にこれ程の無礼はない。本当に……ッ!!済まなかったッ!!そして、フランを……私の、妹を……すくってくれ……てッ、感謝するッ!!ありが、とうッ」

耳に届く謝罪と感謝の言葉。そして、微かに聞こえる水の音……顔を上げてくれなんて、冗談でも言えなかった。



それから数分、レミリアさんが顔を上げ漸く話が出来る状況になった。
「んっ、それじゃあ話を始めようか」

そう言うレミリアさんの頬はうつすらと朱に染まっていた。

「はい。それで、自分に話とは一体？」

「いやなに、シヨウは被害者な訳だから、事情を話しておかねば思っ
てな」

「事情ですか」

「ああ……。まず、私はああなることは知っていた」

「知っていた？」

「私には見えるのだよ……運命という奴がね」

そう言えば……この間運命を操るだとか何とか言っていた気がする……。

「まあ覚えていないのも無理はない。なんせあんな状況にしてしまったのだからな。私にはあのととき幾万と言う数の運命が見えていた。運命というのは血管のようなものでな、大きな血管から枝分かれして細い血管に繋がっている。私はフランを救いたかった。外に出したかった……しかし、な？駄目だった……私も父と母のように殺されるのではないのか……？そんな死への恐怖が私を進ませようとはしなかった。それでも何とかしようとはしたのだがな……？だが、その頃には、フランの心へ私の声は届かなかった。それから三百年……お前が現れた。そして、見えたのだ、傷だらけになりながらフランの部屋に逃げ込むお前が。フランの手を握っていたお前が。しかし、それもしよせんは運命なのだ。そう都合の良い方へと必ず転がるわけではない。それでも、私は雲をつかむきような気持ちで、お前に、シヨウに賭けたのだ」

「そうですか……。お役にたてたようで何よりです」

「ああ……。本当に、ほんつとうに済まなかった。そして、フランを救ってくれて、どうも、ありがとう!!」

俺は振り替えることなく部屋を出た。扉を閉めるときにチラツと見えた飛び欄隙間からはレミリアさんが深々と頭を下げているのが見えた。

ああ、本当に、この世界は俺には生きづらい

第15話 約束

レミリアさんとの話も終わり館内を適当にぶらつく。……本当は迷っているだけなのだが……。

「……にしても………本当に広いよなあ」

窓の外に映る景色を見ながら改めてこの館の大きさに圧巻される。そして、今言えることは、図書館は地下に存在している、と言うことだ。そう、『地下』に、存在しているのだ。だというのに今現在俺は中庭を上から眺めている。別に方向音痴と言うわけではないのだが、確か此方だったはずと道程に沿って歩いてみれば下り階段が見当たらず半場諦めの域に達しながら階段を上った。

「……取り敢えず、戻るか」

どうせこのまま進んでも拉致が明かないのは明白だ。それならば戻って階段を降りた方が良さだろう。

『あ!!おじさん!!』

もと来た道に戻っていると、曲がり角から少女が飛び出してきた。その顔には満面の笑みが浮かんでおり、此方も何だか救われた気持ちになる。

「こんにちは。吸血鬼は夜に寝ると聞いていたんだが……こんなところで何をしているんだい？」

『えっと、おじさんがあの後居なくなっただから少し休んだ後探してたんだ』

「僕に何か用があるのかな？」

『うーん……用事ってより約束? 契約って言った方が良い? それと、口調。そんなに固くされても私は嬉しくないよ』

契約……? と言うと、あれか、外に出す代わりに守ってくれるつてやつ。正直無かった事にしたんだが……なぜなら、この契約は余りにも俺に得が有りすぎる。それは忍びないから、せめて内容をもう少し変えたいところだ。

「ねえ、じゃなくて………なあ、もう少し契約の内容を変えたりつてのは出来ないのか？」

『え？うん……そりやあでできるけど……どうして？』

「いや、内容がさ『俺が君を外に連れ出す』のと『君が俺を守る』ってのは余りにも不釣り合いだと思ってるな」

『……………そっか。おじさんは優しいんだね。だから、一つだけ教えてあげる。願いの重みって言うのは、其々によつて違ってくるんだよ』

「いや、まあ、確かにそうかもしれないが……………」

『まだ引かない？だったら、今はまだ準備が出来てないから、さ？準備出来たら叶えて欲しいな』

「……………分かった。俺にできる範囲でなら、どんな願いでも叶えて見せるよ」

『約束だよ？』

俺は少し不安げに此方を見つめてくる少女に対し、確りとその瞳を見つめ頷いた。すると少女は小さく『ヤクソクだからね』と微笑んだのだった。



あの後少女は館内を探検に出掛けていった。俺は図書館に戻るべくぐるぐると適当に歩き続け、十分程さ迷った後、漸く図書館までたどり着いた。早く道を覚ええないとな。せめて図書館とレミアさんの部屋には行けるようにしておかないと。なんて考えながら図書館の奥、パチュリーさんが居るであろう場所まで進んでいく。

しかし、その足は急に歩くのを止めた。それもそうだ。なんせ目の前について先日自身を殺さんと刃物を投げ、突き刺してきた人物が居たのだから。

「お帰りなさい松。ほら咲夜、事情は説明したでしょう？松は貴女の父親ではないのだから、やることがあるでしょう？」

「……………」

さくやと呼ばれた女性はゆっくりと、重い足取りで此方に近付き腰を曲げた。その肩は此方が同情するほどに震え、そしてピシヤピシヤ

と耳に届く水の音は彼女がどれだけ強い感情を持っているのかを実感させる。

「先日は……申し訳有りません、でした」

「いや、良いですよ。多少怪我はしましたが死んでいませんから」

「ありがとうございます」

「……良くできたわね。下がって良いわよ」

パチュリーさんがそう言うと、目の前にいたはずの少女はふつと目の前から姿を消した。

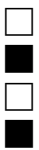
「はあ……ごめんなさいね。あの子小さい頃酷い虐待にあつていてね……ええ、まるで奴隷のような扱いをね。それで、その父親と貴方がそっくりなのよ。髪の毛の色とかは流石に違うのだけれど、それでもあの子には刺激が強すぎたみたい……」

「そうだったんですか……悪いことをしてしまったみたいですね」

「何言ってるのよ。顔の似てる似てないなんてどうしようもないんだから貴方が悪くなるなんてあり得ないわ。むしろ悪いのはレミィね、後でキツク言っておかないと……。それはそうと、今日から早速靈力の扱いについて教えていこうと思うわ。本当は約束も守られていないから此処まで義理立てする必要も無かったにだけれど、フランを救ってくれたお礼もあるしね。ビシバシ行くわよ」

「宜しくお願いします」

「とは言ったものの、靈力を操るだけならようは慣れの問題になってくるのよね。だから、私よりもエネルギーの扱いに長けている者が居るからそつちに行きましよう」



パチュリーさんに付いて行き、昨日の夜に訪れた門の前までやってきた。

『おや？パチュリー様が此処まで来るなんて珍しいですね。本日はどのような後用事で？』

「あの人間に靈力の扱いについて教えてくれないかしら？」

『それは良いのですが……パチュリー様が教えれば早かったのでは？』

「そうしても良かったのだけれど……魔力ならともかく、霊力なら私よりも扱いに長けているでしょう？」

『あの……私が扱うのは妖力と気なのですが……』

「それじゃあ私はあの木の下で本を読んでいるから、終わったら教えてちょうだい」

『あ、ちよ……聞く耳持たずですかあ……私の方が年上なのに……』

パチュリーさんと門番さんのやり取りが終わり、パチュリーさんは木の下で本を広げ、門番さんは此方に向き直った。改めて対面してみるとこの人かなり背が高い。目線が同じ……大体177前後か……デカイな……。

『えーでは……自己紹介をしておきましょうか。私は紅 美鈴。くれないと書いてほん、美しい鈴と書いてめいりんと読みます。以後お見知りおきを』

「これは丁寧にも難うございます。私は佐々木松と言うものです。しようは松って書きます。よろしく願います」

「此方こそよろしく願いますね松さん」

紅さんと握手をして自己紹介は終わり。

「それで早速で悪いのですが……意識が飛ぶと思いますがそれが手っ取り早いので、少し失礼」

「え？」

握りあつた手は離れることなく、紅さんがそのまま俺の胸に手を置き――

「カハッ!!!」

――とてつもない衝撃に視界は黒く沈んでいった。

第16話 気配

「あ、目が覚めたようですね。おはようございます」

ぼんやりと揺らぐ世界で聞こえてくる声。ゆっくりと視界のピントが合い初め、漸く声の主が紅さんであることに気が付いた。

「大丈夫でしたか?」

心配そうに顔を覗き込んでくる紅さんに妙に重い口を開き、掠れた声で大丈夫だと返した。

「うーん……全然大丈夫そうには見えませんね……どうしましょうか……話聞くだけなら出来ますか?」

「は……い」

話を聞くだけならば全然問題ないので返事を返した。声を出すのも痛くはないのだが、喉の奥に何かが張り付いているみたいで息苦しい。それに体はウンともスンとも言わない。

「無理して返事をしなくても良いですからね?」

それでは、修行の前に色々説明しておきましょう。先程私がした行為ですが、貴方の霊力を活性化させ、パチュリーさんが流し入れた魔力を強制的に放出させるための行為です。気絶させたのは麻酔の代わりのような物で、一時的に貴方の体を仮死状態にさせていただきました。痛みでショック死されたら困りますからね。それですが、今貴方の体は魔力の障害なく霊力が扱える体になっています。まあ、大雑把に言ってしまうえばですね、今のうちに霊力の扱いに慣れてくださいというわけですね。それと、霊力を扱えるようになるまではその右手も動きませんので、頑張ってくださいね」

「意外とスパルタね美鈴」

「そうですね?それじゃあ……取り敢えず体が動くようになるまで待ちましょうか」

紅さんはそう言うとパチュリーさんの方に歩いていった。それから少しして体に妙な違和感を覚えた。このからだ全体を波に揺らされているような、言葉では表現の使用がないこの感じ……これが霊力と言うものなのだろうか?意外と扱いやすいものなのだろうか?霊

力と言うものは。これなら俺にも十分扱えそうだ。

等と考えながらボツとしていと紅さんが慌てた様子で戻ってきた。紅さんは辺りをキョロキョロと忙しなく見回しているが何かあったのだろうか？

「……変な気配がしたのですが……松さん、何かが近くに来たりはしていませんか？」

いや、何も。と言う意味を込め軽く首を振る。

「そうですか……お騒がせして申し訳ありません。ゆっくり休んでください」

紅さんはそう言い残しまたパチュリーさんの方へ戻っていった。



それはパチュリーさんと彼、松さんに事について話している時のことだった。

急に松さんの体から霊力が溢れだしたのだ。霊力の量事態は一般人とさほど変わりはないものの、活性化させたとはいえここまで爆発的に霊力が溢れだすなんてことはまず有り得ない。それに、霊力の扱いに長けていない者がこんなことをしたら死んでも可笑しくはないのだ。霊力とは生命エネルギーと同じ様なもので、それを放出する……自殺行為にも程がある。しかし、彼はなんの変わりもなく、そこにいた。私とも、お嬢様とも、パチュリー様とも、博麗の巫女とも違う……得体の知れない、気持ち悪い気配と共に。

私は急いで確認した。彼のそばに近寄って気配、気の痕跡も探ったが何も分からない。そこにあつたのは何の取り柄もなさそうな、平凡な一人の人間。しかし、私にはそれがとても恐ろしく見えた。

もし、もしも、こんな霊力も満足に扱えない者にとてつもない力が宿っていたら……？

もしも、その力が表に出てきたら……？

彼は、その力を満足に扱うことが出来るのか？

答えは単純 否だ

そして、そんな得体の知れないものに私は勝てるのか？

今この場で暴走し、紅魔館を守りきれぬのか？

分からない

相手に攻撃が通じないかもしれない。そんな相手にどう戦えばいいと言うのか。これは私の単なる想像でしかない……だとしても、外れている可能性も0ではないのだ。

だとしたら、今の私に出来ることは何だ？松を殺すこと？確かにそれが一番手っ取り早い。けれど、お嬢様はそれを良しとはしないだろう。絶対に。それに加え、松が死んだことによつてその中の何かが暴れでもしたら目も当てられない。

だとしたら、暴走させないようにするしかない。彼を鍛え、そのナニかに負けるような事のないように……それしか私に出来ることはない。

「どうだった？」

「どうだった……とは？」

松の元から戻ってきた私に、その口元に不気味な笑みを浮かべながら質問してくるパチュリー様。

「貴方も感じたんでしょう？松はね、私の魔術を何度かはね除けたんですよ。そう……ただの人間の筈なのに何でかしら？霊力もまとも……いえ、考えたことすらなかったような人間がよ？もしそれが能力だとしたら……いえ、能力じゃないほうが嬉しいわね。あああ、いづぶりかしらこんなにも貪欲に知識を求めなくなったのは。けれど、あの子にはフランを救つて貰つた恩もあるし、下手に手を出せないのが残念ね。レミイも許してくれないだろうし……出来る限りの外には出したいくないってのが本音なのよねえ。本当だったら霊力の扱ひも私が教えるつもりだったのだけれど、どうせ手出しが殆ど出来ないのなら誰かに任せて私は観察に徹底しようかなつて思つて貴女のところに連れてきたの。そうしたら案の定早速不思議な事が……ああ、ほんつとうに良いわ……これで松に手を出せる事が出来れば百点満点だったのに」

パチュリー様は不気味な笑みを浮かべたまま饒舌に、言葉を吐き続

けた。

何度か見たことがある。咲夜さんがこの館で働くようになったときもこんな風になっていた。ここまで酷くはなかったものの、その執念は凄まじいものだった。酷いときでは部屋に軟禁……と言うこともあったみたいだ。まあ、それでも待遇は悪くなかったようだが……。

しかし、今回はそれを越えている。だとすれば、軟禁どこの話では済まなくなってくるかもしれない……そうすればスカーレットの名に傷が付いてしまう。私が彼を守らなければ……。



体が動くようになった。それと同時にあの体を覆うような暖かさも無くなり、今度は体の奥からほんのりと感じ取れるようになっていた。

「どうやら動けるようになったみたいですね。それでは、早速修行を始めていきましよう」

「宜しくお願いします」

「はい。よろしくお願いしますね。では、楽な姿勢で座ってください。胡座でも正座でも、足を伸ばしても構いませんよ」

俺は言われた通りに楽な姿勢、胡座をかいて地面に座った。

「今から行うのは精神統一の修行です。やることは至って単純でこれから日が沈むまでずっとその体勢を維持してもらいます。そうですね……今からですと……取り敢えず三時間。その後一時間の休憩を入れ、そこから五時間といった所でししようか」

「分かりました」

「最終的な目標としては、霊力を操れることでは有りますが、目標と言うものは少し高めに設定していた方が良いでしょう。寝ている状況でも霊力を維持できる。もしくは起きた直後すぐに霊力が展開できるようになる。と言うことを目標としましょうか。とは言っても言葉だけでは分かりませんよね。まあ、そのうち分かってくるようになる

りますよ。それと、修行中別のことを考えたり、寝てもいい良いですがその姿勢だけは絶対に崩さないこと。いいですね？」

「分かりました」

こうして修行が始まるのだが、これは想像以上にキツイ。

ただ座っているだけ。そう座っているだけなのだ。手を動かすことも、足を動かすことも、首を動かすことも……何も出来ない。

そう、それはまるで、実家に戻ったようだった。言葉がないあの食卓。ただ口に物を運ぶと言う作業のような食卓……。

俺はそんな作業をたんたんとなしていった。

第17話 踏み込んでくる者

長いようで短かった三時間を過ごし今は一時間の休憩を取っている。昼食は紅さんが作ってくれた握り飯を三つ頂いた。しかし、なにもしないと言うのも退屈なものだ。これならば何かに縛られながらも強要される形でなにもしないと言う方が楽かもしれない。

三時間と言う時間は長いようで短い。しかしながらその短さの中で世界と言うのは姿をガラツと変化させる。

修行を始める前は雲がちらほらと漂っている程度の空模様が、今では太陽も雲に覆われ顔を覗かせることはない。所謂曇り空。しかし、雨は降りそうではない。この雲たちも一時間とすれば無くなっているであろう。

太陽の恵みも、その呪いも、雨の恵みも、その呪いも、その両方を遮る雲を人間に例えるなら、人畜無害。これが当てはまるだろうか？誰にたいしても平等に接する。深入りもしなければ、ぞんざいに扱うこともない。

幻想郷に来る前から理解はしていた。けれど、最近になってより一層分かるようになったことがある。けれど、それが何なのか、どんな表現をすれば良いのか分からない。

ただ、言えるのは、レミリアさんと少女の再開の時に抱いた感情とは明らかに違うと言うこと。

「……………はあ」

幻想郷に迷い混む前、一日に何度も苦笑いと作り笑いを繰り返してきた。そうすれば、心の靄を騙しとる事が出来たから。周りも、それを良しとしたから。

しかし、この世界は違った。優しいのだ。苦笑いを浮かべる必要も、作り笑いを作る必要も殆ど無いほどに、優しいのだ。美しいのだ。それは、唯一の逃げ場を失ったのと同じだった。だから、逃げ場を作るしか他になかった。相手の笑顔を作り物として受け止めた。そうしないと、押し潰されそうだったから……。

『おーじーさん!!』

「!?って、君か……どうかしたのか？」

『怒らないの？つまんなくい!!』

「つまらないって……君なあ」

寝そべって空を眺めていた視界に突如として現れた少女。その顔にはつまらないと言っておきながらも満面の笑みが浮かんでいた。作り物でも何でもない、太陽のような笑みが浮かんでいたのだ。空を覆う雲をはね除けるかのような笑顔。それは、俺では一生出すことの出来ないもの。

俺には少女の、その笑顔を作り物だとは到底思えなかった。

『おじさんはここで何をしてたの?』

「修行だよ。今は休憩中でなにもしてないけど、さっきまでは精神統一の修行をしていた」

『窓の外におじさんが居たから来てみたけど、そんなことしてたんだ。そんなことしなくても私が守ってあげるのに……』

「確かにそう言う約束はしたけど、やっぱりある程度は自分で出来ないといけないからな。それに、ずっと居候の身でいるつもりもないから、その間までにはこの手を自由に動かせるようにならないと」

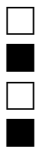
『おじさん、どこかいっっちゃうの?』

「直ぐに、って訳じゃないけどそうなるのかな」

『そっか……何か嫌な事とかあったら何でも言っただろ?あのメイドとかもどうにかしてみせるから』

神秘的な表情のまま少女は去っていった。

そして、俺はその哀愁漂う背中に、心の中で小さく呟いたのだ……俺が逃げたい原因は、君にもあるんだ、と。



今のは……妹様でしたよね?松さんと何か話していたようですが……。それにしても、外に出ることを恐れていた妹様がこうして出てきている……。話には聞いていましたが本当だったとは、確か松さんが助け出したんですか。これはお礼を言わなければ。

「松さん」

「あ、紅さん。もう一時間経ちましたか？」

「いえ、もう少し有りますよ。それよりも今の子は……」

「ああ、あの子ですか。正直名前は知らないんですけど一応自分が助けたみたいです」

「やっぱりそうだったのですね。恐らく色んな方から言われているでしょうが私からも言わせていただきたい……我が主の妹フランドール・スカーレットを助けていただきありがとうございます」

「いえいえ、自分がしたことはただあの子の背を押しただけです。そんなお礼を言われるようなことじゃないんです。ええ、本当に、お礼を言われるような事は、していません……」

そう、最初は自分の身を守るためだけにあの子に手を伸ばした。そこに彼女の願いを叶えると言う契約が有ったとしても、自分で自分の事はどうかしないなんて考えていたとしても、俺はあの時、確かに少女の事を『盾』として契約したのだ。確かに俺は、少女を『盾』として認識したのだ……。

そこに軽蔑される事はあっても、決してお礼を言われるような事は何一つない。レミリアさんの時も、本当だったら謝り、お礼を言い続けるレミリアさんを止めるべきだったのだ。

「貴方がそう言うのであればそうなのかもしれないですけど、貴方を評価するのは貴方ではないんですよ？」

「……………」

「だってそうでしょう？ 私は貴方では佐々木松ではなく、紅美鈴だから。」

佐々木松自身が何れだけ自身を評価し、その評価が低かったとしても、それは、自身の全てを知っているから。その心の内で何を考えているのかも、全て知っているから。

けれど、私は紅美鈴は紅美鈴の持つ情報だけで佐々木松を評価しなければならぬ。貴方の言動、つまりは外側は評価対象になるでしょう。しかし、内面は絶対に評価されません。それが、何れだけ長い付き合いの相手だとしてもです。何故なら、それは所詮その人が貴方に

抱く想像でしかないのですから」

確かに……そうだ。外の世界でも、自身の株を上げるために上司に媚を売るやつがいる。誰にでも優しくするやつもいれば、誰にも興味を示さない人間だっている。

しかし、それを評価するのは他人だ。外見や言動から、あの人は乱暴。あの人は大人しいと勝手に決めつける。

「……だったら……なんですか？確かに、相手を評価するのは自分じゃない。周りの存在第三者です。だから人は、自身の株を下げないために必死に自分を取り繕う。それが駄目なんですか？」

「駄目とは言いませんよ。ですが、貴方はどうなんですか？」

『いえいえ、自分がしたことはただあの子の背を押しただけですから。そんなお礼を言われるようなことじゃないんです。ええ、本当に、お礼を言われるような事は、していないんです……』

貴方の言葉は、自分の株を下げない為の物ですか？前半分までならただ謙遜しているだけにも聞こえます。ですが、後ろ半分は？私には弱々しい自分を前に出して、自身の株を下げている様に聞こえます。他には悩みを持っている様にも聞こえますし、強制されたようにも聞こえます」

「そ、それは……貴方がそう勝手に解釈しているだけでじゃないですか」

「相手を評価するのは自分じゃない。さっき自分でも言っていたじゃないですか」

なんだよ……なんでこの人はこんなにも俺に踏み込んでくる、そこに貴方のメリットは存在しないだろう……？もう、止めてくれ、止めてくれよ……。

「そ、そんなことはどうだっていいでしょう!?!いい加減修行の続きを「いいんですよ?吐き出しても」は?」

「吐き出して、良いんです。私が全部、聞いてあげますから」

静かに響いたその言葉に俺は何も言えなかった。

「何時でも待っていますよ。それじゃあ、修行の続きを始めましょう」

ただ、その場で呆けるしかなく、修行は再開された。



話した、踏み込んでみただ、頼ってもよいと言った。けれど、松さんから警戒のような感情は抜けなかった。

駄目だ、そんなんでは守るに守れないじゃないか。私は貴方を守らなければならぬのに、貴方がそんな態度では私は何も手出しできないではないか……。

どうして貴方はそんなに誰かと付き合うことを嫌うのか、そんなに私は頼りないのか、いざというとき助けられないではないか……。

「何時でも待っていますよ。それじゃあ、修行の続きを始めましょう」
私は貴方を助けたいのに、ただそれだけなのに……貴方はそれを良しとはしない。

言葉では言わない、行動でも表していない。ただ、分かる。そんな雰囲気はひしひしと伝わってくる。

その日から私は彼の行動一つ一つを注意深く観察するようになった。

彼の心を開くために……些細な癖まで覚えるほどに観察を続けた。
当初の目的も何もかもを忘れ、彼と一緒にいる時間がとても好きになった。

けれど、私はまだこの感情が何か分かっていない。

お嬢様と初めて出会ったときも、咲夜さんを助けたときも、妹様が外に出てくる様になったと聞いたときも、全く違うその感情……

『美鈴さん……少し、良いですか？』

彼が声を掛けてくる夜、その時、月明かりに照らされた疲れたその顔を見るまで、私はその感情を理解できなかった——

END 2 甘い夢

初めてだった、あんなにも入り込んでくる人は。出会ってまだ数時間の相手に、外の世界ではまずいない相手。もっと早くあの人に会えていたら、今頃俺は変わっていたのだろうか？

何度も、何度も何度もあの時の言葉が頭のなかで繰り返される

『吐き出して、良いんです。私が全部、聞いてあげますから。何時でも待っていますよ』

『——じさん!!おじさん!!』

「ああ、君か。どうした？」

『……何だか元気がないね。そんなに修行が大変だった？』

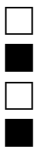
「いや、そう言う訳じゃないんだ……ただ、ただちよつと……疲れただけで」

ああ、駄目だな、少女に全部吐き出してしまおう何て考えるなんて……。

『そっか……、ねえ、おじさん』

「ん？」

『一緒にご飯食べよう?』



少女の部屋の前には、狙い済ましたかのように二人分の食事が置いてあった。最初から俺と食べるつもりだったらしく事前にレミリアさんをお願いしていたそうだ。

自分の分を左手に持ち少女の部屋へと入る。少女の部屋は相も変わらず薄暗い。

「いただきます」

料理を机の上におき、右手は動かないので、左手だけを顔の前に持ってきて呟く。

『おじさん、いただきますってなに?』

「日本ではこうやって食べ物に感謝するんだよ。このお肉だって元は

生きていたんだ。その命を奪って、私達の生きる糧となってくれているんだ。だからこうして、今は左手だけだが、本来なら両手を合わせて、いただきます。って感謝するんだ」

『へー、えっと、手を合わせて……いただきます!!』

少女は子供らしく大きな声でいただきますと言った。その言葉に本当の意味で心は籠っていないのだろう。けれど、外の世界でも大体そんなものだ。真に感謝しながらいただきますを言っているものは一割ぐらいだろう。現に俺も体裁と言うモノを気にして言っているだけのだから。

取り敢えず水を飲もう。

『ねえ、おじさん。おじさんはさ、誰かと一緒に居るのが嫌い?』
「……………」

少女の急な問いに一瞬頭が真っ白になった。

口に含んだ水を溢さないように飲み込み、コップを机に置く。

しかし、嫌い……なのだろうか?別に相手に嫌悪感を抱いた事はないが、かといって楽しいと思ったことも……ないと、思う……。

『私はね、今こうして、おじさんと一緒に居られるのが嬉しいよ?』

アリスさんの家に居たとき、俺はどんな感情を抱いていたのだろうか?確かに、今でもあの時の事を思い出すと背中を冷たいものが流れていく。しかし、それ以前はどうだったか?俺はアリスさんに嫌な感情を抱いたけれど、それに罪悪感も抱いていたはずだし、出会った当初は見とれたりもした。それから数日は多分、笑っていたはず……そう、社会の柵も、過去の記憶も何もかもを忘れ笑っていたはずなんだ。つまり、楽しかったのではないか?嬉しかったのではないか?分からない……分からない……けれど、一つだけ確信を持って言えることは

「——嫌じゃない」

『そっか』

少女は笑った。

そこに柵なんてものはなく、かといって、少女から感じていた息苦しきなんてものも存在しなかった。

『嫌じゃない……嫌じゃない……か。私もね、お姉様やパチュリーと一緒にいるのが嫌じゃないんだ。いや、本当は嬉しいんだと思う。けど、どうしても考えちゃう……これはただの甘い夢で、夢から起きたら、またあの暗闇に独りなのかなって……』

少女は笑った顔のままポツポツと呟いていく。その声は掠れ耳を澄まさないと聞こえないほどだ。

『ゴメンね、ゴメンね……』

「なんで謝る……んだ？」

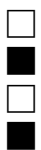
『ゴメンね………ねえ、おじさん』

ちよつと待ってくれ……急に眠くなってきたぞ……？修行でそんなに疲れていたのか？いや、そんなはずは……ああ、くそ………ねむ、い……

『おじさん……私のお願いを聞いてくれる？』

「すこ、し………まっ」

『ずっと、ずーつと……この甘い夢をミサセテ？』



男はゆつくりと倒れ、女の体に抱き締められた。

女はそんな男を抱き締める。強く、強く、強く。

男の体からパキパキと言った軽快な音が鳴り響く。その音が聞こえる度に女はその表情をだらしなく緩めていった。その口からは涎が垂れ、目はトロンと垂れる。

男からは赤い汗が流れていた。それを女は小さく『だらしないよ？』と呟きながら舐めとる。首筋に流れる赤いモノを、口から溢れ出す赤いモノを、それが血液、血だとは気づかず女は一心不乱に汗をなめとった。

何時しか、男からは汗も流れなくなった。パキパキと軽快な音もなくなかった。

しかし、今度はぐちゃぐちゃと言った音が女の耳を犯す。それだけで女は発情し、そのぐちゃぐちゃと音を鳴らすものに這い寄った。青

くなつたそれに手を当て、ゆつくりと撫で回す。そのの一部を持ち上げ、自身の体に当て荒い吐息を吐き出した。

それはもとの原型を保っていないかつた。それはただの肉塊。青緑色に変色、腐敗した肉塊。

女はそんな肉塊の上に股がつた。女は腰を振つた。まるで、そこには別のものが見えているかのように、別のなにかがあるかのように。女の目に光は宿っていないかつた。



「くそっ!!」

とある扉の前。そこには爪をギリギリと噛み締める女がいた。

扉をぶち破ろうと思えばいとも容易く出来ることだろう。なにせ、女は血を吸う鬼、吸血鬼なのだから。その力は人間とは比べ物にならない。

けれど、それは出来なかつた。その扉には魔術が掛かつていた。無理矢理にでも開けようとすればこの部屋もろとも消し飛ぶほどに強大で無差別な魔術が掛かつていたのだ。

「フラン、フラン!!聞こえているなら出てくるんだ!!」

女には妹がいる。この世で唯一無二の親族、血を分けあつた愛する妹がいる。

妹には力があつた、その身には大きすぎる力が。それを恐れ女は妹を地の奥底……目の前の扉の奥へと閉じ込めた。けれど、女は直ぐにそれが間違いだつたと気付く。勿論放っておいた訳ではない、何度もその部屋を訪れた。が、妹の目からは恐怖の視線しか生まれなかつた。

しかし、妹を閉じ込め四百年ほど……救世主は現れた。救世主は女の妹を地の奥底から救いだし、それどころか女と妹を再開させてくれたのだ。

再開したとき妹の目には戸惑いこそはあつたものの恐怖は存在しなかつた。

これから、これからだったじゃないか……

女は呟く。涙で顔をぐしゃぐしゃにしなから。

「お前と再開できてまだ一週間も過ぎていないのだぞ……？それが今はどうだ……もう、こうして一年が過ぎようとしているじゃないか……またか、また、私が力不足だったから……ッ」

キイイイ……

突如として響く小さな木がきしむ音。女は顔を上げた。そのぐしゃぐしゃの顔に疑問と喜びを見せながら。

しかし、その顔は直ぐに歪んだ。

女は吸血鬼だ。血の匂いなんて物はなれている。むしろ、食欲をそそる甘美な匂いだ。けれど、扉の中から漂う血の臭いと、何とも言い知れぬ鼻を付く刺激臭に顔が歪む。

そして、そこから姿を現す者……フランドール・スカーレット、女、レミリア・スカーレットの妹が出てきた。

しわくちやで黒ずんだ服で身を包み、その生気のない目はトロンと垂れ、何か別の世界を写しているようだ。そして、その両手で抱える何か。青緑色の肉の塊……。

『あ、おねえさま。ごめんなさいなにもいわずかつてなことをして。わたしね、おじさんとけっこうんしたの。ほら、このこかわいいでしょう？わたしとおじさんのことも……もう、おじさん……あいのけっしようだなんて……はずかしいよ』

レミリア・スカーレットは困惑した。

この子は、妹は、フランは何を言っているんだ？子供？ただの異臭を放つ肉塊ではないか。おじさん？シヨウのことか？だが、シヨウの姿なんて何処にも……

レミリア・スカーレットは運命を遡る。フランドール・スカーレットとシヨウの運命を遡る。

そして、理解する……自分が全く視野に入れていなかった事が起きたと言うことに、今さらになって知った。そして、この中で何が起き

たのかも、客人であるシヨウがどうなったのかも、フランドール・スカレットが何を望んだのかも……そして、それが、自身の、レミアア・スカレットの力不足だったから起きた悪夢だと言うのことも……。

すべて、全てを理解した。

だから、レミアア・スカレットは妹にこう答える。

「そうか……お姉ちゃんは先をこされてしまったようだな」

最早笑いとも取れない笑みを浮かべる。

そう、レミアア・スカレットが取ったのは、妹が願った甘い夢を続けることだった。

こうして、少女の甘い夢はこれから数百年と続いていく。

誰にも邪魔されず、ただただ幸せな世界。それは他人が見たら不気味で、頭のイカれているおままごとに見えるだろう。

けれど、少女は言うだろう。最早何も残っていない両手に赤子を抱きながら、誰にも見えない夫に対して

『幸せだね』

と、太陽のような、理不尽に不気味に輝く笑みを浮かべながら……。

END 2

甘い夢

END

第18話 こんな俺でも

少女の部屋の前には、狙い済ましたかのように二人分の食事が置いてあった。最初から俺と食べるつもりだったりらしく事前にレミリアさんをお願いしていたそうだ。

自分の分を左手に持ち少女の部屋へと入る。少女の部屋は相も変わらず薄暗い。

「いただきます」

料理を机の上におき、右手は動かないので、左手だけを顔の前に持ってきて呷く。

『おじさん、いただきますってなに?』

「日本ではこうやって食べ物に感謝するんだよ。このお肉だって元は生きていたんだ。その命を奪って、私達の生きる糧となってくれているんだ。だからこうして、今は左手だけだが、本来なら両手を合わせて、いただきます。って感謝するんだ」

『へー、えつと、手を合わせて……いただきます!!』

少女は子供らしく大きな声でいただきますと言った。その言葉に本当の意味で心は籠っていないのだろう。けれど、外の世界でも大体そんなものだ。真に感謝しながらいただきますを言っているものは一割ぐらいだろう。現に俺も体裁と言うモノを気にして言っているだけなのだから。

取り敢えず水を飲もう。

『ねえ、おじさん。おじさんはさ、誰かと一緒に居るのが嫌い?』
「……………」

少女の急な問いに一瞬頭が真っ白になった。

口に付けていたコップを机に置く。結局飲めなかったがしようがない。

しかし、嫌い……なのだろうか?別に相手に嫌悪感等を抱いた事はないが、かといって楽しいと思ったことも……ないと、思う……。

『私はね、今こうして、おじさんと一緒に居られるのが嬉しいよ?』

アリスさんの家に居たとき、俺はどんな感情を抱いていたのだろうか

か？確かに、今でもあの時の事を思い出すと背中を冷たいものが流れていく。しかし、それ以前はどうだったか？俺はアリスさんに嫌な感情を抱いたけれど、それに罪悪感も抱いていたはずだし、出会った当初は見とれたりもした。それから数日は多分、笑っていたはず……そう、社会の柵も、過去の記憶も何もかもを忘れ笑っていたはずなんだ。つまり、楽しかったのではないか？嬉しかったのではないか？分からない……分からない……分らない……けれど、一つだけ確信を持って言えることは

「——嫌じゃない」

『そっか』

少女は笑った。

そこに柵なんてものはなく、かといって、少女から感じていた息苦しきなんてものも存在しなかった。

『嫌じゃない……嫌じゃない……か。私もね、お姉様やパチュリーと一緒にいるのが嫌じゃないんだ。いや、本当は嬉しいんだと思う。けど、どうしても考えちゃう……これはただの甘い夢で、夢から起きたら、またあの暗闇に独りなのかなって……』

少女は笑った顔のままポツポツと呟いていく。その声は掠れ耳を澄まさないで聞こえないほどだ。

「多分……俺もそんな感じなんだろうな」
『……』

「外の世界なんてこんな優しい世界じゃない……顔には決して出さなければ、内では何を考えているか分からない。だからこそ、他人を助けることはあれど踏みいることはしない。危ない橋は渡らず安全な道を選ぶ……それが普通……それが当たり前なんだ……」

勿論、そんな中他人とは違う行動を起こして幸せを掴む奴だっているだろうが……俺には無理だった。危ない道を通るくらいなら安全な道を模索する。誰かを自主的に助けたことなんて無いし、深い間柄になった奴なんていない。全員なあなあで中途半端な関係を築いてきた。

そう、昔の事を思い出すと……この世界は優しい世界なんだなって

思う……俺が、息苦しく感じるくらいには……」

『息苦しい？ おじさんは……帰りたいの？』

「帰りたい……と、思ったことはないな」

これだけ息苦しい優しい世界……しかし、その息苦しさがあっても尚、帰りたいと思っただけではない。

もし、この世界が夢だったとしたらそれはそれで良いのかもしれない……この世界に俺は余りにも不釣り合いだ。

「君はこの夢が覚めるのが怖いのか？」

『……………』

少女の顔が歪む。

「俺は……別にこの夢が覚めてしまっても構わない」

『ツ!! どうしてツ!!』

「どうしてって言われても、構わないものは構わないだよ。ただ……こんな俺でも……悲しくなるのかねえ？ 今まで以上に寂しくもなったりするんだろうなあ」

『…………おじさんは、私と会えなくなるのが寂しいの？』

「多分、寂しいんだろうな」

少女から返答はなかった。

既に冷めてしまった料理を見つめ、そう言えばと思いだし水を手に取った。

少し温くなってしまった水を喉に流し込む。

『そっか……そっか……』

少女は小さく何度も同じことを呟いている。それが数十秒続き、少女が顔を上げる。その顔には笑顔があった。そして、唐突に眠気が襲ってくる。

『お休みなさい、おじさん』

薄れ行く意識の中、聞こえてきたのはそんな言葉だった。



コップの中に入った水を見つめる。水には昏睡の魔術を掛けてい

た。

今思うと、何でこんなことをしようとしたんだろう。と、馬鹿馬鹿しく感じてくる。そして、一緒に居たかったんだろうなあ、って、自分の事がよくわかった。

「おじさん……」

床に倒れ、寝息を立てているおじさんを見つめる。そして、その手をゆっくりと握った。

その手は暖かかった……あの暗闇の中で独りだった私を助けてくれた時のように、暖かかった……。

「おじさんは……私とずっと一緒に居てくれるの？」

答えは分かっていた。けれど、心も、頭も理性も全てがそれを否定した。否定したかった。

もし、そうなってしまったら……、私はまた独りに戻ってしまう……だから……

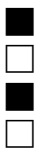
「今だけ……今だけでもいいから……」

おじさんの手をギュツと握り、床に寝そべった。

「……もう少しだけ……甘い夢を……」

ゆっくりと瞼を閉じる。そこは暗闇だ……けれど、直ぐ隣は暖かかった。

私はその暖かさに身を任せ……必ず来るであろう未来から、また私が独りに戻ってしまうであろう未来から、目を、背けるのだ……。



それは夢だ。

何時もと変わらない、誰とも関わらず、誰も近づいてこようともしない。

そう……何時もと変わらない筈なのに、何でこんなにも苦しいのだろうか？ 何で自分はその暖かさを求めてしまうのだろうか？

今までとは逆転した心に違和感を覚える。

何時から変わったのだろうか？ 何時から俺の世界は変わったのだ

ろう？

考えれば考えるほど分からない。けれど……、こう言うのも、悪くない——

目が覚める。どうやら眠ってしまったようだ。隣を見ると少女が苦しげな表情で眠っていた。少女の頭を優しく撫でる。少女の表情はみるみる内に変わっていき、それは笑顔となった。

「修行……頑張るか」

右腕を掲げ、動かない右手を見つめる。

人は変わるものだ。それは勿論俺だって例外じゃない……ただ、その変化は以外と……心地のよいものなのかもしれない。

第19話 弱いもの虐め

流石に床に寝かせたままなのも可哀想なので、ベットのの上に少女を寝かせ部屋を出た。階段を上がり、図書館へと出る。

図書館は何時もの明るさはなく、一つの蠟燭の光だけが二つの影を照らし出していた。

片方は、この右手を直してくれたパチュリーさん。

そして、もう片方は、銀色の髪が特徴的なメイド。

「止めなさい咲夜」

目の前にナイフの剣先が突き付けられていた。あと一センチでも動けば眼球に刺さりそうな程の距離。息が出来ない、首を締め付けられているようなそんな息苦しさが感じられた。

『離してくださいパチュリー様。離していただかなければこの屑を殺せません』

「殺させないために止めているのよ……まったく」

何の話なのか良く分からなかったが、どうやらまたパチュリーさんに助けられたようだ。恐らく魔法か何かでこのメイドさんの動きを止めたのだろう。

ここ最近似たような事が多かったからか随分と冷静になった自分に驚きながらも、これからどうすれば良いのかを考える。しかし、その答えを出すよりも前にメイドさんに変化が訪れた。

「いい加減にしなさい」

ドゴオオ!!

『ガハッア!!』

メイドさんが物凄い勢いで吹っ飛んでいき、本棚に激突したのだ。本棚は倒れず、本が棚から落ちることもなく、激突音だけが図書館に響いた。

「え!?!ちよ、大丈夫なんですか!?!」

「あの程度大丈夫よ。かなり手加減したしね。やろうと思えば豆粒くらいに握り潰せるのだけど、人手が減るのは頂けないのよ」

パチュリーさんに安否を確認するが、どうやら大丈夫のようだ。少

し捻れた答えも帰ってきたりもしたが、俺だつて一人の人間。表面上だけとは言え他人の心配ぐらいはする。それが自然で、普通だから。「にしても……一度殺されかけた身なのにあの子の心配をするのね。なに？ 惚れた？」

「確かに殺されかけましたが……心配することくらい普通でしょう？」

「さあ？ 私は外の世界に詳しくないし、人間でもないから良く分からないわ」

「そんなものでしょうか？」

当たり前障りのない曖昧な返事を返す。自分の行動を肯定と取るわけでも、パチュリーさんの言葉を否定する訳でもない、争いの起きない返事。

「そんなものじゃない？ 人間も人間ならざる者も……分かっている事なんてこれっぽっち。けれど」

『うぐツ』

「面と向かつて話し合えば、少しは分かるんじゃない？ 貴方も、練習になるでしょう？」

「あ、アハハ……」

どうやらバレていたらしい。いや、バレたからと言って何かが変わるわけじゃないが、いや、俺が変わって行かなければならないのか。

こう、考えてみると俺は既に変ったのかもしれないな。以前は他人に歩み寄るなんて事をしようなんて事を諦めていたし、今のままで良いって言い聞かせていたのにな。

「あら、良い笑顔も出来るじゃない」

「良い笑顔……俺は今、笑顔なんです。そっか、俺って作り笑い以外の笑顔も出来るんだ」

「さてと、一歩進んだ直後に悪いんだけど、もう一つ進んで貰おうかしら」



「えっと、取り敢えず……自己紹介かな？」

『屑に教えるような名前は持ち合わせておりません』

椅子に座り目の前の女性に目を向ける。銀色の髪に青色の目。容姿は怖いほどに整っている人間の女性だ。

「俺は佐々木松。君は？」

『さつき言ったことも忘れたのですか？流石は働かない屑ですね。貴方のような屑はさつきと死んだ方が宜しいかと』

「あ、あはは」

さつきの笑顔とは打って変わって、苦笑いでその場を誤魔化す。

俺は日本人だ。生まれも育ちも日本で、父と母も日本人だ。けれど、彼女は明らかに西洋の人。それに、俺はまだ三十になっていない。こんな大きい娘がいるはずがない。もつと言えば、俺はキチンと働いていた。と、言う風に突っ込みたい所は多々あるが、今は置いておこう。下手に刺激したらどうなるか分かったもんじゃない。

「えっと、じゃあ………僕は誰かな？」

『屑です』

「そうじゃなくて、名前。さつき言ったでしょ？まさか、さつき言ったことも忘れた？」

『……ささき………しよう』

「そう。佐々木松だ。なら、君のお父さんの名前は？」

『………』

彼女は黙った。唇を噛み締め、俺を睨み付けた。

正直、自分でもこんなにもスラスラ言葉が出てくるとは思っていなかったから驚いているのだが………どうやら失敗はしていないみたいだ。

「俺は、自分の父親と母親の容姿も名前も覚えていない………覚えていることと言えば………人種と性別位か？それほどまでに、俺のなかで親と云うのは必要のなかった存在だった。そりゃあ感謝しているところもあるぞ？けど、それ以上に無関心な存在だった。他人以上にな。

そう考えると、少しだけ分かるころが有るんだよ………まあ、勝手な思い込みかもしれないけどな。俺は他人と付き合う必要性をつい

最近まで感じなかった。切っ掛けをくれたのは、幻想郷にきて、生き倒れていた俺を救ってくれた命の恩人。疑問を持ったのは紅さんが俺の中に踏み込んできたからで、前を向こうって思ったのはついさつき、こんな俺でも誰かを笑顔に出来るからって分かったから」

『……なにが、言いたいのですか?』

「俺は、君の過去をしらない。他人だから当然だ。父親でもなければ友人でもない……だから、さ? 教えてくれないか? 君の名前」

『お断りします』

「何故か、聞いても良いかな?」

『逆に何故教えなければならぬのですか?』

「相手が名乗ったのなら自分も名乗る……日本では常識なんだが、海外では違うのかな? それとも知っていて黙っている……とか? そうだとしたら俺はレミリアさんの評価をかえなければならぬようだ。自分の部下に常識も教えられない……とね」

『……いざよい……さくや、です……さあ、もう良いでしょう!? 私は仕事に戻らせていただきます!!』

「頑張つてねいざよいさん」

慌ただしく椅子から立ち上がりその場から消えるいざよいさん。

俺はそれを見届け、一気に崩れ落ち、だらしなく机に突っ伏した。

「案外やれるじゃない。正直驚いたわ」

「あはは……このザマですけどね」

「それを言ったらしようがないでしょうに。けど、かつこよかったわよ」

「かつこよかった……ですか……」

そんなはずはない。何故ならこれは、ただの弱い者虐めなのだから。だってそうだろう? 此方に被害が出ることはなく、あっちにのみ被害が出る状況。

俺の株がこれ以上下がることはない状況。それも、パチュリーさんのおかげでナイフも飛んでこない。対してアツチは何も出来ず古傷に散々塩を揉みこまれたようなもの……その行為の何処がカッコいいと言うのか……。

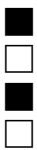
ああ、やつちまったなあ……

なんて、柄にもないような事をやってしまった事に後悔を覚え、また、同時に罪悪感を覚える。そして、前に進んでいるんだと実感した。こんな事でしか前に進めないなんて、どれだけ周りに迷惑を掛ければ済むんだろうかねえ……俺はよお。

そんなことを考えながら、全部引つ括めて隠せもしないのに隠したつもりになって

「いざよいさくやつて、いざよいにさくよる十六夜に咲く夜つて書くんですかねえ？」
そんなことを呟いた。

頬から感じる熱いものは、きつと気のせいなのだ。



くそつくそつくそつくソツソツ!!

壁を殴ったり、蹴ってみる。それでもこの苛立ちは、憎しみは……この、殺意は収まらない。

「ああああアアアアアアアアアア!!!」

頭を掻きむしり、ナイフを『自身の手の平に』突き立てた。

苛立ちとも、憎しみとも、殺意とも違う……この、感情を断ち切るために。

この、なんとも言えない悔しさを断ち切るために——

「なんで!!!なんで今さらになつてツ!!!」

——大きく振り上げたナイフを

ザスッ! ザスッ!

第20話 停滞

「さて……疲れているところ悪いけど、もう一人相手にしてもらわないと困るのよ」

「……マジですか」

「マジよ。それじゃあお願いね。魔理沙」

『お、おう』

是非も言わせてもらえないまま、パチユリーさんはその人物の名前を呼んだ。

黒を基調にした服に、妙に尖った真つ黒の帽子。その帽子からは黄色の長い髪。金色の様に光を反射するような美しさではないが、控え目なその美しい髪はともその服装に合っていた。

「えっと、初めまして。佐々木松です。松は松の木の松で、松って読む。君は？」

『私は霧雨魔理沙だ。霧雨は霧の雨。魔理沙は魔法の魔に、理解の理、沙はさんずいに少いだ。気軽に呼んでくれ』

「よろしく霧雨さん」

「随分と他人行儀だな……まあ、いいか。なあ、松。少し、少し聞きたいことが有るんだが……良いか？」

「自分に答えられる範囲なら、全然構わないよ」

「そうか……取り敢えず、本当ならさつき言うべきだった気もするが、私のこと覚えているか？」

霧雨さんの事を覚えているかどうか？ いや、さつき初めましてって言った筈なんだが……それでも、聞いてくると言うことは何処かで会っているのか？

記憶の中を探ってみるも、それらしき人物は居ない。

………いや、待てよ？ 俺はどうやってこの館まで来たんだ？

と、答えが出てこようとした時、霧雨さんが口を開いた。

「その様子だと覚えてないみたいだな」

「すいません……何となく察しは付いているんですが」

「いや、覚えてないのはしょうがないさ。まあ、察しが付いているって

言ったから何となく分かってるんだろうが、松を紅魔館まで連れてきたのは私だ」

やっぱりか……。

「すいません……迷惑かけたみたいですね。助けて頂きありがとうございます」

謝罪の言葉と、お礼の言葉を言って、頭を下げる。

「いや、その件に関しては全然気にしなくていい。寧ろ、助かってくれてありがとな」

「そう言って頂けると幸いです」

何故か逆に感謝され、取り敢えずの返事を返した。

「でだ、此処からが本題なんだ。お前……アリスと何があった？お前が私の家に逃げ込んで来て、私を掴んで扉の裏に隠れた……そのあと私の家に入ってきたアリスは異常……少なくとも、私が今まで付き合ってきた中であんな状態のアリスは見たことがない。なあ、お前はアリスに何をしたんだ？教えてくれよ」

肌を突き刺すような敵意。その感覚に、外の世界の雰囲気と言うものを思い出す。

いや、まだ敵意と言う明確な感情を投げつけられているだけ、マシなのかもしれない。

まあ、何にせよ、霧雨さんには全部話した方が良いだろう。

「分かりました。俺が知っている範囲で全部話します。」

まず、俺がこの世界、幻想郷に迷いこんで生き倒れていた所を助けてくれたのがアリスさんで、それが彼女との出会いでした。そこで、予定としては一週間、治療を目的として一緒に暮らしていました。ですが、結果としては一ヶ月、軟禁に近い状態。何度か、少しでも良いから外に出してほしい。と、言ってみましたが、アリスさんから許可は貰えず、俺はストレスがたまる一方。遂には、アリスさんは俺を殺そうとしているのではないのか？何て思い始める始末です」

「アリスがお前を殺す？そんなこと……」

「実際はどうしたかったかなんて分かりませんよ？けど、その時の俺はそう感じて、考えていた……。そして、命の恩人である、アリスさ

んへの疑心、恐怖、罪悪感等を持ったまま彼女と一緒にには住めない。いや、単純に逃げたかったのかもしれない……。まあ、結局、アリスさんの家を飛び出したわけです。そして、道すがらアリスさんと鉢合わせ、腕を握り潰され……。後は貴女の方が分かるかと」

「……………それを、それをしたのは……。アリス、なんだな？」

「はい」

目を見て、小さく頷く。

そして、霧雨さんの口から、大きな溜め息が漏れた。

「はあああ……信じたくはなかったが……。一応、見てるわけだしなあ……。どうにかしたいところだが、どうすりゃあいんだ？」

「どうすれば良いんですかね、本当に……」

「……………まあ、どうにかするしかないんだが……。正直アリスには勝てる気がせん。只でさえ小細工が得意な奴だ。アリスの家に行ったら最後……。二度と出てこれないだろうな。また、私の力不足が原因……か」

力不足が原因？また？

今の会話からは少し外れた言葉が出てきたことに首を傾げる。やってもいないのに力不足が原因なんて分かる筈がないし、やってもいないのに、また。と言うのも可笑しい。だとすれば、以前にも似たような事があったのだろうか？

そんな事を考えているのが分かったのか、霧雨さんが答えを教えてくださいました。

「あ、ワケわからんこと言ってますまん。ちよつと昔な……。私の力不足で……。ケガ、させちまつて……。松みたいに手が無くなった、とかじゃないんだが、その時は結構重体で……。二週間、目を覚まさないかった。そして、目が覚めても、半年近く動けなかった。それが連鎖して里にも被害が……。出て、な。三人、亡くなったよ。家族だ。夫と妻と子供。妖怪に喰われちゃった……。あの時、私が慢心しなければ、アイツは、霊夢は私を庇って……。ツ!!」

……………わるい……。関係無いこと話しちゃった。今日はありがとう……。また、今度、落ち着いたら話を聞かせてくれ」

霧雨さんは帽子を深く被り直し、去っていった。

「お疲れ様。立ったままで疲れたでしょう？座りなさいな」

パチュリーさんに言われるがまま椅子に座る。霧雨さんと話していたのは十分程度だろうが、なんだか数時間立って居っぱなしだった感じだ。

「……………」

「……………」

静寂が俺たちを包む。そして、その静寂を破ったのは俺だった。

「この世界の人たちは……本当に強いですね」

特に意味もないその言葉。ただ、純粹にそう感じた。

霧雨さんは沢山のトラウマを抱えているだろう。間接的とはいえ、友人を傷付けたのは、無関係な家族を殺した、その原因を自分が作ったと言ったのだから。それは、どれだけ周りが、その友人が、違う。君は悪くない。と言っても覆すことは出来ない、絶対的な霧雨魔理沙が抱える罪。

もし、彼女と同じ境遇に陥って、同じように前を向ける人は一体何人居るのだろうか？少なくとも自分なら、間違いなく、押し潰される。そして、この身を投じるだろう。

また、一時の静寂の後、パチュリーさんが口を開いた。

「あの子は、魔理沙は強くなかないわ。少なくとも、貴方が思っているようにはね。あの子はね、前を向いている。けど、進んでいない。逃げてはないけど、それは、逃げる方法が分かっていないから。あの子自身、自殺するという考えがないのよ。他のことに、今ならアリスと松の事。その前なら、月の進軍。何かに没頭することで、進むのでもなく、逃げるわけでもない。停滞を選んでのよ。それも、無意識の内に……………」

だから、貴方は、しっかりと前を向いて、足を進めなさい。あの子のように、立ち止まらないように。そして、進んでいると、勘違いしないように……………まあ、初めて会った相手なのだから、わからないでしょうけど。そうねえ……………その亡くなった家族の墓参りにも行っていない。いや、行けてない。って言えば分かるかしら？」

あんなに、前を向いて、進んでいる。様に、見えるのに……………。
そうだとしたら、俺は…………前に進んでいるのだろうか？いや、そも
そも…………前を、向けているのだろうか…………。

第21話 臆病者

「……………松さん……………何かあったのですか？かなり精神が不安定のようですが」

修行が始まって十分程度の頃、紅さんが口を開いた。

精神が不安定……………霧雨さんとの会話の後、ずっと考えていた事がある。俺は、前に進めているのだろうか？霧雨さんは前を向いて進んでいる。そう見えた、感じた。けれど、パチユリーさんが言うには停滞している、と。

だったら、俺はどうなるのだろうか？あれだけ進んでいるように見える霧雨さんですら、停滞していると言うのに……………。

「……………魔理沙さん、来てましたね。会いました？」

「……………はい」

「魔理沙さんと何か有ったのですか？」

「……………いえ、何も」

「そうですか。では、修行の続きをしましょう。邪魔してすいませんでした」

「…………………………」

紅さんはそう言っつて、目を閉じた。

なんだよ……………昨日はあれだけ言っつていた癖に……………。

無意識にそんな事を考えていた。

そして、そんな自分が嫌だった。昨日、あれだけ自分から突き放したと言うのに、助けを求めていた自分が。そして、手をさしのべられなかったからと言って、毒づいている自分が……………情けない。



「松さん？」

「は？あ、えっと、なんですか？」

気が付くと目の前に紅さんの顔があった。何故か心配そうな表情をしているが、一体どうしたのだろうか？

「何度か呼び掛けたのですが、反応がなくてですね……まあ、兎に角、午前の分は終了です。ぼーっとしていたのは昨日の疲れかもしれないし……少し長めに休憩を取りませうか。一時間半後、再開と言うことで。食事は、一応用意しておきましたが、足りなかったら言ってくださいね」

紅さんはそう言つて、手に持っていたバスケットを俺に渡し去つていた。

バスケットを開き中のオニギリを一つ取りだし一口………少し塩辛いオニギリを合計三つ、全て食べ終えバスケットを閉じる。

取り敢えず立ち上がり、空を見上げる。空は晴れてはいるものの、大きな雲が結構見られる。これは夕方辺りに雨が降るかもしれないな……。

「空を見上げてどうかしたのか？」

その時俺に声が掛けられた。声の方向を向いてみると、そこには日傘をさしたレミリアさんの姿。

「夕方辺りに雨がふりそうだな、と」

「ほう……確かに降る確率はかなり高いな。しかし、まさかシヨウにも運命を見る力があるとは驚きだ」

「まさか、ただの予測ですよ」

「ああ、知っているさ。私と同じ力を持つものがそう易々と居てたまるか。だが、恐ろしいかな、時に人間はその予測を未来予知、果てはその先まで読むときがある。シヨウには出来ないのか？」

「どうでしょうかね？もしかしたら出来るかもしれないし、出来ないかもしれない。人間は臆病なんですよ。良くしてくれる相手でも完全に信用する事は出来ない。その、同族ですら信じきれない程の臆病さは、いつしか人間の一番の武器なんじゃないかと。そうなれば、人間以外のモノを受け入れることも出来ないのはしょうがないのかもしれない」

「だろうな。私もそう思うよ。もし、人間共が私たち妖怪、怪異、化物と言った存在を受け入れる度量があれば、私達はこうして絶滅の危機に瀕しなかった」

レミリアさんの言葉には怒気が含まれていた。

「……自分自身を受け入れる事さえ出来ない個体が居る種族です
ら」

「それは人間だけの話ではない。妖怪にだって言えることだ。ところ
で、今時間は大丈夫か？」

「はい。一時間程でしたら」

「だったら少し付き合っしてほしいんだが」

「構いませんよ」

「済まないな。では、付いてきてくれ」

レミリアさんの後に続き、俺は紅魔館の中へと入った。



「ふむ………王手」

パチリツと軽快な音が響く。俺は今、レミリアさんと将棋をしてい
た。どうやら以前頂いた物らしく、ルールを知っている相手がパチユ
リーさんしかいなく、そのパチユリーさんはルールは知っているが興
味が無いらしい。その為、対戦できなかつたようだ。

「………」

「………王手」

「………」

「………王手」

パチリツパチリツパチリツパチリツ

軽快な音が四度、追い詰められているのは俺。そして、駒を多く所
持しているのはレミリアさん。

「………」

「……詰みだ」

パチリツパチリツ

二度、音が響く。そして、俺の持つ王将が逃げ場を失った。

「です、ね……参りました」

「ふむ、チェスとはまた違った面白味があるな。対戦ありがとう。な

あ、シヨウ……私はお前に何が有ったのか知らない。だが、予想は出来る。咲夜か魔理沙と話して何か思うところが有ったのだろうか？そして、パチエに何か指摘された……そんな所か」

「……………それも、運命を見て知ったのですか？」

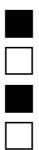
「最初に言っただろう？私はお前に何が有ったのか知らない、とな。今のは唯の予想さ。で？何を言われた？何を思い悩んでいる？良ければ、教えてくれ」

俺は口を固く閉ざした。

「……………話したくないのなら無理はしないでいいさ。けれど、忘れるなよ、お前を助けたいって思っている奴が居るってことをな。因みに、私じゃないぞ？いや、私もどうにか力になりたいとは思うが、如何せんこのような立場なのでな。シヨウ一人だけにずっと掛かりつきりと言うわけにはいかんだ。分かってくれると有難い。そうだな……………態々私を顎で使った罰だ、言うなどは言われたが言っしまおうか」

黙ってレミリアさんの言葉を聞いていたが、不意にレミリアさんの口が大きく歪む。それはまるで、子供が悪戯を思い付かんだかのように無邪気な笑顔だった。

「実はな？私は頼まれたんだ。お前の味方になって欲しいとな。まったく、言われなくともわかっていると言うのに。と、話がそれ始めた……で、だ。それを私に頼んだのはな？お前の師に当たる、紅美鈴だ。さて、種明かしも済んだ事だ。さっさといかんと修行に遅れてしまっぞ？」



「……………まったく……一体何時になったら気付くのか……これで少しは、いや、いっそのこと気付いてくれれば早いのだがなあ……まったく、あの臆病者め」

シヨウが出ていった扉を見つめながら、私は小さく呟いたのだ。た。

第22話 狂人

レミリアさんと話し、紅さんが手回ししていたのを知った。

それを聞いて、俺は逃げ出した。情けない、情けない……一体何時から俺はこんなにも弱くなってしまったのだろうか……？

前までは誰かを必要としなかった。自分一人で全部やって来た。だが、今はどうだ？誰かにすがろうとして、手を差し出されなかったら文句を募らせる。

何時から俺は、こんな醜い存在になったんだ？

外に出る。それと同時に雨が降ってきた。

ザアアアアアアツ

目の前が白く光り、大きな爆音が響く。

ゴロゴロ……ドオオオンツ!!

そんな中を一人、歩いてみた。

雨が痛い。時折響くあの音が煩い。そして、雨のお陰で狭くなった視界に、あの大きな正門が映る。そして、その門を守るように佇む一つの人影も……。

固まった。何でか何て分からない……けれど、動けなかった。

そして、人影が、女性が、紅美鈴が、俺の方を向く。そして、此方に走ってきた。表情は分からない。俺が目を反らしているから……今更、どんな顔をすれば分からないから。そして、こんな醜い俺を見られたくなかったから……。

「松さん!?何してるんですか!!早く屋敷に……いえ、ここなら私の休憩室の方が近いのでそちらに行きましよう!!ほら、急いで!!」

紅さんは俺の腕を掴み強引に引っ張る。俺はそれに何の抵抗もしなかった。

紅さんに引き摺られ、小さな小屋に入る。紅さんは慣れた手付きで暖炉に火を付け俺に話し掛けた。

「ふう……急な雨だったので連絡が遅れましたね。申し訳ございません。今日は修行は中止です。それよりも風邪を引かないようにしなければ……って、聞いてますか?」

「え、あ……はい……」

「……何かありましたか？」

ビクッ!!

体が勝手にその言葉に対して反応してしまう。

「何かあったのですか？聞いてもいいですか？」

「……………」

紅さんは優しく、諭すように聞いてきた。

レミリアさんは言っていた『お前を助けたいと思っている奴が居る』と、そしてそれは『紅美鈴』だと。もしかしたら、俺自身が知らないだけであって、他にも居るかもしれない……だからと言って、その思いに甘えていいのか？これは、俺の問題、誰かにすがって、甘えてしまっても良いのか？分からない……分からない……

「……………すいません……もう少し……考えさせて下さい」

「……………そうですか。分かりました。ですが、覚えておいてください。紅美鈴は、待っている。松さん……誰かを頼る事に何か思うことがあるのでしょうか。ですが、そんなことをしていたら……貴方、本当に押し潰されてしまいますよ」

「……………」

「今日の修行は中止です。明日も雨が降っているようでしたらのおんびりしていてください。では、私は仕事がありますので」

「え？この雨のなか……ですか？」

「ええ。あ、大丈夫ですよ？気を調節すれば風邪も引きませんし、私は門番ですから。退くことは許されないのでですよ」

なんと言うか、眩しかった。太陽とは違う、直視していても眩しくない、けれど、何処か自分が惨めに感じる、そんな眩しさ……。

「では、私はこれで」

紅さんは小屋から出ていった。

ザアアアアアアア

静かな部屋に雨の音が響く。そして、そこに独り、無言で佇むことしか……俺には出来なかった。

□ ■ □ ■

『おじさん!?どうしたのそんなびしょ濡れで!!』

「……気にしないでくれ」

『気にするよ!!あ、えつと、と、兎に角替えのふ、服を……で、でも何処に?』

「松、取り敢えずこれに着替えなさい。元々別の妖怪が着てたものだから少し大きいでしょうが……ま、大丈夫でしょう。そして、今日一日は部屋で安静にしていること。貴方が風邪でも引いたら小言を言われるのは私なの。良いわね?」

「……分かりました」

『おじさん大丈夫なの……?』

「……………」

キイイイパタンツ

『おじ……さん……』

□ ■ □ ■

松はフラフラと覚束無い足取りで部屋に戻っていった。

一体何があったのか……少なくとも今分かることは、魔理沙に会わせたのは間違いだった。と、言うこと。何か適当に理由を付けて二人が会うのを長引かせなければなかった。

「大丈夫かな……」

「大丈夫では無いでしょうね。恐らく明日ゲホゲホッ言っているんじゃないかしら?」

さて……風邪を引くのはほぼ確定……けれど、あの不思議な力が働かないとも言い切れない。一応観察しておきましょう。

そんな事を考えていると、小さく、フランの声が聞こえた。

「そんな……な……」

「ちよ、ちよつとフラン?」

フランは小さく、聞こえないほどの何かをひたすらに喋っていた。

その口は動きを止めることなく、私が見たフランの目に、光は宿っていなかった。

『狂人』

真っ先に浮かんできたのはその言葉だ。私の目の前にいるフランは狂っていた。私自身そんな思い捨て去りたい。けれど、どうしても、その言葉が頭から離れなくて、私は、フラフラと松の眠る部屋に向かうフランを見ていることしか出来なかった。

「……………い……………わた……………だ……………わ……………のせ……………だ……………」

第23話 止まない雨

パチュリーが言った通り、風邪を引いた。

私が、ではない。

私が唯一信じている、おじさんがだ。

私のせいだ

私が、おじさんを守るって言ったのに

私は何をしていた？

何もしていないじゃないか……

□ ■ □ ■

風邪を引いた。

あれだけ雨に打たれ特に何もせずブーツとしていたら風邪を引いても当然か。

ああ、馬鹿みたいだ。一人で勝手に悩んで、人様に迷惑を掛けて、挙げて風邪を引いて更に迷惑を掛ける。

こんなことなら、変わろうなんて思わなければ良かった。

直ぐにでも、元の世界に帰る方法を探していれば良かった。もしくは、自殺でもすれば良かった。

最初の頃、アリスさんに助けて貰った当初に自殺をしてれば良かったのだ。

けれど、俺は生きている。

人様に迷惑を掛け、アホみたいに一人で悩んで、風邪まで引いているけれど、俺は、生きている。

どうすれば迷惑をかけないで済むのか……そんなものは簡単だ。俺がこの屋敷から出ていけば良い。まだ右手は動かないけれど、動か

そうとするのではなく、動かないものとして生活すれば右腕はどうとでもなる。むしろ、鈍器を持った状態なのだから幾分マシなのかもしれない。

なら、仮に出ていったとして、すむ場所はどうする？

どうせ生い先短いだろうし、適当にブラブラして野宿でもすればいいだろう。殺されるなら殺される。生きるなら生きる。そんなもので良いのだ。

「なら黙って出ていくのか？外は結構な雨だが」

「出来るならそうしたい所だが、変な跡を残していくのも後々面倒だ。一言詫びを入れて出ていく」

「そうかそうか、君が命の恩人……ではないが、居候の身分で主人になにも言わず出ていくのかと思ったよ」

「……何時から居たのですか？」

何時の間にか部屋に居たレミリアさんに問う。

本当に何時から居たのだろうか？

「いやなに、シヨウが風邪を引いた、と聞いてな。見舞いに来た。それと、キッチンと扉から入ってきたぞ。ついさっきな。全く……自分との相談なら心のなかでやってもらいたいものだ。全部漏れていたぞ？」

「そうですか。気を付けます。それで？レミリアさんは私に何か用が有ったのでは？」

「おお、そうだった。早く治してくれよ？何だかフランの様子が可笑しいみたいだね。あの子が今信じられるのは君だけなんだ。確りしてくれよ？それと、咲夜の事なんだが……まあ、アツチには一時会わないようにしてくれ。今は部屋で安静にさせているが……かなり精神的にも肉体的にも不味い状況だ」

「肉体的にも……ですか？」

精神的になら分かる。何故なら、いきなり目の前に殺意を抱く相手が現れ、良いように言われたのだから。けれど、肉体的にもとは一体どういう事だろうか？戻したりで食事をマトモに取れていない……とかか？

「それだけならどれだけ良かったか……。言ってしまうえば自虐、自分

の手だったり足だったりをナイフで切り裂いている。さつきも言った通り、今は部屋で安静にさせているからこれ以上悪化はしないだろう。いやはや、押さえ付けるのには苦勞した。最初はトラウマを無くして欲しかっただけなんだが……どうやら裏目に出たようだな。だが、まだ完全に道が途絶えたわけではない。少なくとも私の目には、最悪の結果だけは写っていないから安心してくれ。それに、シヨウにもこれ以上迷惑は掛けないように尽力しよう。変な重荷も背負わせずしてしまつて申し訳なかつた。さて、結構話し込んでしまつたな。私はこれで失礼するでしょう。ああ、そうだ、昼食は美鈴が作つてくれるそうだ。態々シヨウの為に休みまで貰つてな。全く……門番が休みを取るとはどう言う事だ。まあそう言うわけで、キッチンと全部食べてやれよ？では、私はこれで失礼しよう。早く風邪を治してくれ。ではな

レミリアさんにはニヤニヤしながら部屋を去つていった。

俺は聞きに徹していたが……十六夜さんがそんな事になっているなんて……ますますこの館を早く出ていかななくてはならないのではないか？

そうだ、早く出ていかないと……だから、早くこの風邪を早く治して、レミリアさんやパチュリーさんに挨拶をしなければ。そうすれば、誰も俺を止めようなんてしない。俺はこれで自由に、また、孤独に戻るんだ。

ああ、そうすれば誰かに頼ろうなんて馬鹿な考えで悩むこともなくなるし誰かとの関係で頭を抱えることもなくなるこの手を扱えるような努力もしなくてすむんだあなんだ良いことづくめじゃないか何をこんな色々考えていたんだろう最初から助けて貰つた礼だけいつてさつきと出ていつてしまつていけば良かったそうすれば誰にも迷惑をかけなくてすんだこうしてその事について悩まずにすんだそして――

——こんな馬鹿な感情で胸が苦しくなるような事もなかつたのに……ッ!!

考えれば、考えるほど、頭はごちゃごちゃになって、その笑顔が頭

から離れなくなつて、涙が溢れて、拭つても、拭つても、怖くて、恐ろしくて、眩しくて、悔しくて、寂しくて、全部吐き出してしまいた
いって思つて、また怖くなつて、恐ろしくなつて、そして……

「ウツ………ウツアアア……アア………くそお………くそおお
………」

……愛おしくて

雨は強くなり、止むことはない。ただ、ずっとずっと溜めていた分
を吐き出すのみ。

第24話 一人

そう、遠くない未来、あの男は出ていく事だろう。だが、どうしても気になることがある。

私には運命を見る力がある。そして、今もあの男の運命……未来を見た。そして、不安が残ったからあの男を訪ねたのだ。

結論として、私の力で運命その物をねじ曲げるなど到底無理な話だった。『運命を操る』聞こえがいいこの力は、本当に運命を操る訳ではない。あくまでも運命を『見る』だけだ。けれど、先の運命を知っていればある程度の対策を取ることができる。ただ、それだけ。

そして、今回は失敗した。それだけの話だ。

……いや、一概に失敗とは言えないのかもしれない。

何故なら、既にあの男の運命が見えないから。

■□■□

コンコンツ

軽快な音が部屋に響く。そして、何か声が聞こえ、ゆっくりと扉が開いた。

そして、そこにはおぼんを持った一人の女性。正直、今一番会いたくない人物だ。

彼女は言った。

『私がもう少し確りしていれば』と。

ふざけるな。

そう、思った。

俺が勝手に風邪を引いただけなのに、それさえも背負おうとしてい

る。これ以上、俺に関わらないでくれ……

そう言った。頼んだ。けれど、彼女は

『嫌です。そもそも、貴方はもう少し周りを頼ることを覚えなさい』

と、不機嫌そうに答え、俺の頼みは断られた。
どうして？

どうして貴女は俺を放っておいてくれない？

無意識に呟いた言葉。

それに彼女は答える。

『……紅魔館に傷を付けないため。そして、貴方の持つその力を監視。あわよくば貴方がその力を制御出来るように育成する。最初の目的はそんなものです。』

ですが、今は……何でしょうね？家族愛？みたいな感じでしょうか？言ってしまうえば……あれですよ、守りたいんです。貴方を。貴方を、佐々木松を支えていたい。それが、今の私の望みです。

だから、申し訳ありませんが、貴方を放っておくことは出来ない。少なくとも、今の貴女は絶対に』

そう語る紅さんの瞳には、有無を言わせぬ迫力があつた。

だから、俺はこう返すしかなかった。

「少し……少し、一人にさせてください……」

彼女はそれをどうとつたのか、それを知るよしなど無いが

『分かりました』

と、言い残し部屋を出ていった。

彼女が去った部屋。テーブルに乗せられたおぼん。そして、その上の鍋。

ベットに横たわり、今後の事を考えた。

もう、迷うことなんてなかった。

笑いたいなら笑ってくれていい。

俺は一人になりたい。心を落ち着かせたいんだ。

そうしないと、俺はきつと前に進めない。

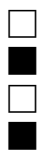
ああ、つくづく、弱い男で嫌になる。

「明日、レミリアさんに挨拶しに行かないとな」

第25話 迷走

宿屋の部屋に一人。外は既に暗く、月の淡い光だけが部屋に差し込む。

人里に来て既に一週間が過ぎようとしていた。いや、もう過ぎたのかもしれない。空に浮かぶ月を眺め、一週間前の事を思い出していた。



「……………つい昨日話をしたばかりなんだがなあ？いや、私に止める権利なんてものはないんだが…………いや、そうだとしてもだ、風邪が治ったとは言え、昨日の今日で出ていくと言うのは些か焦りすぎではないか？」

「すいません……………ただ、このままだったら、確実に私はこの温もりに甘えてしまいます。それが、私は嫌なんです」

理由にしては弱すぎる。いや、これは理由にすらなっていない。ただの甘え。自分で嫌だと言っておきながらこうして甘えている。そんな矛盾した感情と言葉が口からスラスラと出てくることに失望する。

「……………そうか、分かりたくはないが、分かった。はあ、本来生物と言うものは甘えから、責任感や誰かを頼ることの必要性を学ぶと思っていたのだが……………どうやら私の見立ては間違っていたようだな。さて、話を戻すが、紅魔館を出ていく……………間違いないな？」

「はい」

「だとすれば、行き先は人里になるだろうな。場所は分かるか？」

「大丈夫です」

短く、確りと返事を返す。

変わりたい。変わっていいのか？変わろうなんて考えるその物が間違っていた。何度も自問自答を繰り返し、時には自暴自棄になったりもした。そして、漸く決まった。

もし、変われるのなら、変わりたい。

曖昧過ぎる結論。いや、結論と呼ぶにも烏澁がましい。けれど、人間が出す考えなんてそんなものだ。

「その右手でか？」

「はい」

「即答か……出来れば少しくらい詰まって欲しかったものだが。その右手で雇ってくれる所があれば良いんだがなあ」

十中八九無いだろう。

レミリアさんの言葉に対し、心の中で結論を下す。元の世界でも、片手が使えない奴を雇うなんて事を考えるのはよっほど経営が上手く行つて余裕が有るところか、よっほどのお人好しでもない限り雇つては貰えまい。それは、この幻想郷においても同じこと。寧ろ、妖怪と言う存在が居るこの世界の方が不味いかもしれない。雇つて貰えないことは勿論のこと、見た目が金属なのだ。そして、人間は自分たちと違うものを恐れ、嫌悪する。つまり、迫害されても可笑しくないのだ。

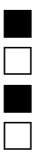
「はあ……まったく、面倒な奴だなお前は」

溜め息を吐き、悪態をつくレミリアさんの表情は笑っていた。

何で笑っているのだろうか？それについて、俺は分からなかった。「私が笑っているのが不思議か？そりやあそうだろうとも。少なくとも、今のお前には分からんだろう。だが、それを理解できるようにするために、お前は一人になるんだろう？大丈夫……お前なら分かるようになるさ。なんせ、この世界の常識みたいなものだからな。」

そうだな……一つ、余計なお世話でもしておこう。私は、お前のことを家族だと思っている。それは、パチュリーや小悪魔、妖精たちもそうだ。それだけじゃない、フランだってそうだろうし、咲夜は……まあ、その内分りあえるさ。勿論、美鈴だって、お前のことを大切にしている。

皆お前のことが好きなんだよ」



その後、パチユリーさんや少女、フランドール。紅さんに別れを告げ紅魔館を出ていった。

そりゃあ、止められた。その右手でどうやって生きていくんだを筆頭に、色んな言葉で説得された。フランドールに至っては泣きながら止められた。けれど、こうして俺は紅魔館を出ていった。

炉銀はレミアさんから持たされた一ヶ月近くのお金がある。お金の単位が違い、頭を捻ったが、一週間もあればそのくらいの事であれば覚えることが出来た。

けれど、分かっていたことではあったが、やはり俺を雇ってくれる所は無かった。

そりゃあ相手側も自分達の生活が掛かっている。使えるかどうかも分からない。それに加え右手を動かすことも出来ない。切って当然だろう。

けれど、このまま働かずと言うのも不味い話。

この人里は其処まで広い場所ではない。二、三日歩き回ればほぼ全体を見て回ることが可能。そして、恐らく里の中に俺を雇ってくれるところは少ないだろう。噂とはほぼ無縁の中で育ってきたが、まさか、ここまで噂と言うものが早く広がるとは思っていなかった。

ダメ元で、今日噂に流されなさそうな寺子屋。この里一番の大手である霧雨道具店にも行って見たが結果は駄目。

さて、こうなってくると里の外に職を探さなければならなくなってくる。

候補は二つだ。一つは魔法の森付近にある香霖堂。だが、此方は出来れば最後に回しておきたい。

そして二つ目は永遠亭と呼ばれる病院だ。

正直どちらも望みは薄い。だが、可能性はあるのだ。行ってみる価値はある。

取り敢えずは永遠亭に明日行ってみることにしよう。

まだ、変わることも、答えが分かったわけでもない。

けれど、だからこそ、俺は此処で止まれないんだ。

目的も、手段も分かっていない男はただがむしやらに生きようとする。

すぐ後ろで笑っている一人の女にも気付かずに……………

第26話 地べたに座って

霧が掛かった竹の森。竹林と呼ぶには生ぬるいのではないかと
思ってしまうその場所は、里の者たちから迷いの竹林と呼ばれてい
る。『一度目印を見失ってしまつては決して戻ることは出来ない。だ
から絶対に目印を見失うな。そして、道から逸れようとするな。分
かつたな』俺がこの迷いの竹林の奥にある永遠亭の話を隣人から聞い
たとき、一緒に言われた言葉だ。

正直な話、そんなに警戒するような物でもないだろう。と、舐めて
いた。しかし、こうして目の前にしてみると……自分が景色の変わら
ない竹林を永遠とさ迷う様を鮮明に想像できた。

だが、つまりは道を外れなければ問題ない訳である。矢印を辿れば
良いだけなのと、足元の雑草は人間が踏み潰しているからか回りの雑
草との高低差があり分かりやすい。

天然の迷路を進むこと五分。小さな出店の様なものを発見した。
地面に布を広げ、その布の上には赤や青、黄色といった色をした、得
体の知れない液体が小瓶に分けられている。

その持ち主であろう商人は箱にどっしりと腰を下ろしている小
さな少女。怪しさ満点だった。

触らぬ神に祟りなし。その出店と呼ぶには質素過ぎる店の前を通
り過ぎようとした時だった。

『あんた……見ない顔だね』

声を掛けられた。

「すいません。急いでますので、これで」

軽く頭を下げながら立ち去ろうとする。けれど、商人は食い下がっ
てくる。

『まあまあ、少しぐらい見てもばちは当たらないと思うんだが
ねえっ…』

「だから、急いでいますので」

『しょうがない……本当なら同意の元にしたかつたんだが……兎の娯
楽のために犠牲になつてね♪』

妙に弾んだ声。そして、目の前を覆う赤色。出店に並んでいた液体を掛けられたと理解するのは容易かった。

そりゃあ、俺だつてこんなことをされて黙っておくほど非常識じゃない。目の前でニヤニヤと笑っている三人の……三人？

「――」
視界がハッキリとせず、何故だか声も出ていない。頭が痛い。酔っている状況を極限までしたらこんな風になるのだろうか。と言った、金槌で頭を殴られているかのような酷い痛み。

『さて……人間はどんな行動を……チツ、鈴仙に感づかれたか。しようがない。さっさと退散しますか。それじゃあ、頑張つてね』
少女は何かを言い残しその場からいなくなつた。しかし、どうしろと言うのか。こんな状況で何かを出来るはずもない。取り敢えずこの酔が収まるのを待つしかないか。

そう考え、地面に座ろうとした時だ。目の前に何かが現れた。
人形の……獣……？犬……？

ぼやける視界の中、それが人ではない。そして、味方とも限らない。つまりは、逃げた方が良い。

こんなときでもこの頭は機械的に、冷静に判断できた。
兎に角、相手が此方に何かをしてこない内に隠れよう。

そうして、俺はその場を逃げるように去つた。

今思うと、何れだけ馬鹿な行動を取っていたのか……後悔が残るばかりだ。



少しずつ視線が定まってくる。もう一時すれば酔いも覚めることだろう。

そして、幸いなことに、少し先に明らかな人工物が見える。塀……
だろうか？なににせよ助かった。

一歩一歩、転けたりしないようゆつくりと足を踏み出す。

そして、唐突に襲い掛かってくる浮遊感。

グキツウ

「!?うグウがああぁ……」

顔から胸に駆けて走る鈍い痛み。そして、右足から聞こえる嫌な音。

どうやら途中の出っ張りに右足首が強打したようだ。

鈍く痛む全身に加え、青白く腫れた右足首。右足以外は特に問題ないだろう。けれど、右足首に關しては……恐らく折れている。少しでも動かそうとしたら電気を流されたような痛みが流れてくる。

上を見上げ、この穴の外を見た。恐らく、まだ昼過ぎ位だろうが、そこには竹林が生み出す闇が広がっていた。

落とし穴。まさか、現実で自分が引つ掛かるなんて思いもしなかった。

落とし穴の深さは結構深く、大人が穴のそこから手を伸ばし這いずり出せる程度のはある。それは、俺だって同じ条件だが、この右手。それに加えさつき折れたばかりの右足。どう考えても這いずりでるのは無理だった。

どうしようか……と考え、壁に背を付け取り敢えず立ち上がってみた。そして、右足の痛みを堪えながら、両手を穴の外に出す。右手も一緒に外に出したのは、一緒に外にやっておいた方が楽だろうと考えた結果だ。そうして、左手に力を込めた。取り敢えず半身、いや、右腕を外に出すことが出来れば何とかなるかもしれない。

結果からして無理だった。

視界は安定しない。右手右足は使い物にならず、動かす度に激痛が走る。そんな中でどうしようとしたのが間違いだった。

今は穴の底で地べたに座り込み、無駄な体力を消費しないようにしている。

もしかしたら、このまま飢え死にするかもしれないな。

乾いた笑みが自然と零れた。

「……ごめん、なさい」

無意識に謝っていた。

そして、

「ごめん……なさい……」

さつきと違う理由で視界が歪み、俺は意識を手放した。



『はあ……てるは何処に行った……こんなところに落とし穴？……ッ
!?!ちよ、ちよつと!!大丈夫?!大丈夫ですか!?!』

落とし穴の中にはガリガリに痩せ細った男の姿。よく見ると足は見るも耐えないほどに青白く腫れ上がり、右手は明らかに人間の物ではない。視線は死人のように生気を失い、微妙に動く胸と微かに聞こえる呼吸音が無ければ死んでいると判断しても何ら不思議ではなかった。

そんな状況の男、佐々木松が救出されたのは、彼が落とし穴に掛かってから実に六日後の事であった。

第27話 夢

え？おじさん出ていっちゃうの？なんで？どうして？フランがおじさんを守れなかったから？

男は首を振りそれを否定した。

ならどうして？おじさんはフランをお外に出してくれるんでしょ？一緒に居てくれるんだよね？

男は小さく”ごめんな”と呟いた。

謝るなら行かないで？ね？フラン頑張るから、頑張っておじさんを守るから、もう、おじさんが危ない目に合わないようにするから……ッ!!お願いだから……行かないでよ……おじさん……

男の手が少女の金色の髪を優しく撫でる。そして”ごめんな、また戻ってくるから”

そして、男は少女に背を向け部屋を出る。

それは、少女にとって死刑宣告と同じような物だった。

おじさん………何処に行っちゃうの？フランを置いて何処に行っちゃうの？イヤだよ？また独りなりたくないおじさんがいなくちや私はまた独りになっちゃういやだよいやダイヤだいやダイヤだイヤだイヤだイヤだだだだダダダいやいやヤヤヤヤダダイイイイヤ……だ……

少女は呟いた。既に答えを返してくれるものは居ないのに、まるで、その事実を認めたくが無いように。けれど、言葉を溢して幾度にもそれが現実だと理解させられた。

そして、彼女は糸の切れた人形のようにピクリとも動かなくなつた。けれど、時折聞こえてくる”おじさん”と言う声は、まだ彼女が生きていることを静かに告げていた。



真つ暗な空間にうつすらと差し込む眩しい光に目が覚める。

ここは一体何処だろうか？見たことのない部屋に戸惑いながら、何

があつたのかを思い出していく。

……そうだ、永遠亭と言う場所に向かう途中で変な液体を掛けられたんだ。そして……落とし穴に引っかけ……足首が折れて……以外とアツサリ思い出すことができ、誰かに助けてもらったのだろう。と言うのも分かった。

だが、一つだけ引っかけがあるものがある。

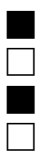
夢、さつき見ていた夢はなんだ？ 妙に親近感のある二つの影、会話の内容までは覚えていないが、片方が何処かに行った後、もう片方は崩れ落ちていた。

あれが、俺と少女だとしたら……もしかしたら、少女は今頃どうなって……？

「そんな……まさか、な……？」

頭を振り、そんなことはないと否定する。

けれど、胸のなかに残るもどかしさが晴れることはなかった。



頭の整理を無理矢理終わらせた所でこの場所が何処なのかを考えよう。とは言っても、この点滴をされていることから十中八九病院に違いない。

そうだとしたら、ここは永遠亭なのだろうか？ にしても、和室で点滴されるとは、なかなか不思議な感覚だ。

そんな事をぼんやりと考えていると『失礼するわ』と声がかかり、部屋の扉が開いた。

『あら、生きてた』

出会い頭早々にかなり最低な事を堂々と言う人も居たもんだ。

扉を開き入ってきたのは、上下左右の色が赤と青のみの色で構成された奇抜な服を着こなした銀髪の女性。

『ちよつと失礼するわね』

女性は俺の腕をとり、人差し指と薬指を手首に押し当てる。恐らく脈を計っているのだろう。

『脈は安定してるし……顔色も悪くはない。これなら大丈夫そうね。足の方はツと』

女性が布団を捲り、包帯で巻かれた右足首を軽く動かす。
「ツ」

『まあ、四日程度じや治る筈もないわよね。ごめんなさいね、起きて早々こんなことして。私は八意永琳。ここで医者をやっているわ。好きなように呼びなさい。貴方は？』

「自分は佐々木松です。この度は助けていただき有難うございます八意先生」

「それは私にじやなくて貴方を見つけた子に言っただけなさい。それで、少し話を聞かせてほしいのだけれど、大丈夫かしら？」

「分かりました」

俺は、あの落とし穴に落ちるまでの経緯を覚えている範囲で話した。すると、八意先生は悩ましげに額に手を当て溜め息を吐いた。

「はあ……ごめんなさいね……多分、その子はここに住んでいる兎の悪戯……いや、悪戯で済ませたら良い範囲でもないわね。後でその子にはキチンと言っておくから……取り敢えず、今回は此方から迷惑掛けてしまったしまったようだし、入院代は貰わないから安心して。それと、何かあったら言っただけだよ。多少無茶なお願ひでも聞いてあげるわ。例えば……夜の相手が欲しいときとか……ね？」

流星にそれは冗談でも酷いのでは無いのだろうか？

「そうでもないわよ？なんせ、兎は年中発情しているんだから。むしろ相手してくれた方が大人しくなるかもしれないわ。あら？それなら毎日入れ換えで向かわせれば……」

「止めてください」

「冗談よ」

「それは安心ですね」

「まあ、なんにせよ、その右足首を治さないとね。結構酷い折れ方をしているから時間は掛かるでしょうね。ま、気長に治していきましょう。それじゃあ、安静にね。と言ひ残し、八意先生は部屋から出ていった。

正直に言おう、疲れた。と。

第28話 出会い

ふかふか……と言うほどでもない布団の上でただぼーっと過ごす。入院一日目。何もすることは無い。紅さんの時とはまた違った退屈さがある。しかし、これはこれでなかなか良いものだ。

虫の声も、鳥の声も全く聞こえない。風の音がその静寂をより一層強調していた。

『すいません。今大丈夫ですか?』

そんな静寂を破り聞こえてくる女性の声。その声に俺は返事を返した。

「大丈夫ですよ」

『失礼します』

戸がすーッと静かに開き、一人の少女が姿を表した。少女の背はレミアさんと同じくらいだろう。だが、頭に付いたその”兎の耳”まで含めるとすれば俺の身長にも引けを取らないのではなからうか?

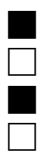
『足の具合はどうですか?』

「問題ないです」

「そうですか。それは良かったです。あ、申し遅れました。私『鈴仙・優曇華院・イナバ』と言います。これから貴方の身の回りの世話をさせていただきます。よろしくお願いしますね」

「あ、そうでしたか。私は佐々木松です。お世話になります」

それが、俺と彼女、鈴仙さんとの出会いだった。



「ねえ、貴方って仙人だったりするのかしら?」

「は? えっと、どう言う事でしょうか?」

入院二日目。

俺の病室に訪れた八意先生の第一声がこれである。

「ああ、説明してなかったわね。貴方が落とす穴から助けられたのは今日含め五日前。目を覚ましたのは二日前。そして、私の見立てでは

貴方が落とし穴に掛かったのは更に四日から一週間前だと思うの。仮にそうだとしたら、水も食料もない状況で一週間近く生き延びたことになる。本来人間は水を一水も摂取しなければ二日から三日で死に至るの。でも貴方は生き延びていた。元が仙人や修行僧で断食を行って修行しているならまだ分からないでも無いわ。だから、貴方って仙人とか修行僧だったりしないのかしら？」

えっと……つまり、本来死んでいないとおかしいレベルなのに死んでいないと。だから、仙人や修行僧等といった生きている可能性がある存在ではないのか？

って、事だよな？

「いや、仙人でも修行僧でもないですよ？」

「……そう、分かったわ。いきなり変な事を聞いてごめんなさいね。ところで、話は変わるけれど……鈴仙はどうだった？」

「どう、とは？」

「こう、あるじゃない？ムラムラしたとか襲いたくなったりとか、ね？」
……これは、あれだろうか、馬鹿にされているのだろうか？確かに鈴仙さんは美少女と呼ばれるのに分類されるだろう。だが、だからと言って襲おうなんて考えが出てくるはずがない。

「そう……まあ良いわ。それじゃあ安静にね」

「はあ？分かりました」

俺は部屋を出ていく八意先生の背中を見つめ、その背中が見えなくなったら大きく溜め息を吐いた。



『薬が効いていない？一体何故かしら？』

薬師はブツブツと何かを呟きながら自室へと戻っていった。

第29話 立派な成長

入院四日目。

「足の具合はどうですか？」

「動かさなければ痛くないです」

「そうですか」

鈴仙さんの質問に答える。だが、一つだけ気になっている事があるのだが……

「……………あの、お仕事の方はよろしいのですか？」

彼女が、かれこれ三時間此処に居座り続けると言うのは何故なのだろうか？

「大丈夫ですよ。全て終わらせてきました。今日は配達もありません……………ようは暇だから居座っているだけです」

「そうですか……………」

「それと……………あれですね、こう、この部屋はなんと言いますか……………妙に気持ちふわふわするんですよ〜」

鈴仙さんはどこかうっとりした様子で言った。だが、言うほど気持ちが良いだろうか？確かに畳のいぐさの匂いと言うものは、想像以上に落ち着くものではあるが……………そう言えば、永琳先生がリラックス出来るお香とやらを置いていっていた。言うほど良い香りがするわけでもなかったが……………やはり女性の方がそう言う物には敏感なのだろうか？

等と

「とは言っても流石に退屈ですね。何かお話ししましょうか」

「お話しとは言っても、自分はそんな人に話せるほどの話題はありませんよ？」

「大丈夫ですよ!!こう言うときは言い出しっぺの法則。つまりは私の昔の話をしてあげましょう」

何故かノリノリで話を始めようとする鈴仙さん。何処か酔っ払いのような雰囲気が出ているが気のせいだろうか？まあ、何にせよ話を聞こう。

「私は月に住んでいました」

早速ぶつ飛んだ内容だ。これに対して俺はどんな反応を返せば良いのだろうか。そして、分かったことが一つ。鈴仙さんは何故か酔っている。何故かは分からないが。

「あ、信じていませんね？まったく……本当なんですよ？兎に角、私は月に住んでいたのです。そこで私は軍に所属していました。その軍の中でもトップの成績を残していたのはこの私なのですよ」

「そうですか。凄いですね」

「でしょうでしょう。そんなとき、私は月のトップの二人に気に入られ、その二人の下で訓練に励む日々。そもそも月に攻め込める筈がない。そんな考えから軍では緩い訓練。そんな緩い訓練の中でトップになった私には、戦争と言うものが何なのか、死とは何なのか、敵とは何なのか……そして、それらを殺す方法を徹底的に叩き込まれる日々。とても辛くて怖かったです……ですが、一番怖かったのは……死ぬのが怖かった……」

さつきまでの自信の有り様はどこへやら。段々と小さくなっていく声。そして、遂には膝を抱えてしまった。

「もし、戦争が起きたとしたら……私は最前線で戦うことになる……そう言われました……怖かった……逃げることも、立ち止まることも、二人はただ一度とさえ許してはくれなかった……お二人が私を生き残らせるためにしてくださったのは分かってる……分かっているんです……けど…………だけど、言われる度に怖くなって……このままだと死ぬぞって言われてるような気がして……そして…………戦争が起こりました……」

真っ先に戦場に投げ出され、周りの味方が、友人が血を流し倒れていく様が、化け物共に食い散らかされていく……私は気付いたら脱出用の羽衣を着て月から出ようとしているところでした。そこに、私の後輩が来ました。彼女は左腕が潰されていました……そして、私を見て口を開こうとして……何も言うことなく化け物に喰われました……私は逃げた……月から地球に来て……必死に逃げた……そして、姫様たちに拾われたんです。

姫様達は何もいってくれませんでした。ただ、怖かったのねと、優しく私を抱き締めてくれました……けれど、どうしても……思い出し
てしまうんです……あの子が驚いて、絶望や憎しみを込めた目で私を
見ているのを……。

……すいません、私どうかしてましたね。まだ会って数日の相手に
こんな話なんかしてしまって……それじゃあ、失礼しますね」

月に軍なんて必要なのだろうか？そもそも月に住むことなんて出
来るのだろうか？

とまあ、疑問に思うことは数多くあるが……

「愚痴を聞く程度でしたら何時でも要らしてください」

「……えっ？」

……こんなことを言えるようになったのは、立派な成長なんじゃないかと思う。

「えっと、その……ありがとうございます!!」

第30話 率直に

入院十日目

足の治りは順調なもので、もう殆どくっついていているらしい。なので、もう少ししたら歩行練習を行うそうだ。

「にしても、結構治りが早いですね。本当に人間ですか？」

「何で疑われるのか分かりませんが、正真正銘人間ですよ」

「仙人とかでもなくてですか？」

「違います」

なぜここではこうも人間扱いされないのか。

実際治りはかなり早いほうらしく、折れ方にもよるが大体が一ヶ月前後で治るところを二週間足らずで治っているらしい。まあ、元がそんなに複雑な折れ方はしていなかったらしいので、治りが早い、回復力が高い等と言った言葉で片付けられるのだが。

「疑っていても意味はありませんし、少し今後について話しておきますね。とは言いましたが、後一週間、早くて三日後辺りには歩行練習を行います」

「歩行練習ですか……具体的に何を？」

「壁に手を付いての歩行や松葉杖を使ったものですかね。難しいきとは無いですし、私か師匠、永琳先生が練習中は付いていますので安心してください」

そんなものは必要ない。と思ってしまうが、やはり数週間全く動いていないと歩けなくなるものなのだろう。これを期に体を鍛えた方がいいかもしれない。

取り敢えずは腕立て伏せや腹筋だろうか？体を鍛えようなんて自発的に考えたこともなかったから、いざやろうと思っても何をすれば良いのかがよく分からない。紅さんとの修行は靈力を扱うための修行だったので、体を鍛えるようなことは何一つしていない。かといって靈力を扱えるようになったのかと問われれば否なのだが……。

「と、ところで、ですね？」

「どうかしましたか？」

鈴仙さんの改まった声に、一度思考をリセットする。

「以前の、ですね……その、話なんですが……」

「ああ、忘れた方が良いのなら忘れますよ」

そう言うのは慣れている。そつちに思考を向かせず、表に出さないので、自分自身を誤魔化す。今までもやって来ていた事。簡単なことだ。それに、こつちもあんな重い話にどう反応すれば良いのか分からなかった所。渡りに舟、とは少し違うだろうが、何にせよ助かる。

あの時は咄嗟の判断であんな事を言ってしまったが、後から考えれば、流石に無理だ。あんな重い過去を背負った娘の愚痴にどうやって付き合えと言うのか。

等、色々前回の行動に文句を垂れ流しながら鈴仙さんの返事を待つ。

そして、その口が勢いよく開き、今の自分には聞きたくなかった言葉が返ってくる。

「いや!!その、忘れてほしいとかじゃなくて……ですね?」

「はあ」

「その……どう思いました?」

「どう……とは?」

何でこう、嫌な考えほど現実になってしまうのか。

どう、とは戦場から逃げた自分、鈴仙さんをどう思うか……だろう。しかし、戦場どころか争い事にだって殆ど出会ったことのない俺に何を求めるのか、怖かったんだろうな。位の感想しか思い浮かばない。

あれだ、会社に当て嵌めてみよう。戦場とはつまり、会議。俺は上司の付き添い兼補助。そして、会議当日。会議室で上司を待っている、会議に出て発表したくないから会社辞める。

と言った所だろうか?迷惑。率直に出た感想はこれだ。

「私は戦場から逃げました……私は死ぬのが怖かった……」

「戦場から逃げる私をどう思いますか。って事ですか?」

「……はい」

「そうですね……怖いのは分かります。そして、戦場に出たことも無い人間が言うことでもないですが、臆病者だと思ってしまうですね。

それと、戦場に立った者からすれば邪魔だったのではないかと」

「そう……ですよね」

本当に、俺が言えるようなことではないが、かといって相手を励ますような言葉がスラスラと出てくるほど饒舌でもない。だから、率直に言わせてもらった。

「師匠も姫様も、私を励ますことしかしてくれませんでした。怖かったのね、貴女は気にしなくていいわと。そして、何時からか私は思うようになったのです。私は悪くないって。それが最善の行動だったんだって。

けれど、やっぱり違ったんですね。あの時、私は一般市民ではなく一人の兵士だった。けれど、私は逃げた。それは私が背負わなくてはいけない罪で、師匠や姫様に慰めてもらって悠々と過ごして行つてはいけない。

今から戻って罪を償え、と言われたら、私は何も出来ません。ですが、それだけの覚悟が出来るようになったら、キチンとこの罪を償いたいと思います。

私は何処かで、誰かに怒られると言いますが、侮辱？何て言えば良いのか分かりませんが、そんな事を言われたかったのかも知れませ。ありがとうございます。私の罪に気付かさせてくれて」

「いえ、お役にたてたのなら光栄です」

「ふふ、すみません。すっかり話し込んでしまいました。何かありましたら呼んでください。それでは、失礼します」

そう言つて鈴仙さんは部屋から去つていった。

………何だか良く分からないが、勝手に納得して帰つていった。まあ、本人がそれで良いのであればそれで良いのだろう。今度こそ、俺の出番は無くなったと言わうわけだ。

「はあ……なんか、どつと疲れた……」

俺は一人となった部屋で、小さく溜め息を吐いた。

第31話 柵からぼたもち

入院十四日目

足の具合も良く動かしても特に痛みは感じなくなった。だが、これだけ長期間動かしてなかったからか、動きが鈍くなっている。踏み出そうとしたら上手く足が前に進まず、膝を曲げようにも上手く曲がらない。足首も同様に曲げることが出来ないので、曲がるときは一回一回止まって進路方向に足を向けてから歩き出す。

こんな状態になってはいるが、右手が無くなった当初よりかは幾分か心が楽だ。やはり、自分で何をしなければならぬのかを理解しているのと、していないのでは心の持ちように天と地の差が表れてくる。

ただ、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるのは有り難いが、やはり誰かと一緒と言うのはどうにも落ち着かないものだ。ここ最近は大分マシになったとは思っていたのだが、あくまで思っていただけで終わっていたようだ。

「はい、転げないようにね」

俺の右側に立ち転けても直ぐにフォロー出来るよう待機している八意先生の事を思いながら、失礼だとは分かっているつもりで考えてしまう。

注意されたよう転げないように方向転換をしようとしたときだ。

八意先生の口から大きな爆弾が落とされた。

「ねえ、一つ聞きたいのだけれど良いかしら？」

「なんででしょう？」

「最近ね、鈴仙の調子が良いみたいなのだけれど……もしかして、ヤツちやた？」

親指以外の指を握り、その人差し指と中指の間に親指を通す。

一瞬、何バカな事を言っているのだろうかこの人は？と思っってしまった。いや、いま現在も思っている。確かに鈴仙さんは美人だ。ウサギの耳が付いている事さえ些細なことぐらいには。恐らく里では男性に告白されることも少なくはないだろう。

だが、だからと言って俺が鈴仙さんを襲う？あり得ない。そんな度胸も無ければ、俺には好きな相手もいるのだ。戻ったらキッチンとこの思いを伝えると決めている。今はまだ、そんな事を言える立場ではないが、顔を合わせてm1恥ずかしくない男になって戻るのだ。

「八意先生が何を考えているかは分かりませんが……少なくとも、貴女が望んでいるような形にはなりませんし、なっていますよ」

「そう。そこが可笑しいのよ。鈴仙には媚薬を飲ませていた。そして、貴方の部屋には発情効果があるお香を置いていたの」

「置いていたのって……なにしてるんですか……」

「その辺りは許してちょうだい。此方も切羽詰まって焦っているの。男手が欲しかったのよ。けれど、こんな得たいの知れない病院擬きで働きたいなんて人は少なくてね。そうね、簡単に言えば既成事実を作って家で働いてもらうつもりだったのよ。まあ、結局無駄足だったみたいだけれど。まあ、鈴仙も何かスッキリした様子で調子が良さそうだし、結果オーライかしら。ごめんなさいね。変な事しちゃって。それと、ありがとう」

「えっと……一つ確認しても？」

「どうしたの？」

「男手が欲しいのですか？」

「ええ」

柵からぼたもちだった。

こうして、俺は一悶着ありながらも無事、職場を見つける事が出来たのだった。

第32話 その疲れは

入院二十五日目

「これが解熱剤で、こっちが鎮静剤。それでこれが媚薬」

「解熱剤、鎮静剤、媚薬……ですね」

粉末状で薄いピンク色の解熱剤。同じく粉末状で薄い黄色の鎮静剤。そして、薄赤色の錠剤が媚薬。

サラサラつと八意先生から頂いたメモ帳に簡単にではあるがメモを取る。

「媚薬は二種類あって、その赤色が人間よう。此処には入れていないけれど、どぎつい青色の媚薬は妖怪よう。誤って人間に投与したら子孫を残せなくなるから取り扱いには注意すること。とは言っても、そっちを欲しいなんて言うのなんて殆ど居ないけどね。もし欲しいって言われたら私に言っただい。けれど、キチンと投与する相手が妖怪なのかを確認すること」

矢印を書いて、赤が人間。青が妖怪用。青色の妖怪用は使用者が妖怪なのを確認したのち八意先生に確認する。

「はい。分かりました」

「取り敢えずはこんなところね。後は塗り薬。これは傷口に塗って瘡蓋の代わり、そして消毒を兼ねてるわ。そして、此方が、見ての通り包帯ね。それでこれが――」



外は既に夜。八意先生の講義が終わり、それなりに綺麗に書き記した薬の見た目、効能を再度読み返す。

足の方は今ではスツキリ、と言うほどでもないが一人で歩いてても特に問題は無くなった。とは言え、曲がり角ではスムーズに曲がることは出来ないのだが。

一歩曲がり角に出て停止、方向転換をしようとしたとき可愛らしい声が聞こえた。

『きゃ……とと』

「おつと、ごめんね。大丈夫？」

謝りながら声の主を確認する。

地面に付きそうな程長く延びた美しい黒い髪。触れれば簡単に折れてしまいそうな華奢な体。真っ白な肌。整った、整いすぎたその可愛らしい顔には子供っぽい笑顔と、まるで此方の全てを見透かしているような酷く濁った黒い瞳。

背筋が凍った。その美しさ、その子供っぽさからは全く想像もできない、何か言い知れぬモノに掴まれ、今にも握りつぶされてしまわれそうな恐怖。

『貴方が永琳が言っていた……固まっちゃって……フフ、昔を思い出すわ』

さっきの可愛らしい声とは裏腹に妖艶な声が俺の全身を舐め回す。気持ち悪いツ!!しかし、どこか全てを許してしまい、全てをさらけ出してしまいそうな、そんな心地好きさ。

矛盾。けれど、矛盾ではない。そう考えなければならぬ――

『ふうん』

――い？

目の前には美しい黒い髪を携った華奢な体つきの少女の姿。その目は濁っており、まるで心の奥底まで見透しているかのような、そんな感じがする。

けれど、さつきまでの恐怖、気持ち悪さ、心地好きと言ったモノは一切感じられなくなった。

そう、目の前にいたのは少し変わった美しい少女のみ。

「ははッ……ごめんね。少し疲れてるみたいだ」

『……そうね、本当に辛そうなもの。ゆっくり休みなさいな』

一体何に恐怖していたのだろうか。一体何を気持ち悪く感じていたのか。一体何故心地好く感じたのか。それは、気の迷いなのか、それとも必然なのか、いや、これは疲れからくるものだ。

俺はそう決め付け、病室へと足を進めた。

『休んだところで、その疲れはとれないでしょうけれど……ね』

『貴方も大変ねえ……随分なモノに憑かれちゃって……ウフフ……一時は退屈しないですみそうネエ』

ウフフ……うふふフフ……

少女の笑みは、小さく、小さく、夜の闇に溶けて行く。

その笑みが大きく歪むことになるなんて、これっぽちも考えずに。

第33話 見守っています

入院二十六日目

昨日の少女は一体何だったのか。

あの恐怖、気持ち悪さ、心地好き。何でそんなものを感じてしまったのだろうか。

そんなことばかりをずっと考えていた。けれど、答えなんて出てくるはずがなかった。

少し頭を冷やそうと立ち上がる。外の風に当たれば多少はマシになるだろう。そうして、扉に手をかけたその時、扉の向こう側から声が投げ掛けられた。

「松さん、今大丈夫ですか？」

鈴仙さんだ。俺は扉を開き鈴仙さんに挨拶を返す。

「おはようございます。ええ、大丈夫ですが。何かありましたか？」

「いえ、どうやら姫様に会っていたみたいなので少しお話に。外に出ようとしていたんですよね？付いていっていてもよろしいですか？」

「構いませんよ。にしても、良く私が外に出ようとしていると分かりましたね」

「そりゃあ分かりますよ」

当然だと言わんばかりに胸を張る鈴仙さん。

直ぐに扉を開けたのが原因だろうか？布団と扉にはそこまで距離は空いていないが、立ち上がるのに結構時間は掛かる。それなのに直ぐ扉が開くのは可笑しい。後は、鎌でも掛けられたのだろう。

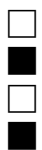
こうして考えると、上手く鈴仙さんに遊ばれた気がして少し恥ずかしいものだ。

「それじゃあ行きましようか」

「はいー」

鈴仙さんは元気の良い返事を返してくれた。

『全部……全部分かってマスよ……』



外に出て一つ大きく伸びをする。竹林が日差しを遮り体全体とまでは行かないが、なかなか気持ち良いものだ。ここに来る前は、太陽の光が鬱陶しい炎天下の中でも歩いたり走ったりしたものだ。

「気持ち良さそうですね」

「ええ。今まで鬱陶しい位にしか思っていなかったのですが、案外良いものでした。それで、何か話が有ったのですよね？」

「はい。昨日姫様に会いましたよね？」

姫様……と言う人物が誰なのかが分からないが、恐らく昨日の夜に会った彼女のことだろう。

「出会っていると思います……多分……」

「昨日の夜。部屋の手前にある曲がり角でぶつかっていた相手です。そのお方が私達の主人、蓬萊山輝夜様です。一つ忠告しておきます。いえ、警告の方が良いでしょう。姫様に不容易に近付かないでください。あの方の持つ魔性は人間である松さんにはキツすぎる。あの時は偶々助かったから良かったですが、万が一あのまま取り付かれたら……思考を殺されます。姫様以外を考えられなくなってしまいます。もしそうになったら……私が貴方を殺さないといけなくなる」

何を言っているんだろうか鈴仙さんは。確かにあの少女を前に良くわからないまま色々な感情を抱きはしたが、そのままその感情達は消えていった。

確かに死にたくはい。けれど、そんな事が有るわけもない。

「分かっています。分かっています。貴方が死にたくないと思っっていることも、そんな事が有るわけがないと思っっていることも。ですが、事実なのです。だから、どうか、出来る限りで良いので、姫様には近付かないようお願いします」

「……………分かりました」

訳がわからない。訳がわからないまま俺はその場を去った。

この後は八意先生から薬の種類についての講座が残っているのだ。唯でさえ昨日の分でも頭がこんがらがっているのに、それに加え姫様と呼ばれる少女。魔性がどうか言って近付かないでほしいと言ってくる鈴仙さん。頭がパンクしそうだ。

けれど、魔性については一概に否定はできない。なにせ、この世界ともとの世界は違うのだから。魔性と言うものが存在しても可笑しくないのだ。妖怪と言う存在のように、霊力と言う不思議な力のように。

だから、今は極力近付かないようにする。と言うことだけを覚えておこう。今はそれよりも優先するべきものがあるから。

『大丈夫です……………ワタシがマモリますカラ……………ズツト……………ズツと……………見守ってイマスからネエ……………』

第34話 理解しています

入院三十二日目

今日で遂に退院。そして、同時に永遠亭に就職。基本的には鈴仙さんの補助として人里に出ながら、薬の販売を行う。ある程度慣れてきたら、俺一人で売りにも出るようになる。薬の販売を行わない日は、永遠亭で八意先生の手伝いをするようになるだろう。

「松くんは病み上がりだからあまり無理しないこと。鈴仙も松くんにはあまり無理させないように。それじゃあ行ってらっしゃい」

八意先生に見送られながら、永遠亭を後にする。

右手と左手で背負っている荷物をしっかりと固定し、鈴仙さんの後を追うように付いていく。右手が使えるのは鈴仙さんの妖力供給のおかげだ。

荷物を背負い、歩くこと二十分程だろうか。漸く人里に到着した。

二人で里を歩き、先ずは、以前から薬を買って頂いているお宅へ訪問販売。その後は、まだ買ってもらったことのないお宅へ訪問販売。後は路上で声を掛けられたら薬を売る位だろうか。

薬を路上で売って良いのか疑問ではあるが、まあ、元の世界とは色々違うのだしきつと大丈夫だろう。

次は……俺が永遠亭に行く前の住居。宿、長屋と言うのだろうか、其所へ訪問する。恐らく俺の部屋は既に無くなっているだろうが。

なんて思いながらも、何事もなく長屋へと付いた。

此処で永遠亭の薬を買って頂いているのは大家さんと、俺のお隣さんだけのようだし、すぐに終わるだろう。

『おや？松じゃないか。久しぶり。一体ここ一ヶ月何してたんだい？』

「あ、お久しぶりです。赤さん。いや、色々ありまして、心配お掛けしました」

赤い髪に、口元まで隠す真っ赤なマント。そのマントの上からでも分かるスタイルのよさ。何かの妖怪であるらしく、このマントはそれをカモフラージュする為のものらしい。

「そんな畏まらなくても良いってば。どうやら仕事も見つかったみたいだし、隣人としては嬉しい限りだよ。あ、そうそう。松の部屋なんだがね？」

「別の誰かが入っちゃいましたか？もし住んでいる方が居なかったらもう一度借りようと思っていたのですが……」

「違う違う。実はね、知ってたんだよ。お前さんが怪我して帰ってこれなかったのは。隣の薬売りが教えてくれたよ。だから部屋はそのままだ」

「本当ですか!?それは良かった。また一からこんな手の奴を受け入れてくれる場所を探さなくてすみませす」

「家賃は三週間分貯まってるがね。頑張りなよ？」

「はい。ありがとうございます」

「礼なんていらさないよ。それは大家とそっちの薬売りに言つときな」

赤さんに薬を売り、大屋さんにお礼を言つて長屋を後にする。

にしても、先程の赤さんの報告は本当に有難い。如何せんこの手では気味悪がられ門前払いの所も有ったほどだ。そんななか漸く見つけた安全な場所。多少ボロいとは言え、かなりの格安。三週間分とは言われはしたが、レミリヤさんから頂いたお金を全て出せば足りるだろう。

それと、鈴仙さんにも感謝しなければ。彼女が伝えてくれていなければ俺は今頃ホームレスと化していたのだから。

「鈴仙さん。ありがとうございます」

「それは先程の長屋の件ですか？だったら当然のことをしたまでですよ。ちゃんと約束しまシタからね」

約束？俺は彼女と何か約束でもしただろうか？覚えていないな……まあ、気にする必要なんてないか。

その時は浮かれていた。

そんな約束はしていない。

そもそも俺は何時、彼女に住所を教えた？

八意先生にも教えていないのに、何故？

疑問に思うべき場所は、不審に思うべき所は幾らでも存在したのだ
……



次の訪問場所は寺子屋。一番のお得意様らしい。

「すいませーん、永遠亭の者ですがー」

鈴仙さんが玄関前で声を上げる。すると、少し遅れて声が帰ってきた後、一人の女性が姿を現した。

『すまない、待たせてしまったな。と、おや？いつぞやの……名は佐々木松だったか？』

「ええ、合っていますよ。お久しぶりです上白沢さん」

真つ白な髪に、青を基調とした服。凜々しい雰囲気纏ったたできる女。

そして、以前伺ったとき『子供たちに悪い影響が出る前に帰ってくれないか』と出会い頭早々、この右手を見ながら言い放った女だ。あの時の会話は全部覚えてる。

『それじゃあ何時も通りの量を頼む。にしても佐々木松、職が見付かったのだな』

正直顔も見たくはなかったが、此方は店員、向こうは客の立場。無視すると言うわけにも行かず、仕方なく声を発する。

「ええ、おかげさまで」

『むっ、随分愛想がないじゃないか。それではこれから先やっていけないぞ？』

「言われなくても分かっていますので」

『……なあ、私がかしたか？』

「ええ。とはいっても、その様子だと覚えられていないようですがね」
「慧音さん。補充終わりましたので、お代は此方ですね」

上白沢さんとの会話を断ち切るように間に入ってきた鈴仙さん。

ああ、やってしまったと内心後悔しながら、彼女の斜め後ろ立つ。「ありがとうございます。また一週間後にうかがわせていただきますマ

す」

『あ、ああ……またよろしく頼む』

そうして、寺子屋を後にした。

「すいません……商売の邪魔をしてしまつて」

「いえいえ、構いませんよ」

鈴仙さんは笑つて許してくれた。しかし、迷惑をかけてしまったのにはかわりはない。今度何かしらのお礼をしたほうが良いだろ。

『(子供たちに悪い影響が出る前に帰つてくれないか。』

その右手、何かの呪いかなにかなのだろうか？周りにどう影響を与えるか分かつたものじゃない。

いえ、これは呪いとかじゃなくてですね

呪いじゃなかったらなんだ？お前自身が妖怪と言う可能性もある。ん？そう言えば、右手が可笑しな奴が職を探していると聞いたな。さてはお前か？

確かにそれは私ですが……

やはりか……帰つてくれ。私も半妖の身ではあるが、得体の知れない存在を雇うなど出来る筈がない。それに、お前は紅魔館から来たそうじゃないか。だとしたら、なおさらここには置いておけない。むしろ人里を守護する者としてはさつきと紅魔館に帰つて欲しいところだ。何が嬉しくて吸血鬼の使いを雇わなければならないのか。それでもなお、此処で働きたいのなら、その気持ち悪い右手をどうにかして、かつ、身の潔癖を証明してくるんだな。

……ツ!!結構です!!』

「(こんな俺でも、家族だつて言つてくれた、認めてくれた人達なんだ。上白沢さんが、生徒を大切にしていることも分かる。安全性が確保できていない相手ならなおさらだ。けれど、けれど……ふざけるなツ!!

ああ、クソツ!!イライラする!!)」

「松さん。お気持ちは察します……けれど、今は抑えておいてください。帰ってきたら私が受け止めますから。ネ?だいじょうブデスよ。私はキチント理解シテいますから……」

「すいません……ありがとうございます」

固く握りしめた拳を、鈴仙さんは優しくその両手で包み込んだ。

そのお陰か幾分か心が落ち着いた。

「ええ……それはヨカッタデス。それじゃあ、残りも一気にいってしまいいしょう!!」

鈴仙さんは俺の拳をそのまま天高く伸ばさせ、オーツと言った。それに、俺は苦笑いを浮かべるしかなかったが、その姿に救われたのだ。

第35話 住居

鈴仙さんと薬を売り歩き、無事今日の分は全て売り捌く事が出来た。最初は重かった薬箱も今では軽くなっている。上白沢さんと顔を合わせた事以外はとも充実した一日だったと言えるだろう。

働くと言うもの良い。なにせ、それ以外の事に意識を向けなくても良いのだから。よっぽどの事がない限り仕事以外の事を考えなくていい。欲を言えば接客業よりも、室内で黙々と作業をする方が圧倒的にやり易くはあるが、そこは仕事があるだけで十分なのだ。これ以上を望めば我儘と言うもの。こればかりは慣れるしかない。

今後見ず知らずの人を相手に一人でも対応できるのだろうか。なんて不安を抱いていると、不意に鈴仙さんから声が掛かった。

「そう言えば、松さんはあのお家から永遠亭に通うのですか？」

「ええ。そのつもりです」

「そうなんですか」

「ですが、急になぜそんなことを？」

「宜しければ私から師匠に言っておきましょうか？住み込みで働けるように」

また急な話だな。確かに永遠亭に住み込みで働くことが出来るたら一々この竹林を抜ける必要も無くなるし、妖怪等に襲われる心配も無くなるだろう。だが……

「すいません。お気持ち嬉しいのですが、お断りさせていただきます」

それは俺には重い。一ヶ月の間永遠亭に住んでいたとは言え、やはり息苦しいものは息苦しいのだ。

「ええ、やっぱりそうするべきなんですよ。そうした方が断然安全ですからね。そうと決まれば早く戻って師匠とハナシをしないと!!あ、姫様のケンでしたら安心してクダさい私がゼツタイに守って見せますから松さんはなんの心配もしなくて結構ですヨどうせなら部屋も一緒にしてシマイましょうかそうした方が私も守りやすいですし将来の事も考えテオクならば絶対そっちの方がイイですヨええ絶対に」

ソツチのハウガいい」

……どうやら俺の声は届いていなかったようだ。鈴仙さんは時折こうしてひとりで暴走する。どうやら彼女の中で俺は既に永遠亭に住むことになっているようだが……後で俺から八意先生に説明しておかなければ。

『お前さえいなければ!!』

『私がゼツタイに守りますから!!』

『いいから!!早く何処かに行きな!!』

『心配なんていらないわ。大丈夫……大丈夫ヨ……』

まだ知らない。気付いてもいない。

だが、それは、その出来事は、俺と関わった人たちを歪ませていく。それは紛れもない、俺自身の罪で、俺一人が背負うべきもの。

だから……

『お願い、できますか?——さん』

みなさん。さようなら。もう、出会うことは、無いでしょう。

第36話 しこう

「……んっ」

まばゆい光、太陽の光が顔を照らし目が覚める。窓から見える外の景色には竹林の姿は一切ない。それもその筈。ここは迷いの竹林でも、永遠亭でもない。足が折れる前に住んでいた少しボロい長屋なのだから。

太陽の光を鬱陶しく思いながら布団から起き上がる。部屋の中に置いてある水瓶の蓋を開き顔を洗う。その冷たさに一瞬体が動かなくなるが、そんな事に文句は言っていない。頭にも少し水を掛け、寝癖を直す。今日からこの長屋から永遠亭に通って行かなければならないのだ。明確な時間は設定されていないが早めに出ることに越したことはない。

干してある沢庵と昨日の余りの玄米を皿に盛付け、手を合わせる。「いただきます」

小さく呟き、箸を持つ。紅魔館を出てと言うものの洋食を口にしていない。殆どが和食、それも野菜ばかりだ。大根、白菜、山菜、キノコ類、豆類。が主だろう。肉も食べないことはないが鶏肉位なものだ。まあ、そもそもの話殆ど売っていないのだが。

幻想郷に食べる目的での家畜は鶏しか存在していない。牛も居ないことはないのだが、どちらかと言うと労働力としての存在だ。豚はいい。代わりに猟師が捕ってきた猪や鹿の肉がちよこちよこと出回っている。

この世界の物価と言うものはとても安い。いや、極端と言えいいのか。単位が違うから説明しづらいが、大根が此方では一本五、六十円程度で売られている、のに対し、牛肉グラムが数千円で売られているようなものだ。そりゃあ手が出るはずがない。とまあ、そんなこんなで、最近は何と言う物を口にしていないのだ。

なんて、どうでも良いことを考えながら朝飯を完食。

「いちそうさまでした」

最後にまたちいさく呟き食器を片付ける。これから仕事へと向か

うのだが、これといった準備はしていない。持っていくものは、永遠亭で頂いた鉛筆とメモ帳ぐらいだ。

玄関でボロボロになった靴を履き、引き戸を開ける。

「おはようございます松さん。お早いですね」

「……………おはようございます鈴仙さん。どうしてここに？」

ここで冷静に対応できた自分を褒めたい。

「どうしてって、向かえに来たんですよ？まだ竹林の道程を覚えていないでしょう？」

「ええ、まあ、覚えてはいませんが……………因みに何時から此処で待っていたのですか？」

「そうですねえ……………日が出る前だったから……………四時間程度でしょうか」

四時間!?何を考えているんだこの人は……………流石に此処まで来たら親切って一言だけで済ませれる範囲じゃないぞ。ストーカー……………一度八意先生にそうだん——

「不自然なトコロなんてないデショウ？」

「——そうですね。すいません、寝起きのせいか頭が働いていなかったみたいです」

「いえいえ、イインですよ。ただ、やっぱり朝は寒いですね。最初は入ろうかとも思ったのですが、やっぱり許可を貰っていないですからね。出来れば今度から入りたいのですが……………」

流石にそれは断りたいところだ。これは特に理由を考えなくて普通に断れば——

「だめデスか？」

「そうですね。やはり、寒いなか態々来てもらっているのですから……………ただ、寝ているのでおもてなしが出来ませんがそれでも良いですか？」

「はい。全然構いませんよ。アリガとうございます」

よかったおもてなしもできないのにもうしわけないがこれはいたしかたないことだろう。

「それじゃあ準備してきますので、もう少し待ってもらえますか？」

「急いでくださいね？」

「分かっています」

鈴仙さんの冗談混じりの言葉に此方も笑顔で返す。

流石に女性とであるくのにはろぼろのくつではかっこうがつかないたしかあたらしくかっしておいたげがあつたはずあれはこころか。

『フふッ』

「すみません。お待たせしました。それでは行きましょうか」

「ハイ!!」

第37話 笑顔

「朝からうどんげの姿が見えないと思ったら、貴方を向かえに行っていたのね」

「はい。松さんはまだ竹林の道を把握していないと思ひまして」

「その行動自体にとやかく言うつもりはつもりはないけど、せめて一言欲しかったわね」

「すみませんでした……」

「さてと……松、早速で悪いのだけれど今日は一人で行ってきて貰える?。」



流石に無理だと抗議した。里の中を把握していない、一回行っただけの素人、それ以前に右手は動かない。地図を渡され、お得意様の昨日行つた所と同じ場所。新薬の宣伝に行くだけだから右手もさほど関係ない。いざとなればと言われ渡されたのは靈力を引き出す為の薬。これで右手も動くだろう。との事。実際三本用意されていた内の一本を飲んでみたが、問題なく動いている。言いたいことは沢山あつたが、そこまでされてなお無理だと言えるほど俺の立場は強くないのだ。これで更に抗議してクビになつたりでもしたら堪つたものではない。

そんなこんなで今大人しく新薬の説明を行い、次で三軒目なのだが……仕事とは辛いものである。

「すいませーん。永遠亭のものですがー」

「少し待っていてくれー」

玄関を越えて聞こえてきた声。正直二度と会いたくない相手ではあるがこれも仕事。永遠亭へ迷惑が掛からないように出来る限り愛想良く接客しなければ。

「待たせてしまつてすまない。と、おや? 佐々木松ではないか。鈴仙は一緒ではないのか?。」

「はい。私一人です。今日は新薬の宣伝に来ました。今回の新薬は――」
捲し立てるように言葉を紡いでいく。出来る限り上白沢慧音の顔を見たくはない。その一心で。

つまり、

「説明は以上です。購入される場合は次回の補充の時に言っていたければ追加で入れておきますので。それでは失礼します」

「いやいやいや、流石に全部は頭に入ってこなかった。急いでいるのかもしれないが、もう一度とは言わんからもう少し説明してくれ」

相手は不満で、引き留められるのは必然だと言うことだ。

「説明ならさつきしたではないですか」

「いや、だからな？説明が早くて聞き逃したところがある。そこをもう一度説明してほしいんだ」

――ああ、苛々する。あの時は説明もさせてくれなかった、それどころか此方の話すら聞いてくれなかったのに今度は説明しろ？それとも一度言ったことを？「随分自分勝手なくそつたれだな」

「なに？」

「ああ、すいません。声に出てしまっていたようです。人の話を聞かないような方が偉そうに話を聞かせると言ってくるものですか。そんなことで教師が勤まるなんてすごいですよ。あ、そうか反面教師と言うものですか。確かに、それなら貴女以上の存在は居ないでしょう。それでは、私は此で失礼させて頂きます」

後から気付く。自分は何て事をしてしまったのだろう。永遠亭へ迷惑を掛けないどころか、火種を作りに行ってしまったているじゃないか。

どうして、急にあんなに苛々したのだろう……疲れているのだろうか？分からない……。

その日は仕事を早々に終わらせ帰宅した。

そして、次の日、鈴仙さんと一緒に訪問販売。そこには勿論寺子屋も含まれる。

門前払いも覚悟していた。そして、帰った後、永遠亭を辞めようとも。

けれど、それ以上の事が起きた。

笑顔だ。上白沢慧音さんは笑顔だったのだ。まるで、昨日のやり取りを忘れたかのように。いや、実際忘れているのだろう。

永遠亭は辞めなくて済む。けれど、寒い。まるで、先の見えない暗闇を歩いているかのような錯覚。ただ、寒く、恐ろしかった。

そんな時、鈴仙さんはずっとソバにいてクレタ。

イマこうしてオレガイキテいられるのもカノジヨのおかげだ。

今度キチンとオレイをシナければイケナイな。

『『フフフツ』』

第38話 材料

「よく聞きなさいうどんげ」

やめて……

「原因は分からない」

知っているから……

「恐らく、あの右手が原因でしょうけど」

もう、知っているから……

「彼は……」

言わなくていい……

「佐々木松は……」

分かっている……分かっているから……

「もう……長くはない……」

頭に響く感情の波。

耳に届く慕う者の言葉。

信じたくなんてない。全てを忘れ去ってしまいたい。

けれど、忘れることなんて出来ない。信じないと言う選択肢もない。

私の忌々しいこの力が、嘘ではないと言っているから。

ずっと前から、それこそ出会った時から知っていた。その弱々しく、強すぎる波を感じていたから。

失いたくない。漸く、私を見てくれる人が現れたのに、なんでこんな……

「うどんげ……」

師匠が私の名前を呼んだ。その声の一つの事思い出す。

この人物は誰だ？ 八意永琳。月の頭脳とまで呼ばれていた天才。特にその力は薬学に注がれ『蓬萊の薬』と呼ばれる不老不死になれる薬を開発したほど。そう『不老不死』である。死の概念が無くなった存在。そして、その薬の効果は眉唾物ではなく、目の前の八意永琳が生き証人。蓬萊の薬……不老不死になれ、効果も実証されている。それを飲ませれば……

「蓬萊の薬を飲ませれば」

「可能性は有るでしょう。でも、彼は能力のせいなのか、右手のせいなのか、体質なのか分からないけれど……薬や毒に耐性を持っているよな。だから、蓬萊の薬も効くかどうか……仮に効いたとして、副作用が出るかもしれない。それ以前にそれ以前に彼が人の道から外れることを良しとするかも分からない——」

蓬萊の薬も効くかどうか……効力がない……不老不死になれない……不老不死になれない……不老不死になれない……

「——んげ!!うどんげ!!」

「……なんですか」

「なんで私が睨まれなくちゃいけないのよ……。いい、私は松に蓬萊の薬を飲ませること事態に反対はしない。むしろ飲んでほしい。そうすればデータも取れるから。でもね、出来る限り無理強いはしたくないの。だから、説得は任せたわよ」



鈴仙は部屋から飛び出ていった。

「頼んだわよ」

一人となった部屋で小さく呟く。

久しぶりに気分が高揚しているのが分かった。

月でも地上でも分からないことだらけだった。だから分かりたくて勉強した。分からないを分かるにするために。その中でも、特筆して分かるようになって楽しかったのが薬学だった。けれども、それ以上に分からないものが有った。人間と言う生物だ。人間と言う生物は恐怖、喜び、悲しみ……分からないすぎて、理解することを諦めた。それは、分からなすぎたのも一つの要因だが、それ以上に、実験材料が存在しないのだ。化物になれば分かるのだろうかとも思ったが、意味はなかった。やはり、実験材料が必要なのだと理解した。

姫様は駄目だ。あのお方は愛しいから。それに、既に人間ではない。私と同じ化物だから。

けれど、漸く分かるかもしれない。人間と言う存在が。分かるのか
もしれないのだ。

しかし、分かる前に死んでしまったらどうしよう？ある程度実験し
たあとに薬を飲ませ不老不死になれば……その状態で何処かに閉じ
込めておけば人間と似たようなモノになるのではないのだろうか？
なんにせよ、こんな機会はもう訪れないだろうから、有意義なジツケ
ンにしなければ。

『ああ……楽シミネエ』

第39話 話し合い

●月▼日

永遠亭に就職しようすぐ一ヶ月が過ぎようとしていた。

働いていく上は一番危惧していた人間関係も今では良好で、右手を気持ち悪い物として見る視線はかなり減った。それでも、この右手を気味の悪い物として見る者達も確かに存在しているのだが。まあ、一々気にしている必要もないだろう。

●月▲日

今の生活が充実しているのか。と、問われれば否だ。紅さんが訪ねてきたり、隣人さんが最近頭痛が激しいとぼやいていたり、鈴仙さんがこの長屋に越してきたり。話題は尽きない。しかし、騒がしいのはあまり好きではない。仕事行きも帰りも鈴仙さんが一緒にいて。数少ない一人の時間と言うものが無くなっていく状態なのだ。元々人付き合いが苦手で、少しずつでも慣らしていこう、変わろうと思って人里に出てきたのに、これでは、なれる前に自分が病んでしまいそうだ。

●月■日

自分の愚痴を吐き出すために日記と言うものを書いてみている。既に三日目だが、不思議と日記を書いた後はすっきりしている気がする。それでも、疲れているものは疲れているのだが。

■□■□

「なんで……鈴仙さんがその事を知っているのですか？」

「……私には能力があります。物体の波長を感じ取る力が。そして、波長が教えてくれているんです」

その波長がどうのこうのと言うのは良く分からない。けれど、バレているのであれば……もう隠す必要性もないのだろう。

「……私は、俺は外から来ました。外界、幻想郷の外から。偶然なのか、必然なのか……それは分かりません。けれど、私は来てしまった。

この幻想郷に。そして、そこは森のなか。右も左も分からず走り回り、何時しか倒れ、私は一人の女性に助けられていた。アリス・マーガトロイド。彼女に助けられ、一時の間、共に過ごした。そして、私は逃げました。逃げる前までは、私は彼女に不遇な扱いを受けてなんていないのに。外には出してもらえなかった。その真意は分からない。けれど、分からないのに、俺は彼女を疑い、そして、彼女から逃げた。そして、その結果としてこの右手が無くなりました」

腕を持ち上げ右手をブラブラと振って見せる。今俺は笑っているのだろうか？それとも、泣いているのだろうか？怒っているかもしれない。無表情かもしれない。自分の状態が分からない。けれど、口は言葉を紡いでいく。

「俺は救われた。逃げ込んだ先の魔法使いに。そして、紅魔館へと辿り着いた。そして、パチュリー・ノーレッジは俺の『寿命』と引き換えにこの右手を、人ならざる右手を、俺にくれた。パチュリーさんはな、実験の一つだって言ってた。けどな、ごめんなさいって謝ったんだ。医学や白魔術に疎い私には、何かを引き換えに、何かを生み出す、手にいれる事だって。そして、紅魔館に住む皆は……こんな右手でも、俺を受け入れてくれた。信じられるか？こんな、同じ種族すら信じる事が出来ない馬鹿を、皆は家族だって、言ってくれたんだぜ？だから、俺はこの右手を手放すことは出来ない。これが、俺が生きてきた証だから。愛された証だから。」

鈴仙さん。貴女が提案してくれた方法は、とても魅力的だ。だけど、少し時間を頂けませんか？」

「……………分かり、ました」



● 月×日

鈴仙さんとの話し合いからこれで四日が過ぎることになる。

とは言っても、最初から殆ど決まっていたのだが。

皆は、生きてほしい。『不老不死』にならなくとも、吸血鬼なり、魔

法使いになればいい。と言ってくれた。

だから、俺は、生きようと思う。この、残された人生を。

日記はここで途切れている。

第40話

ごめんなさい

俺の寿命は残り三十年近く。つまりは、五十代後半まで生きることが出来る。

最初は驚いたさ。けど、目の前で実験と言っておきながら泣きそうになっている女の子が居るんだぞ？例え俺が他人に興味が無い。持てないとしても、その時には既に他人では無くなっていた。彼女は俺の右手を、取り戻してくれた。恐らく、他人の心が分からない男の勝手な妄想だが、罵倒されるのを覚悟していたのではないだろうか？他人の寿命を勝手に奪っているのだから。少なくとも、俺はそう思うけれど、もし、あの時、右手が無かったら？俺は生きることが辛くなつて、自殺していたかもしれない。いや、していたと思う。

彼女は、俺の人生を奪い、生命を救い、生きる決断をくれたのだ。

ああ、今だからこそ、素直にそう思える。俺は彼女に、パチュリー・ノーレッジに救われた。

彼女は俺の右手を奪った。それは、パチュリー・ノーレッジに直してもらった。しかし、彼女が俺の右手を奪った事には変わりはない。けれど、もし、彼女が居なかつたら、俺はこの世界でのたれ死んでいただろう。今でも、あの頃を思い出すと楽しかったと思える。その分、彼女には恐怖が残っているが。それでも、それ以上に楽しかったと言える。もし、今彼女に会えば、彼女はどのような反応をするのだろうか？ちよつと見てみたい気がする。

アリス・マーガトロイド。俺が初めてこの世界で出会った存在。人として満足出来る時間を、初めて与えてくれた存在。

魔法使いは、俺を救ってくれた。死にかけていた俺を救ってくれた。パチュリー・ノーレッジは、彼女を弱いと言ったが、俺はそうは思わない。彼女は強い。パチュリー・ノーレッジは彼女を止まっていたと言っていた。だからどうした？止まって何が悪い。逃げて何が悪い？結局全て自分が抱え込まないと行けなくなるのだ。例え群れをなしても、誰かが一緒に背負うと言っても。結局の所、最後に動く

のは自分だ。自分自身だ。彼女は立ち止まっている。けれど、前に進まない。私が悪い、弱いからと。

俺に彼女の事は分からない。けれど、彼女は強い。たちどまっても、逃げ出しても、忘れようとしていても。それでも、目の前の誰かを必死で助けようとする強さを、彼女は持っている。

吸血鬼達は美しかった。眩しかった。一緒に居てはいけないう思った。けれど、吸血鬼達は離れることを許してくれなかった。家族だと、そう、言ってくれた。守ってみせるから。そう言ってみせた。眩しかった、羨ましかった、そして、嬉しかった。家族を持つ者の温もりが眩しかった。家族を持つ者の温もりが羨ましかった。家族の温もりを、俺にもくれた事が、その差しのべられた手が、嬉しかった。例えば、それが彼女達の計画だろうと、策略だろうと、これから、裏切りが待っていたとしても、それだけは、変わらない。変わる事の無い、俺の美しく、暖かい、そして、だらけてしまいそうに甘く、優しい、記憶として。

レミア・スカーレット。その瞳から流れた雫は、家族の大切さを語っていた。

フランドール・スカーレット。その握った手の温もりは、家族の大切さを感じさせてくれた。

出会った瞬間ナイフを突き立てて来たメイド。俺よりも、圧倒的なトラウマを持ちながらも、そのトラウマに立ち向かう勇敢な少女。吸血鬼に助けを求め、そのトラウマに立ち向かう姿は美しかった。だからこそ、俺は彼女を責めた。初対面の相手に一体何をしているんだ？と。一方的に、虐めるように。今でもそれが悪い事だとは思えない。けれど、その行動は非難されるべき物なのだろう。彼女は勇敢だ。トラウマに立ち向かい、殺そうとしてまで這いずり回る。

十六夜咲夜を責めて、俺は生きていると実感出来た。この場所に俺は、存在しているのだと。

彼女のように、トラウマに立ち向かう訳でもない。ただ、彼女を責める事によって、生きていると実感する事が出来たのだ。

紅美鈴。彼女は太陽だ。俺が生きる理由、意味だ。何でかなんて分

からない。どうしてそうなったのかなんて、分らない。他の人も、同じ感情を抱いたかもしれない。他の人にも、似たような感情を抱いているかもしれない。それでも、彼女は、紅美鈴は、俺にとっての太陽だ。命そのものだ。それ以上でも、それ以下でもない。

ああ、俺は彼女を、紅美鈴を愛している。

それが、どんなに歪んでいても、俺は彼女を愛している。

だからこそ、俺は彼女を頼れない。どれだけ、頼って欲しいと言われても。

これが、惚れた弱みと言うやつなのだろう。

「けれど、彼女達が助けたのは、救ったのは、家族だと言ってくれたのは……そして、紅美鈴を愛した、愛しているのは、この、人間なんだ。人間でなくなったら、俺は俺じゃ無くなっている。

皆は、それでも良い。一緒にいたい。って、言ってくれたけど。それでも、俺は、人間として、彼女達から貰った物を、この命と共に亡くしたい。

こんな、支離滅裂で、訳の分からない事を納得出来ないとは思っただけど、そんな、支離滅裂で、訳の分からない事に、俺は納得しているんだ。

だから、ごめんなさい。俺は不老不死になるつもりはありません。

それに、今更俺が不老不死になって紅魔館に戻ったとしても……俺が原因だとしても、俺自身があれを元通りには出来ない。だったら、大人しく死ぬのが良いんだよ」

目の前に座っている彼女は、悲しげに微笑みを浮かべるだけだった。

第41話 扉

目の前の女性は、ただ、優しく、悲しげに、そして、観察するように微笑みを浮かべているだけ。

その視線は初めて感じるもの。人として見られているのか、自分は別の何かとして見られているのではいのだろうか？

そんな疑問を覚えてしまう。

「話は分かったわ。だけど、どうして鈴仙に直接言わず私に言いに来たのかしら？」

「もし泣かれでもしたら対処できません。強引に来られたら簡単に組み伏せられる。その可能性があるのであれば、先に鈴仙さんが逆らえない八意先生に話を通しておいた方が良くと思いますよ」

「なるほど……ね」

顔はこちらに向けたまま、サラサラと紙に筆を走らせる八意先生。恐らく、俺の話をメモしている。もしくは、新薬のレシピだろうか？

「なので、先に八意先生から鈴仙さんへ話をしておいて貰えませんか？ 勿論、その後に自分からも説明をしておきますので」

「そうねえ……まあ、いいでしょう。貴重なデータにもなるしね」

「貴重なデータ？ 精神状態の研究でも行っているのですか？」

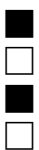
「そんな所よ」

筆を走らせるその手は止まらない。

「それでは、鈴仙さんへの説明、お願いします」

「ええ、任せてちょうだい」

お願いします。と、一礼して部屋をあとにする。



あれ以来、鈴仙さんからの言及等は無くなった。それは良いのだが……何処か鈴仙さんの様子が可笑しい。

以前、俺の体についてキチンと説明をしようとした時だ。鈴仙さんは、どうやら俺の体について忘れているのか逆に、そんな不吉なこ

とは言うものじゃないと怒られた。

それが、俺のことを思っただけでその話題を逸らしたのか……にしては、妙に強引に感じる。

そして、可笑しいのは鈴仙さんだけではない。上白沢さんでもある。

この間、寺子屋に薬を置きに行った時、頭を下げ謝られた。なんでも、以前の発言、初めて会った時の事を謝りたいと言われた。

これ自体何の不思議もない。誰かに指摘されたのか、はたまた、自分で気付いたのか。それは分からないが、謝って貰ったおかげで、俺もすんなりと彼女を許し、今までの行為に謝れた。

しかし、彼女は覚えていなかった。職が見つかったのだな。と言った。

訳が分からない。俺はこの職について既に一ヶ月は過ぎている。さして長くはないが、寺子屋には週に三回は来ている。彼女が知らないはずがないのだ。

何かが可笑しい……

そう感じた。いや、明らかに可笑しい。

なんでこうなったのだろうか？分からない。

取り敢えず出勤しよう……。

重い腰をゆっくりと持ち上げ、俺は扉を開けた。

もう、もどることは出来ない

あんなことになるとは知らずに……

END 3 知識欲

それなりに歩き慣れた道をいつも通り進んでいく。

そして、大きな屋敷の前に着いた。ここが、永遠亭。俺の職場である。

屋敷の中に上り、薬を取りに行くため薬品保管室へと向かう。

にしても……今日は遊び回っている兎たちが見当たらないが、何かあつたのだろうか？

何時もなら兎達が飛び跳ね追いかけてっこなりなんなりをしている中庭。だが、今現在、そこには自分の足音しか聞こえない。

静か、静寂……何の不思議もないはずなのに、妙な違和感を感じる。それを、気のせいだと頭を振りかき消す。そんな事をしていれば、いつの間にやら薬品保管室の前に着いていた。

部屋の前で、入っても大丈夫ですか？と、声を掛ける。中からはどうぞと返事が帰ってきた。

襖を開き、部屋の中へと足を踏み入れる。

ここ、一ヶ月毎日と言つていいほどに嗅いできた薬品たちのツンとする臭いが鼻を突き抜けた。

部屋の中には一つの影。俺の雇い主である八意永琳だ。

「おはようございます。八意先生」

「おはよう。あら？鈴仙は一緒じゃないの？」

「え？」

言われてから気付いたが……確かに鈴仙さんの姿が見当たらない。何時もなら家の中に既に居るか、外で鉢合わせる事が多い。と言うより、何時そうだった。そして、それに気付かなかったのはそれだけ疲れていたのだろう。

「そう、みたいですね」

「その口振りだと鈴仙が何処に居るのかも知らないのかしら？」

「知らないです」

「本当に珍しいこともあるものだわ。あの娘がサボるなんて。まあ、丁度いいわ。ちよつとこつちに来てくれないかしら？」

「分かりました」

永琳先生は椅子から折り、床に付けられた扉を開ける。その先には地下へと続く階段が伸びていた。

階段は暗く、明かりは所々にある蝋燭が揺らめいているのみ。

「この下に用があるの。付いてきてちょうだい」

「はあ、因みにこの先にはなにが？」

「ちよつと危険な実験をこの下でやってるの。あ、一応その扉閉めておいてね」

言われた通り扉を閉めてる。明かりは、八意先生が壁にかけてあつた蝋燭を手に持っていた。

開けた時から、蝋燭は付いていたが……一体どう言う原理なのだろう？

「この蝋燭は私のお手製で、私の霊力を混ぜ込んであるの。だから、ちよつとやそつとじゃ消えないわよ？前変えたのが……五年くらい前だったかしら？」

「それは凄いですね。八意先生は本当に色んな事をしていますね。知らないことが無いんじゃないか？って思っていますよ」

蝋燭をじつと見つめていたからか、八意先生が蝋燭について説明してくれた。

にしても、この人は色々な事をやっているし、知っている。薬関係に、蝋燭作り、弓道剣術武道、サバイバル術もお手の物。知らないことが無いのでは？と思ってしまう程だ。

「それでも無いわ。私にだって分からない物も存在する。理解しようとする事自体を諦めた程のものがね」「……………それは、一体」

「さあ、着いたわよ」

八意先生が蝋燭を高い位置に持ち上げる。

その先には重厚な鉄の扉が静かに佇んでいた。

八意先生はその扉をゆつくりと開く。扉はなんの抵抗もなく、ぎいいと小さな音を出しながら開いた。

「うっ……」

そして、流れ込んで来る強烈な臭い。なんと表現すればよいのだから

うか……腐った食品類と、芳香剤なんかを混ぜ合わせた臭い。とでも言えばいいのだろうか。

「臭いがキツイけど我慢してね」

「分かりました……」

そんな中でも、永琳先生は表情一つ動かさず先へと進んでいく。

扉の先には、幾つも積み重なった木箱や、実験器具であろうプラスチックやビーカー。ノコギリの様なものなど、大量の物で溢れていた。

「ちよつと、ここで止まって貰えるかしら?」

「ここで、ですか……分かりました」

正直、今すぐにも逃げだしたいところではあるが、八意先生に了承の返事を返す。

「ありがとう。だいじょうぶよ。いたみはいつしゆんだから」

八意先生の腕が持ち上がり、勢いよく振り下ろされる。咄嗟の事に理解が追いつかないが、条件反射のように俺の手が、八意先生の腕を止めていた。

「だめじゃない」

「あの……巫山戯てるんですか?」

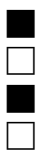
「そんなことないわよ?わたしはね、しりたいの。人間がなんなのかを。だから、おとなしくねててね?」

クソつたれ!!

八意先生を押し退け、部屋から出ようとする。しかし、その前に俺の体は押さえ付けられ、頭には衝撃が走った。

「がッ……あ……あああ……」

最後に見えたのは、扉の先の階段と、広がっていく、赤い液体だった。



「う……あ……あ?」

「おはよう。気分はどうかしら?」

気が付いた。目の前には椅子に座り、何かを書いている八意永琳の

姿。反射的に逃げようと体が動いたが、鎖に繋がれていたようで、それは叶わなかった。

「最悪ですね。冗談なら早く解いて貰えると有難いのですが」

「そうねえ……研究がどれ位で終わるか次第ね。取り敢えず……これからやってみましょうか」

「……………は？」

八意永琳が手にしたのは、壁にかけてあった大きな鉈。その鉈はかなり使い古されており、歯の部分はボロボロ。何かを切断するには適していないように見える。

「それで何をするんですか？」

「あら、分からない？」

分かっていた。むしろ、この状況下で分からない方が可笑しい。

だが、どうして？そんな事をして、一体何になると言うのか。体が寒い。これから起るであろう現実から目をそらしたい。

そして、その鉈が……振り下ろされることは無く、優しく中指の第二関節に当てられた。

ズチュツウ……ゆつくりと、鉈が引かれる。

血が腫れ物の様に膨れ、決壊。血は地面へと滴り、赤い水たまりを作っていく。

「ッあ……」

痛みは小さい。

「ふむ……」

鉈が指から離れ、八意永琳は机に戻り、直ぐ戻ってきた。

そして、鉈が、もう一度中指の第二関節に当てられ……

ズグシヤ

切断された。

「あ……うぐギャあああ!!!」

一瞬遅れて、痛みが体を駆け巡る。体が熱く、冷たい。指から血液が滴り落ちるだけで、意識がある飛びそうになる。

「ねえ、今の状態を教えてください」

指を圧迫する様に抱え込み、蹲る。

「もう……新鮮な情報が欲しいのだから、早く答えなさい。貴方を早く壊したくはないのよ?」

抱え込んでいる手を捕まれ、
ズグン

今度は薬指が落とされた。

「みぎやあああああ!!あ……あああ……」

「さあ、答えなさい」

「い、いひやいでしゅ!!」

「どういう風にもっと詳しく」

「ひっ!!」

鉈をチラつかされ、体が固まる。

しかし、そんな中、何とか口を動かした。

「ゆびがあしゆくて、いたいです!!」

「こわい?」

その間に首を縦に振り、返答する。

「そう……ありがとう。今日はここまでよ。明日また頑張つてちょうだい。後これ、痛み止めね。ちゃんと飲みなさい。水はそこにあるから」

八意永琳は、切断した指を拾い、部屋から去っていった。

「うぐア……ア……いつてえ……ア……いてえよ……うう……」

一時して、出血も止まり、痛みも大分収まった。

顔を上げると、目の前には大きめの錠剤が三粒。

目の前に置かれた薬を何のためらいもなく口に含み、飲み込む。

「んグッ……ごホツゴホツ……あ……ああ……」

錠剤を、水なしで飲んだせいか、咳き込んでしまう。

水を求め、さつき八意永琳が指さしていた方向を向いてみると、そこには、ペットショップにあるような動物が水を飲むための道具によく似た物があった。

それに口を付け、勢いよく水を吸い出していく。

死にたい、死にたくない……

ああ……あの薬で死んでいられたら……どれだけ楽だったか……



太陽が見えない中、もうすぐ一日がすぎる頃だろうか？と、考えていた。

そんな時、扉から、ぎいいと音が聞こえてきた。そこに居たのは、茶碗と箸を持った状態の八意永琳。

「薬は……ちゃんと飲んだのね。さ、食事にしましょう」

八意永琳は、俺の前に茶碗を置いた。中にはご飯に味噌汁をかけたもの。猫飯と言うものが入っていた。

「全部食べなさい。栄養摂取は大切よ？」

半場脅されるように茶碗に手を付ける。少し冷めた猫飯を口に運んでいく。右手は動かず、左手は指二本が存在しない。

食べずらかったが、何とか完食する事が出来た。

「食べたのね。偉いわ。そう言えば、その右手は動かないのよね……今度、結界でも張っておきましょうか。さて、と……」

八意永琳は椅子から立ち上がり、こっちに来る。その手の中には一個の瓶。そして、その瓶の中には見なれた俺の指が入っていた。

「取り敢えず、引っ付けましょうか」

そして、瓶から薬指が取り出され、俺の既になくなっていく薬指の先に引っ付けた。

そして、一本の細い針と、淡く輝く糸で縫い合わされていく。

気づけば、其処には縫われた跡が残るだけの元に戻った薬指の姿。中指も、あつと言う間に縫い合わされていた。

なんなんだ、本当に何がしたいんだこの女は？

「さて、と。準備も整ったし……今日はこれね」

その手の中に収まっているのは、長く、親指程の太さがある、先端が尖った棒。

「ああ、安心して。消毒はちゃんとするわよ？」

そう言いながら、八意永琳は蠟燭の炎に棒を近付ける。棒は熱せら

れ、ほんのり赤くなっている。

「ね？それじゃあ、消毒も済んだことだし始めましょうか」

そう言つて、その棒を俺の腹に付けた。

「あつ……」

先端が熱く、小さく声を上げてしまう。

ズプププ

針が腹に刺さり、進んでいく。

痛くはない。痛くはないが、腹を進んでいく異物に気持ち悪さを覚え、さつき食べた物が昇ってくる。

気持ち悪い、怖い、訳が分からない、もういやだ、なんで、ふざけるな、しにたい、しにたくない、らくになりたい

「うツ……うげええええ」

いろんな感情が混ざり合わさり、口から、吐瀉物として外へと出てきた。

それは、目の前にいる八意永琳にも掛かっているはずだが、彼女は気にせず。その状況を見ているだけ。

「ねえ、何で吐いたの？」

「頭が……ぐるぐるして……気持ち悪い……」

「そう」

今日は痛みが無かったからか、すんなりと答えられた。

それに満足したのか、彼女は針を抜き、止血を済ませ部屋から出ていった。



あれから、もう何日も過ぎた。

肩を落とされた

足を切断された

爪を剥がされた

目を潰された

舌を焼かれた

耳を削がれた
胸を切られた

上げきれない程の拷問を施され、その度に治療された。

そんなある日……あの女が、拷問に使った道具を忘れていった。それは、長い棒だった。骨を砕く為の棒だった。

それを使い、壁にかけてある拷問器具の一つ、ヤスリを手繰り寄せ
る。

もう、思考なんて殆ど動いていない。

だけど、助かるかもしれない。そんな思いが、体突き動かした。

ヤスリで鎖を削り、何十分と時間を掛け、

ガシャン

鎖が落ちた。手首、足首についている枷こそ外せなかったが、これで、自由に歩き回れる。

涙が零れた。

赤い涙しか流さなくなったこの瞳が、透明の涙を流した。

重厚な鉄の扉を、開き、階段を上っていく。足が震え、よろめくも、壁に手を付け、一つ一つ、上がっていく。

そして、出口が見えた。

押し開けた。

光が全身に突き刺さる。

嬉しかった。

「……松……さ……ん？」

声が聞こえた。その特長的な長い耳を持つ、隣人の姿が、鈴仙さんの姿が、そこにはあった。

「あ、え？ど、どうしたんですか!?!と、取り敢えず移動しましょう!!」

助かった……助かったんだ……

涙が溢れる。

彼女がもたれ掛かってくる。

それを、よろめきながらも受け止める。

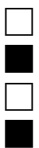
彼女は冷たかった。

頭が止まる。思考が止まる。

彼女の体には力が入っていないく、足元には、見なれた赤い液体。

「あ……あ………あ………」

「崩壊つと」



わざと抜け出せるようにし、抜け出した先には親しき友人。そして、その友人を殺した場合立ったまま呻き声を上げ気絶。

人間に関するレポートはかなり進んだが、それでもまだ足りない。彼の体力ももうそろそろ限界、持って後一年だろう。

あまり支度はなかったが、彼を蓬莱人にして、外との接触を断つ。こうすれば、まだ人間としてあれるのではないだろうか？

処分が面倒くさくなるが、蓬莱人を殺す方法もないことも無い。そうと決まれば、彼を運ばなければ。

ああ、やはり、知識が増えていくのは心地よいものだ。

これからも、私の為に頑張りなさい。

「あ………アアア………あ………ああ………」

佐々木松くん

END 3

知識欲

END

第42話 贅沢

「だから、ごめんなさい。俺は不老不死になるつもりはありません。それに、今更俺が不老不死になって紅魔館に戻ったとしても……俺が原因だとしても、俺自身があれを元通りには出来ない。だったら、大人しく死ぬのが良いんだよ」

鈴仙さんは悲しげな笑顔を浮かべた。その目の端には光を反射する涙。

「そうですか……分かりました。これ以上は失礼になりますよね……ごめんなさい……」

「……優しいですよ、鈴仙さんは。俺にはそんな事真似できませんよ」

「そんなこと、ありません。私より、松さんの方がずっと優しいですよ。それでは、失礼しますね」

鈴仙は顔を俯かせたまま、部屋を出ていった。

「俺は、優しくなんてないさ……」

俺の行動を素晴らしいと言う人はいないだろう。人の気持ちを考えろと言うだろう。それとも、可哀想だと言うだろうか。まあ、どう思われようと俺は考えを改めることは無い。

こうして、考えを貫こうとするだけ俺は成長出来たのだろうか？ 恐らく、成長しているのだろう。誰かが泣いているのを見て、心配出来るようになるほどには。

「……少し、歩くか」

どうせ今日は休みだ。

色んなところに行ってみよう。



空には雲が。そして、その雲の隙間からは度々太陽が顔を覗かせる。そんな曇り空。

大通りには甘味屋、雑貨屋、大道芸、瓦版……多くの人で賑わって

いた。

そんな中、特に目的もなく、一つの店に入る。それは、小さな雑貨屋だった。

『いらつしやい』

声を掛けてきたお婆さんに会釈を返し、商品を見ていく。

扇子、湯呑み、和傘、脇差し、作務衣……そして……

「あつ……」

『ああ、お客さん。その簪が気に入ったのかい？それはねえ、はるか昔に龍神様が訪れた時の鱗を使つて作られたものらしくてねえ。前までは香霖堂にあつたんじやが、男の自分には必要ないと、ここに置いて行つたんじや。そんなに貴重な物を頂いたのは良いのじやがのう……一度つけてみたが、どうにもわしには似合わんくてのう……それならばと売りに出しておるんじや。どうせなら、これが似合う女子に付けてもらいたかつたんじやが……』

「似合いますよ。彼女なら。これ、幾らですか？」

それを指差しながら値段を聞く。

『ほう……それは良かった。それなら、持っていて構わんよ。どうせ香霖堂の店主が勝手に置いていつたんモノだからねえ。代わりにと言つちやあ何じやが、その女子が付けたところを見せてくれないかい？』

緑、青、赤の三色を映し出す簪をお婆さんにわたし、包んでもらう。

その三色は、どことなく彼女の持つ七色の力に似ていた。

「それじゃあ、代金はこれで」

手持ちの有り金を全て出し、店を出た。

これぐらゐの贅沢は、許されるよな？

そんな事を考えながら、俺は家へと帰る。

これで、良いのだろうか……

と、一抹の不安を抱えながら……

第43話 おやすみなさい

あれから一週間近くが経とうとしている。

鈴仙さんとは特に変わりなく過ごしている。が、ぼつーとしている事が多くなつた。体調が悪いのかもしれないとも思ったが、特にそんなこともないようだ。……大丈夫なのだろうか？

それと、八意先生と仲が悪くなっているようだ。薬を受け取る時、八意先生に噛み付かんばかりに睨みつけていた。

恐らく、俺が不老不死にならないからだろう。鈴仙さんは俺の意思を尊重してくれたのに対し、八意先生は……貴重な男の労働力が無くなるのが惜しい。とか、その辺だろうか？

なんにせよ、彼女達の仲を壊してしまったのは俺なのだから、責任は取らねばなるまい。

……水が少なくなつて来たな。

ここ一週間の事を思い出しながら水瓶の中を覗き込む。水瓶の中は、既に底が見え始めていた。

「男の一人暮らしだからそこまで大きな物でなくも問題ないと思つたんだが……汲みに行くか」

水瓶の隣に常備してある桶を手に取り、外の井戸へと向かう。外は既に暗く、妖怪達の時間だ。里の中とはいえ、監視の目をくぐり抜けた妖怪がいてもおかしくはない。

外に出るための扉をそつと開き、様子を伺う。今日は雲がない為か満月の明かりだけで歩く事が出来る。しかし、同時に妖怪達が活性化しているのです、どちらにせよ注意して進まなければならない。

耳に意識をやりながら、長屋の裏手に回る。

「あれ？こんな夜中にどうしたの？」

そこには、既に先約がいた。赤いマントを羽織つて井戸の縁にバランスよく座っている。俺の隣人である赤蛮奇さんだ。

「こんばんは赤蛮奇さん。水瓶の中が少なくなりまして」

「汲みに来たよ。でもいいのかなあ？私みたいな悪い妖怪に食べられちゃうぞ〜？」

両手で威嚇するように爪の形を作り、がおーと言ってくる赤蛮奇さんを尻目に水を汲んでいく。取り敢えず一杯分もあれば明日の朝まで大丈夫だろう。

「相変わらず連れないね、チツえ」

「そんなことよりも、頭痛は治まったんですか？」

「私からしたら、驚きつてのは死活問題なんだけど……まあ、頭痛はまだ我慢出来るけど、一向に良くなる気配はないかな」

彼女は最近頭痛に悩まされているらしい。頭痛薬や、痛み止めを試したりはしているようだが、効果は現れないようだ。

「里、と言うよりこの長屋から離れば頭痛は消えるんだが……。それでも、たまに痛くなることがあるんだよねえ。一応、あたりは付けたんだが……どうなる事やら」

「まあ、なんにせよ、体には気を付けて下さい」

「ああ、そうさせてもらうよ。それじゃあ、おやすみ」

「……おやすみなさい」

笑顔を浮かべ手を振る赤蛮奇さんに挨拶を済ませ、部屋へと戻る。桶の中の水を水瓶に移し、ひと掬い喉へと流す。地下で冷やされた水が口から喉へと入り、喉を下って胃の中へ入っていくのが分かる。明日も朝早い。それに、明日の午後の予定は決まっている。

布に包まれた簪を見て、布団に潜る。

彼女は、喜んでくれるだろうか……それとも……

明日のことに思いを馳せ、

「おやすみなさい」

襲い来る睡魔に身を委ねた。

第44話 疫病神

「……………んっあ」

窓から差し込んでくる光の眩しさに目が覚める。布団から這いずり、だるい体を起こす。立ち上がり一つ伸びをする。

水瓶から水をひと掬いして顔を洗う。冷たい水は、まだ寝ぼけた頭を起こすのに最適だ。

備え付けの釜の中を覗くが、中は空っぽ。昨日は米を炊かず、野菜を食べただけなのでしようがない。と、割り切る。しかし、なにも食べずに行くわけにもいかない。取り敢えず何かしら胃袋に入れておこう。

「…………トマトくらいしかないか」

水に付けていたトマト二つ。それに加え、白菜の漬物。こじんまりとしたものだが、取り敢えずはこれでよいだろう。

「いただきます」

と、言っても量が量なので直ぐに食べ終わってしまった。

「ぐちそうさまでした」

両手を合わせ皿を水に付ける。

「…………あれ？」

そこで、ふと疑問に思った。鈴仙さんが来ていない。何時もなら部屋に既に居るか、訪ねてきている頃なのだが……

「まあ、たまにはそんな日もあるか」

むしろ、家主が寝ている部屋に無断で入って来ている事に疑問を持たなず慣れていることが可笑しいのだが。

さて、午後は紅魔館に行くので…………二十円と五円(約二十五万円)ぐらいを持って行けば良いだろう。

二十円はレミアアさんから頂いたもの。返すのは野暮だろうが、これだけの大金を返さないわけにもいかない。

五円は念のために持っておく。幻想郷に銀行はない。勿論ATMなんて便利なものもない。なので、もしもの為に多めにお金を持っておくのだ。それも、万が一盗まれてもいい様に何個かに分けておく。

「それと、簪だな」

簪を懐にしまい、部屋から出る。

「あつ……」

「あ、鈴仙さん。おはようございます」

部屋から出ると、そこには鈴仙さんの姿があった。だが、何処かその表情は沈んでいる。

「今日は遅かったですね。何かあったのですか?」

「……今日に行くの、やめませんか?」

最近八意先生と仲が悪いみたいだが……まさか、ここまで酷かったとは……

「流石に仕事を無断で休むのはいけませんよ。鈴仙さんは最近八意先生と仲が悪いみたいですが、それって自分が原因ですよね?」

「……そうですけど、違うんです!!」

俺の言葉に発狂するように否定する鈴仙さん。その瞳には涙が貯まっており、その紅い瞳は怪しく輝いていた。

「ごめんなさい……強引ですけど、ここで大人しく」

「うつ……」

頭を殴られ続けられているような鈍い痛み。激しい吐き気。それ等を押さえ付けるかのような眠気。

何とか瞼を降ろすまいと踏みとどまるが、彼女の瞳がそれを許さない。い。

「しつかりしな佐々木松!!」

パンツ!!

「いつ……!!せき、ばんきさん?」

頬に伝わる鋭い痛み。その痛みのおかげか、頭痛も吐き気も眠気すらも嘘だったかのように消えてしまった。

そして、目の前にいたのは赤蛮奇さんと、床で呻いている鈴仙さんの姿だった。

「どうして……?」

「当たりを付けてたって言っただろう?それが、あの兎だったのさ。アイツの放つ流れが原因だったんだよ」

「波長を操る……でも、なんで」

「さあ？それは私には分からん。けど、アイツの狙いはアンタだ。ここはあたしが抑えておくから先に行つときな。帰つてきたら酒でも奢つてらわなきやね」

全部赤蛮奇さんに押付けるのは気が引けるが、今は非常事態。ここは有難く赤蛮奇さんに任せて八意先生に話をしに行こう。

「すみません」

「はいよ。任せな」

「だ……め……」

「アンタは大人しくしてな。どうせ相性は悪いんだ。能力が波長を操るものだとして、同時に幾つもの波長は操れないだろう？」

そうして現われたのは赤蛮奇さんの顔。それが空中に幾つも浮かんでいる。

しかし、今はそれに驚いている場合ではない。一刻も早く永遠亭に行かなければ。

後ろからの呼び止める声に後ろ髪を引かれる思いで、その場を後にした。



里を抜け、林を抜け、竹林を抜けた。

そうして漸く辿り着いた永遠亭。そして、そこには鈴仙さんの師匠である八意先生の姿。

「はあはあ……」

「随分遅いから表で待っていたけど……随分疲れているようじゃない。取り敢えず中で話を聞きましょう」

「いえ……ここで、大丈夫です」

深呼吸を何度か繰り返し、息を整える。

「すみません、お待たせしました。実は鈴仙さんがですね……」

俺は、鈴仙さんが無理やり俺を拘束しようとしたことを話した。

「そう……」

「なにか心当たりはありませんか？」

「あるわよ。教えてあげるから付いてきなさい」

「いえ、あるならいいんです。今鈴仙さんを赤蛮奇さんに抑えてもらってますから、行きましよう」

「いえ、貴方がこつちに来てくれれば全部解決するわ。だから、こつちに来なさい」

そう言つて俺の腕を掴もうとしてくが、反射的にその手を振り払つてしまった。振り払わなければいけない気がしたのだ。何故なら、今の彼女からはアノ時のアリスさんと同じ感じがする。

「なにを……焦っているんですか？」

「貴方こそ、何で後ずさっているの？」

「質問に質問で返さないで下さい」

お互いに見つめ合う。その間にも、少しずつ後ずさる。妙に冷たい汗が背中を伝う。

その時、八意永琳が溜め息を吐いた。

「はあ……あの子なら洗脳でもして連れ帰つてくるとおもつただけど。本当はこんな無理やりじゃなくて、貴方がなにも言わずに付いてきてくれると嬉しかったのだけど。これじゃあしようがないわね」

ダツ!!

八意永琳の言葉が終わると同時に、後ろに走り出す。が、襟首を掴まれたのか、強い衝撃で息が詰まる。

「ガッ…」

「目の前で逃げだそうとしているのを捕まえないほど、馬鹿だともつたのかしら？」

「ごホッごホッ!!くそ……ッ!!離せ!!」

「それじゃあ、いきましようか」

襟首を掴んでいる腕を何とか引き離そうと試みるが、片腕でしか離そうとはしていないものの、両手であろうと引き離せる気がしない。なす術なく引き摺られていく。

その時、地面が揺れた。

ドゴンッ!!

「何をしているのかしら、永琳」

「姫さま……」

「私が地上に来たかったのは、そこにある命と言うものを見たかったから。それに同意してくれたのは貴方だった。そして、その命を守る為に薬剤師になってくれた。そんな永琳が、その目的に反するような行動をする訳がないわよね？」

この声は、蓬莱山輝夜さんだろう。屋敷内でも何度か会う事があったが、最近は何れも睨まれてばかりだった。が、助けてくれるのだろうか……

「それは……」

「部屋に戻りなさい。話は後で聞いてあげる」

「輝夜……分かりました……」

急に襟首を離され、軽く腰を地面に打ち付けた。

「っ……あいたた……」

後ろを振り向くと、そこには予想通り蓬莱山さんがいた。そして、隣には挟られた門。何があつたかは想像したくはない。

「助かりました。有難うございます蓬莱山さん」

「あー、良いから。取り敢えず口を開かないで頂戴」

ゾクッ

その声に体が固まった。怒気と殺気が俺の体にまとわりつく。

「本当、良くやってくれたわよね。あのスキマ妖怪に気に入られているみたいだからどんな面白い奴かと思つたら……とんだ疫病神よ。てゐは何処かに行つてしまふし、永琳と鈴仙は仲違い。それも殺し合いに発端しそうになるほどにね……ッ!!それもこれもオマエが原因ときた。私の居場所を壊して楽しかった？私の家族を壊して楽しかった？永琳が何をしたかった教えてあげましょうか？貴方を使つて人間を理解するつもりだったのよ。そして、それに反抗したのが鈴仙。私は今の状況が好きだった。けれど、それをお前が壊した。私からしたら、貴方を殺したい。けど、それは私の決めたルールが許さない。今回だけは見逃してあげるわ。もう、私の前に姿を表さないで頂戴。この疫病神がッ!!」

そう言い残し、彼女は屋敷へと戻っていった。

俺は、この世界で、家族の大切さを知ったつもりだ。

そして、今度はその家族を壊した。俺は何をしたかった？ 変わりた
い？ 何のために？ 家族のために？ だから、家族を壊していいのか？ そ
んなわけない。そんな筈がない。

「あつ……あつ……誰か……俺を、俺を——」

『その願い、聞き届けましょう』

第45話 願い

やつれた体には、多くの傷跡。

彼女は笑った。問題ないと。疲れきった顔で、笑ってみせた。許せなかった。

原因は何なんだと、何があつたんだ。と、聞いた。原因はすぐ近くにあった。

彼女は、憤怒、喜び、悲しみ……様々な表情を一度に見せた。

許せないと言われた。許したいと言われた。お前が来なければ、こんな事にはならなかった。けど、お前が来なければ、あの幸せも無かった。と。

原因は分かっていた。この耳で確かに聞いたから。

彼女はなにも言わなかった。

こちらを一瞥し、軽蔑の視線を浴びせ、去っていった。

むしろ、こっちの方が楽に感じた。

二人は状況を説明してくれた。

結界を張って押さえている。けれど、その結界すらも、その力でも容易く破壊してのける。

行って欲しい。貴方でなければ止めることは出来ないだろう。

そう言つて、地下への扉が開かれた。

行きたくない。

俺なんかがどうこう出来るわけがない。

そもそも彼女は本当に俺なんかに会いたのか？

そうだ、俺なんかで止められるはずも無ければ、彼女が俺に会いたいのかも分からないじゃないか!!

自分を正当化する言葉が次から次へと、出てきては消えていく。

しかし、足は勝手に階段を降りていった。

暗い階段を降りて、目の前の扉を開く。

異臭。

部屋の中は赤と黒。

ベッドの上も、クローゼットもぐちやぐちにされ、赤黒く染まつ

ていた。

そんな部屋の中の片隅に座る人影。

髪は黒く、パキパキに固まっており、以前のような面影は見えない。

そして、ズタズタにされた衣服。その破れた隙間からは、ナイフやハサミが突き立てられていた。

そして、察した。この赤黒いのは、彼女の血なんだと。

ぴチャリぴチャリと血の上を歩き、彼女の前で膝を折る。そして、ゆっくりと彼女を抱きしめた。

『ごめんなさい……』

彼女は謝った。

『寂しくて……力が制御出来なくなって……でも、暴れたらおじさんに……嫌われちゃうから……』

『寂しかったんだね。一人にしてごめんな』

彼女は俺の胸に顔を埋め、泣き始めた。

荷が重かった。

『一緒に上に行こう。俺も一緒だから、大丈夫だろう？』

『でも……いっぱい迷惑掛けちゃた……』

『大丈夫だ。だって……』

胃の中が圧迫される。

『……家族……なんだろう？』

彼女はゆっくりと立ち上がった。

俺は彼女の手を取った。

『ありがとう、おじさん』

知れば知るほど

『やっぱり、貴方に任せて正解だったわ』

『そうですね。取り敢えず妹様。傷をどうにかしましょうか』

理解すればするほど

『妹様、お召し物でございます』

その重荷は重くなって

『先程は済まなかったな。いや、許してくれとは言わないさ。それだけの事を私は言ったのだから。だが、出来ればもう少し感覚を狭めて

帰ってきて欲しい。フランも、私も……この館にいる全ての総意と。咲夜は違おうだろうか。ククツ』

俺にのしかかる

『お帰りですか？暗いので気を付けて下さいね。ほう、定期的に帰って来ることになった。それは嬉しいですね。私の楽しみが増えました。それなら、お帰りですかではなく……いつてらしゃいませ。松さん』

そして、いつしか、こう、考えるようになった。

消えたい。

と。

そんな時だった。彼女に出会ったのは。

俺の願いを叶えることが出来る。

俺の存在を消す事が出来る。

彼女は言った。

『もう少し、この世界を楽しんでみなさいな。せめて、一ヶ月。それまでに、貴方がまた同じことを強く望むのであれば、その願いを叶えましょう』

そして、一ヶ月を少し過ぎた時。彼女は、八雲紫は、もう一度俺の前に現れた。

俺の願いを叶えるために。

第46話 心残り

「さあ、上がってちょうだい。貴方の望みを叶えるためにはやらなければいけないことがあるのだから」

八雲さんの後に続き、彼女の家へと上がる。

俺が彼女と出会ったの一ヶ月前。久しぶりに紅魔館へと行った帰りの時だった。

■ □ □ ■ □

「お邪魔しておりますわ。佐々木松くん」

家に着くなり紫色のドレスが女性が部屋に居座っていた。

だが、今はそんな事がどうでもなるぐらいに疲れた。もうこのまま雑魚寝してしまおうか……このまま死ねば楽になれるのに。

「あら？無視されちゃった」

女性が何か言っているがそれどころじゃない。

「残念ね、貴方の望みを叶えるために此処に来ただけけれど。今日はお暇させてもらうわね。疲れているようだし」

気が付けば俺は気を失っていたみたいで朝になっていた。

□ ■ □ ■

次の日、鈴仙さんに不老不死にならないかと提案された。

俺は自分の事を話、少し時間が欲しいと言った。そして、紅魔館の皆ともう一度話そうと決めた。

心残りが無いようにと。

「あら、お出掛け？」

部屋を出ようとした時だ。後ろから声が掛かった。

後ろを振り向くと、昨日部屋にいた紫のドレスを着た女性がいつの間にかそこにはいた。

「あの、どちら様で？」

「私？私は八雲紫。この幻想郷を管理する者ですわ」

「それで？その管理者がこんな人間に何のようで？」

「そんなに警戒しなくても大丈夫ですわよ？別に取って食おうなんて考えていませんもの」

八雲紫はクスクスと口元を隠しながら笑う。

「それで、私の質問には答えてくださいませの？」

「答える義務がありますか？」

「死に急ぐのでしたら止めようかと思いましたが」

「別に、死に行く訳では無いのですが」

彼女は手に持った扇を広げ、口元を隠した。

「本当かしら。紅魔館に住む住人に最後の別れを告げに行くわけでは
ありませんのね？」

「ええ。まだ、死ぬつもりはありません」

「思い違いで良かったですわ。ここで貴方が死んだら、幻想郷はポロ
ポロになってしまいますもの」

「……どういうこと？」

ポロポロ？幻想郷が？俺が死ぬことで？

「あら、貴方は自分の交友関係の深さを知らない、と？そうねえ、吸血
鬼の妹は貴方に懐いているわ。そして、この間貴方が紅魔館に行った
時、あの子は既に制御が効かなくなりかけていた。なら、貴方が死ん
だのを知ったら？暴走するでしょうね。そして、それは吸血鬼の妹に
限った話じゃない。他の紅魔館の住人も同じ。最悪戦争になるか
も知れませんわ。そして、紅魔館は敗れる。多勢に無勢ですもの。そ
したら、今度は幻想郷のパワーバランスが崩れる。妖怪か、人間か
……どちらかの勢力が強くなる。なり続ける。まあ、あくまで可能性
の話ですが」

頭の中がごちゃごちゃしているが……要するに、俺は死ねない……

「けれど、貴方は死にたいのでしょうか？それなら、私を頼りなさい。貴
方が消えても大丈夫なようにしてあげる」

「どうして……」

「どうして？そうねえ、乗りかかった船だからかしら。一ヶ月。一ヶ
月後にまた来るわ。それまでに決めておいてね。それと、これからは
自分の力で生き抜きなさいな」

「そう言い残し八雲紫は消えた。」

その後、紅魔館に行き、自分のやってきた事を確認した。そして、不老不死の事についても話してきた。

俺は、生涯この温もりを忘れない。

俺を受け入れてくれたこの幻想郷を。

俺を受け入れてくれた紅魔館の皆を。

□
■
□
■

「それじゃあ、準備をしましょうか。心残りはないかしら？」

心残り……そう言えば、忘れていたな、渡すの。

「すいません、もう一度紅魔館に行きたいのですが」

「ええ、構わないわ。その隙間を通りなさい。何かあれば私を呼びなさい。帰るときもね」

「ありがとうございます」

彼女の隣に現れた紫色の隙間に身を通す。

そして、浮遊感の後目の前には大きな赤い館、紅魔館の姿。

これが、本当に最期の別れとなる。

胸に広がる別れの悲しみと、解放される喜び。そして、喜びに対する怒り……もはや、自分自身でも分からない感情たち。

ただ、一つ分かることは、俺は逃げたのだ。

目の前の現実から目を逸らして。

無様に逃げたのだ。

そして俺は、紅魔館の正門に向けて足を進めた。

第47話 詰み

扉を開き、中へと入る。

暗い部屋の中で一人の女性がティーカップを弄びながら黄昏ていた。

「久しい……という程でもないか。お帰りと優しく包容した方がいいのか……それとも、馬鹿野郎と罵りながら殴り飛ばすのが良いのか……」

「知っていたんですね」

「当たり前だ……と、言っただけでいいところではあるが、この間ふと見えただけでな。お前の辿るべき運命に一つの大きな道が増えたのが……正直、知らなかったよ。いや、気づけなかった。気付こうと努力もしていなかった」

「いえ、レミリアさんは何も悪くなんてないですよ」

そう、これは俺が勝手に感じているだけのもの。レミリアさんが負い目を感じる必要なんてないのだ。

「お前がそう言うってくれるのは分かっていたさ。けれど、私は当主なんだ。部下達を支え、導く立場なんだ。そして、私たちは家族だ。家族は支え合いながら進んでいくものなんだ。少なくとも私はそう思ってる。だからどうだ？私はそれを全うできているか？出来ていない。私は、私自身をそう断言できるよ」

そんな事はない!!

そう、否定したかった。けれど、出来なかった。

「本当ならここで無理矢理にでもつなぎ止めておきたい。けれど、それはショウウのためにはならない。重荷を増やしていく一方だ。ショウウ、お前がたどる運命は星の数ほどにある。その中でいちばん大きいのは、お前が思っているものとは少し違う。けれど、その中で、お前は笑っていた。泣きながら、笑っていた。けれど、その大きな流れの中に、脇道がある。そこに流れていくことを、私は願っているよ」

「俺は流されるだけです。だから……」

「なに、私は奇跡を信じているだけと言う話だ。さて、これが最後にな

るかもしれないんだ。少しぐらい付き合ってもらおうぞ」

レミリアさんは将棋盤を取り出し、意地悪そうな笑を浮かべた。

「そうですね。最期になるかも知れませんが」

「そうこなくてはな」

「ああ、それと……これを」

「これは……お金？」

「はい。俺が紅魔館を出ていく時に貰った分です」

「まったく……返さなくてもいいというのに……まあ、有難く受け取らせてもらおうか。お前が帰ってきた時は、これで酒でも買って宴会でもおこなうか」

レミリアさんにお金を返し、駒を並べ始める。

この時は、何故だか重荷や、不安などの感情が一切無かった。ただ、純粹に、楽しかった。

やはり、貴女は当主にふさわしい。

貴女が家族だと言ってくれたからこそ、俺は沢山のものを知ることが出来たのだから。そして、今

ここに戻りたい。

そう思えるのだから。

だから、さようなら。

「……詰み。俺の、勝ちですね」

第48話 ありがとう

レミリアさんの部屋を後にして、大図書館、つまりはパチュリーさんたちの所へとやって来ていた。

彼女達には特に何かを借りたわけでもないが、色々と良くしてもらっているのは事実だ。だから、お礼の一つでも言わなければ俺の気が収まらない。

大図書館の廊下を真っ直ぐと進み、パチュリーさんの居るであろう場所まで進んで行く。

本棚達に囲まれるように開けた場所。その中央にぽつんと一台の机。その前に立って本を取つかえ引つ変えしながらものすごいスピードで読んでいる一人の女性。パチュリーさんだ。

パチュリーさんは俺の視線に気付いたのか、俺に手招きをした。

「いらしっしやい松。今日はどうしたの？」

パチュリーさんは目に掛けていた眼鏡を外しニコリと微笑んだ。

「あ……ちよ、ちよつと顔を見せに」

「別に隠さなくてもいいわよ。レミィから聞いてるから」

「そうですか……」

「ああ、でも、美鈴とフランには話してないわ。フランは耐えられないでしょうし、美鈴は実力行使に出そうだしね」

「気を使わせてしまってますいません。ありがとうございます」

「いいのよ。と言ってパチュリーさんは椅子に座った。」

「私から言えることなんてほとんど無いわ。どうせレミィが殆ど言うてるだろうから」

椅子に座ったパチュリーさんは手元の水晶玉を弄ぶ。

「ただ、私はあなたの事を結構気に入っていたのよ？昔の咲夜を見ているような……なんて言うのかしらね？保護欲？そんなものを感じていた。だから、最後のお節介」

俺の目の前に水晶玉が浮かんだまま移動してきた。そして、パチュリーさんが手を握り締めると同時に水晶玉は砕け、そこには月の形をしたネットワークスが浮かんでいた。

「これは？」

「簡単な結界術を持ち運び可能にしたの。本来なら私の管轄外なんだけど……知らない分野もたまには勉強しなくちゃね。これを持っていればその右手は自由に動かせるはずよ。さてと、これで、私の目的は終わったわ。さ、フランのところに行つてあげなさい」

目の前に浮かぶネックレスを受け取り、首に掛ける。

「ありがとうございます。パチュリーさん。さようなら」

「ええ、またね」

パチュリーさんに最期の別れを済ませ、フランのいる地下室へと向かう。

「お別れはすみましたか？」

「小悪魔さん？」

「ネックレス……受け取ってもらえたのですね。良かったです。それ、パチュリー様がずっと徹夜して、全く知らない白魔法で作られたものなんですよ。それも、かなりの高位魔法で。本来なら、その魔法式は城や国を守るために使われるものなのです。おっと、自分なんかを受け取つていいのか？なんて考えたら駄目ですよ？貴方だから、受け取つていいんです。その所を履き違えないように」

俺なんかのために……こんな、俺だから受け取つていい。

「そう……ですね。有難く受け取つておきます」

「はい。そうしてください。そして、もう一つ。悪魔の契約というものは、悪魔にとつて絶対なものです。貴方が妹様とどのような契約をなされたかは知りませんが……キチンと考えて、どうなさるかを決めてくださいね。私からの話はその程度です。それでは、また、お待ちしておりますね」

「ええ、色々ありがとうございます。ああ、一つ頼みたいのですが……咲夜さんにも謝罪と、別れの言葉を伝えてもらつていいですか？ごめんなさい。と、さようならって」

「その程度でしたら、おやすい御用です」

「ありがとうございます」

小悪魔さんにお礼を言い、階段を下って行く。

首元に感じる暖かいものを感じながら、頬を伝うものを鬱陶しく感じながら。

さようなら

ありがとう

なんども、なんども……胸の中で、そう、繰り返しながら。
一つ一つ、階段を下りていく。

第49話 言い聞かせながら

階段を降りた先には一つの扉。

その扉を開く前に目を擦る。こんな顔を見せたら心配させてしま
う。

何度か目元を擦り、もう大丈夫だろうと扉をノックする。

ココッソ

手が震えていたのか、ノックの音が二重になって響く。

咄嗟に腕を引き、右手で抑え込む。

「はーい？だれー？」

ガチャッと扉が開き、その奥から見慣れた顔が出てくる。

「あ!!おじさん!!」

フランドールが抱き着いてきたので、それを優しく受け入れる。

「久しぶり、フランドール」

「うん!!取り敢えず入って入って」

フランドールに後押しされる形で部屋へと入っていく。部屋の中
は綺麗なもの……でもなく、多くの本が散乱していた。

「私ね、知ってるよ。パチュリーと、お姉様が話してるの聞いたの」

唐突の告白。

ドクン。心臓が跳ねた。息がつまり、呼吸が出来ない。

「だから、勉強しようって思った。最初は、おじさんがいなくならな
くても済むように、強くなろうって。そうすれば、おじさんも安心して
此処で暮らせるだろうって……そう……思ってた……」

フランドールの瞳には涙が溜まり今にも零れ落ちそうでも……でも、
俺は何も出来なかった。

「魔法もいっぱい覚えたよ、治すのも、壊すのも、人がどんな生き物な
のかも、悪魔との契約も……今ならおじさんを守り切れる。絶対に。
でも、ダメ、なんだよね……おじさんは、それじゃあ……辛いんだよ
ね。私の自己満足だけが、残るだけなんだよね……」

「……ごめん……ごめん……」

目尻に溜まった涙が零れ初め、スカートに染みを作り消えていく。

「おじさんは……悪くないよ。勝手に私が依存してただけだから……おじさん、は……悪くないッ、から……う、ううッ」

目尻に溜まった涙は遂に決壊し、フランドールは嗚咽を出しながら泣き出してしまった。

それなのに、俺はどうすればいいのか分からなかった。

だから、そのフランドールの体を優しく抱き締めた。

「うああ!!」

泣きじやくるフランドールの頭を撫でてやることしか、俺には出来なかった。



「……ありがとう、おじさん」

泣き止んだフランドールが離れていく。目は真っ赤に晴れていた。

「……あーあ、本当だったらおじさんが泣いてたみたいだから、慰めようと思っただのになー」

フランドールは陽気な声を出しながら、くるりと回り、背を向けた。

「バレてたか」

だから、俺も陽気な声で返事を返した。

「バレてるよ。だって。おじさんとは繋がってるんだから。悪魔との契約でね。これを通して、私はおじさんが何を考えてるのが分かるようになった。おじさん……女の子が泣いたからって戸惑ってるだけだとダメだよ？そういう時は優しく抱きしめて、頭を撫でてあげるのが一つの正解。おじさん、行動は正しいのに心の中では戸惑ってばかりなんだもん」

「あれで良かったのか……俺の苦勞は一体……」

陽気な声に、陽気な声で返す。

「でも、これも今日でおしまい。おじさんとの契約は、今日でおしま
い」

震えた陽気な声が耳へと届く。

「さようなら、おじさん。私がこうしてられるのは、おじさんが。あ

の時、私の手を握ってくれたから。そうして、私が今も今までも、そして、これからも……進んでいけるのは、おじさんが私を救ってくれたから。だから、本当にありがとう。さようなら、おじさん」

フランドールと、俺の間に現れた光の糸が消滅した。恐らく、今のが俺とフランドールを繋いでいた契約なのだろう。

「……フランドール。君と会えて、君を救えて、今、本当に良かったと思える。俺と出会ってくれて、本当にありがとう。どうか、これからも、俺の代わりに進んでくれ。ありがとう、さようなら」

背を向け、部屋から去る。後ろから聞こえる小さな声に振り返るなと、振り返るのは、フランドールを侮辱する行為だと。

『あ………うあ………おじさん………おじさん………いやだ………おじさん………そばに、いてよお………あ………ああ………』

そう、自分に言い聞かせながら。

第50話 歪んだ愛をアナタに捧げましょう

頬を撫でるそよ風。

涼しさを感じる水の音。

足元を照らす月明かり。

昼頃に来ていたはずだったが、いつの間にか夜になっていたようだ。

手入れの行き届いた花壇を縫うように歩き正門を目指す。そこに、俺の探す人がいるはずだ。

噴水の横を通り抜け、真っ直ぐ進む。

赤い髪が風になびき。背をピンツと姿勢よく威風堂々と立つ女性。

その後ろ姿に足が動くのを止めた。

何故か、そんなもの分らない。もしかしたら見とれてしまったのかもしれない。もしかしたらこのまま会わずに去るべきなのかと止まったのかもしれない。

だけど、動かなければならない。なにが、なんでも。彼女だけには、絶対に。会わなければ、会って話さなければ。

違う……俺が、彼女と、話したいんだ。

我儘、そう分かった途端、足が前へと進んだ。

「こんばんわ」

「こんばんわ。こんな夜中にお散歩ですか？」

「ええ、ちよつとお散歩がてらに雑談でもと思ひまして」

彼女の横に並び、壁に背を預け夜空を見上げる。

「雑談ですか……」

「迷惑でしたか？」

「いえ、基本的に起きてるので話し相手が出来るとはとても嬉しいのですが、松さんに話せるような面白い事でもあったかな、と思ひまして」

「俺はこうしているだけでも十二分楽しいですよ。にしても、基本的に起きてるって……寝なくても大丈夫なんですか？」

「ええ、妖怪だから人間よりも体力が多いのも関係しているのではしよ

うが、修行をやっているうちに寝なくても平気になりました」

紅さんが努力家で色々な修行をしているのは知っていたが、まさかその過程で睡眠が必要じゃなくなる体になるなんて。

正直人間がその体質を手に入れてもあまり意味はなさそうだが……門番である紅さんには持ってこいの体質だろう。

「ですが、休息は大事ですからね。できる限り休息は取るようにしていますよ」

「そうですね。休息は大切です」

「にしても、変わりましたよね松さん」

「そうですね?」

「何時も会う度が変わって行くなどは思っていたのですが、情緒不安定だったり、妙に笑ってたり……けど、何だか今日は正直と言いますか……明るいと言いますか……」

……色々吹っ切れたから、だろうな。

「あ、いえ、別に悪い意味ではなくてですね?」

「いや、明るいのは悪口ではないと思うのですが……にしても、変わった……ですか。なら、色んな人から影響を貰ったからでしょうね」

そう、この世界で出会った皆から良い意味でも、悪い意味でも影響を貰った。だから、今の俺がいる。

もう、生きることが辛くなった佐々木松が、ここに。

「そうですね。うん、いいと思います。正直、ちょっと寂しくもありませんけど……もっと頼って欲しかったなあ。あ、今でも全然頼って貰って良いですからね!!」

むっふーつと後ろに擬音が見えた……気がした。

「では、早速頼んでも良いですか?」

「む、何時になく積極的ですね。ええ、私に出来ることでしたら」

「ありがとうございます」

「いえいえ、お礼なんて。それで?私は何をすれば?」

俺は懐から簪が包まれた袋を取り出す。

「受け取ってもらえますか?」

「?」

紅さんは首をかしげながら簪を受け取る。

「簪……ですか？」

「はい。出来れば、付けているところを見せて欲しいのですが」

「えっと……その……すいません。付け方が分からないんですよ」

おっと、それは想定外だった。

「そうですか。それは、残念です。最期にその簪を付けたところを見たかったのですが」

「最後だなんて縁起でもない。今度付け方を教えて貰っておきますから、その時にでもお見せしますよ」

少し怒ったような声で紅さんは言った。

「そうですか……そうですね、楽しみです。いつか、見られると良いなあ」

「だから、見せますよ。だって、折角松さんからの贈り物なんですから。松さんには見てもらわないと」

「……………紅さん、紅魔館の皆やアリスさんを見て、家族つてものになんとなくわかった、と思う。けど、紅さんだけは、なんか違う。この気持ちか恋とか、好きだとか、愛つてものなのは直ぐに気付いた」

「松さん？それって……………」

「急にこんな話して悪いとは思ってる。けど、最期なんだ。これ以上は、俺が持たない。本当に悪いと思ってる」

確りと、紅さんの瞳を見つめる。

その瞳は揺らいでいて、戸惑っているのが容易に分かった。

「これが一番だと、そう判断したんだ。歪んでいることも、狂っていることも、分かっている。自分が、現実から、目を逸らして逃げていることも」

「ちよ、ちよつと待って下さい。なんでそんなに気が落ち着いているんですか？まるで……………その……………死んだ直前みたいな……………いや、そんな……………まさか……………だ、大丈夫です……………やり直せる、やり直せますから」

震えたその手が俺の肩を掴む。

にしても、死んだ直前、か。それは、俺が既に生きる気力が無いから、だろうな。

「ほら、何があったか話してみてください。ね？ね？」

「紅さん。美鈴って、呼んでもいいですか？」

「いいです、いいですからっ!!」

「美鈴……こんな、歪んだ愛だけ……受け取ってもらえますか？」

「っ!! 勿論です!! 勿論です!! だから、死のうなんて考えないで下さい!!」

「ああ、良かった……これで、心置き無く逝くことが出来そうだ」

両手で美鈴を抱き寄せる。

「駄目です……力づくでも、離しません。絶対に、絶対に離しませんからっ!!」

肩を掴んでいた美鈴の手が、俺の腰に回り強く抱き締められる。少し痛いけど、それだけだ。むしろ、耳に聞こえる嗚咽が、俺の胸を締め付けた。

「……………ッ お願いします」

そう、呟いた瞬間。美鈴の体から力が抜け、包容から抜け出すことが出来るようになった。

「……………」

「歪んだ愛、歪んだ愛だからこそ、この全てをあなたのために……歪んだ愛をアナタに捧げましょう」

その瞬間、体が浮遊感に包まれる。ぎよろぎよろとした眼球達に見守られ落ちていいるのか、はたまた浮き上がっているのかも分からない。

ただ、これで良かった。良かったのだと。自分が笑っているのが分かった。

宙に浮かび、すっと消えていく透明な液体を見ながら。

「あんまりじゃないですか……」

ガリガリ

「ようやく頼ってくれたと思ったら」

ガリガリガリ

「勝手に満足して、居なくなつて」

ガリガリガリガリ

「私の気持ちも考えてくださいよ」

ガリガリガリガリガリ

「なんでこんな別れ方をしなくちやならないんですか」

ガリガリガリガリガリガリ

「この簪、付けてるところ見たかっんですよね」

「見てからでも良かったじゃないんですか」

「もう少しぐらい一緒にいても良かったんじゃないんですか」

「なんで一言も相談してくれなかったんですか」

最愛の相手がさつきまでいた所を、名残惜しく、女々しく、狂った

ように掻き集めるように掻き巻る。

爪が剥がれ、血が流れ、肉が削げる。

その地面は削れ、赤く染まり、水が溜まる。

女はただ、あなたと一緒に居たかっただけだと。

なんでなんで

どうしてどうして

そう、嘆きながら。

最終話 歪んだ愛をアナタに

「お別れは済んだみたいだったから連れてきたけど……大丈夫だったかしら？」

「……はい。ありがとうございます。それで、早速お願いしていいですか？」

「……………そうね。そうしましょう」

付いてきなさい。そうやって先へと進んでいく八雲さんの後を追いかける。

会話なんてものはなかった。

「……よ」

黒く、重苦しい雰囲気のある木の扉。その扉が独りでに開いた。

八雲さんは何の躊躇いもなく、中へと入っていく。それに続き俺も中に入っていく。

部屋の中は薄暗く、床、天井、壁、入ってきた扉にも赤い文字のような、文様のような……薄気味悪い絵にも見える何かを描かれていた。

「あんまり見つめ過ぎて気持ち悪くないようにね」

じつと赤い何かを見つめていたからか八雲さんから注意を受けてしまった。

だが、そんなにグロテスクなものでも無いような気がするが……いや、興味が無いから何も感じないだけか。

「さてと、貴方を消す前に色々確認、説明させてもらうけど、大丈夫かしら？」

「お願いします」

「分かったわ。まず、今から行う儀式についてよ」

今から行う儀式。それは、対象者の存在を無かった事にする儀式との事。歴代の博麗の巫女たちもこの儀式を行い、一部の特殊な存在以外からその記憶は抹消されているらしい。なんでも、博麗の巫女に対する対抗策を取られないため八雲さんが編み出したものらしい。こうして、博麗の巫女以外の存在に施すのは実に二、三百年ぶりの事

だ。

「そして、ここからが大事なんだけど……貴方、あの後アリス・マーガトロイドには会ったかしら」

アリスさん？……そう言えば会っていない……な。

「その様子だと会っていないみたいね。この儀式に必要なものとして一つ、貴方が深く関わって来た存在との記憶が必要な。そして、それは、アリス・マーガトロイドと永遠亭の因幡てゐ」

「因幡てゐ……？」

「貴方が掛かった落とし穴を作り、薬を掛けた張本人よ。そして、自分が助かりたいからと八意永琳を焚き付けた。そう言った存在の記憶をキッチンと持っておかなければいけない。この儀式は貴方一人が苦しむことになる。この儀式の必要過程の一つに、貴方が寿命で死ぬ事が必要だから。貴方は今後の数十年を0と1だけの世界で生きることになるわ。貴方が死ぬまでの過程で、本当に、この世界で貴方を知る存在は私達、八雲だけとなる。これは、そう言う儀式」

静寂が部屋を支配した。

そして、その静寂を破ったのは俺だった。既に諦めている人間にそんな事を言われても、なんにも感じない。

「この儀式をした後、数十年立たなければ俺は消えることは出来ないのでしょうか？」

「あら、私とした事が。この儀式を今から始めて貴方の存在は無かった事になっていきますわ。それは、貴方の寿命と引き換えに貴方と言う存在が居なかった場合運命へとねじ曲げていきます。けど、先に貴方が死んでしまいましたら貴方が死んだと言う運命に書き換えられてしまいます。これ以上は空間と運命の関係性などの話になるので辞めておきましょう。要するに、貴方の寿命が削り切れるまでに運命の改竄を行う。しかし、その過程で何者かに殺されでもすれば、全てが水の泡。そう考えてもらって構いませんわ」

「なるほど、要するに死ななければ良いんですね。分かりました」

「この過程で心が壊れた巫女も何人かいました。引き返すならこれが最後ですよ？今なら紅魔の者達が暖かく迎え入れてくれることで

しよう。それでも、続けますか？」
当たり前だ。

俺が此処で引き返したとしても、同じ過ちを繰り返す。そして、彼女達の思いを汚すことになる。

それだけはあつてはならない。それだけはあつてはならないのだ。「そうですね……分かりました。それでは、見てもらいましょう。貴方が残してきたものを……」

俺と八雲さんの間に、歪みが生まれ、上下に裂ける。その先には、アリスさん宅での自室が映っていた。

家具の配置も何もあの頃とは変わっていない。部屋も綺麗なものだが……ベットのの上には一つの人形が寝そべっていた。

ドアが開く。

ボサボサな金色の髪を持ち、ヨレヨレの服を着て、その手にはくすんだ銀のトレイ。

トレイの上には水の入ったティーカップに、カビたクッキー。声は聞こえなかった。

彼女は人形の上半身を起こし、ティーカップの水を人形の口元に持っていく。勿論、人形が水を飲むはずもなく、水は人形に染みている。

ティーカップを置き、今度はクツキーを手に取った。そのクツキーはぼとりとベットのの上に落ちる。

それに対し彼女は笑みを浮かべていた。

そこに、別の金髪の少女が現れた。霧雨魔理沙だ。彼女は部屋の掃除を手馴れた様子で終わらせていく。

「取り敢えず、これだけ知っていれば大丈夫でしょう。大丈夫？吐きたいのなら吐いても構わないわよ？」

裂け目が歪み、消えていく。胃の奥から酸っぱい物が喉へと戻ってくる。それを何とか押し戻し、八雲さんに返事を返す。

「だい……じょうぶ、ですッ」

「そう。なら、永遠亭。貴方はあまり多くの存在と関わりを持たなかった。今回ばかりはそれに喜ぶことね」

先ほどと同じように歪みが生まれ、上下に裂ける。

そこには、女の子がいた。

両手足を鎖に繋がれ、真っ赤に染まった女の子が。

「あの子が因幡てゐ。貴方が永遠亭に来た事による一番の被害者。まあ、殆どが自業自得なのだけれど。今でこそああして静かにしているけれど、前までは酷いものだったわ。あの子は妖怪の中でもかなり長生きをしている部類でね……出生もちよつと特殊なの。そのせいか人間の子供に近い行動を基本的に取るようになって………なんとなく想像が付いたかしら？」

そう、因幡てゐはね……貴方が働いている時から、貴方の代わりに研究材料として監禁されていたのよ。監禁できる大義名分、抑え込んでいた欲望、その欲望を刺激する格好の獲物……とは言っても、八意永琳の本来の獲物は貴方だったのでしようけど。良かったわね、捕まらなくて。捕まっていたら因幡てゐの二の舞になっていたでしょうね」

酸っぱい物が逆流してくる。抑え込もうとしても、流れが強く抑えきれない。

「うツ……」

「吐いても構いません。慣れていませんもの。しょうがない事ですわ」

その言葉と共に、吐瀉物が床に広がる。ツンとした臭いが鼻を突き抜け、胸の辺りが気持ち悪い。

八雲さんは、そんな状態で蹲る俺の背中をさすってくれた。自身の服が汚れる事も気にせずに。

「……すいません、もう大丈夫です」

「そうですか。それでは、早速儀式に移っていきましょう。部屋の真ん中へ」

気持ち悪いのを我慢し、部屋の中央へと進む。

「それでは始めましょう。意識が無くなりますが、意識が戻ってくる頃には、貴方を知っているものは居なくなります。貴方を知っている

のは八雲である私達だけ。それでは」

赤紫色の光が幾つも現れ、俺の体の周りをぐるぐる回る。

気が付けば床に倒れていた。

瞼が重い。

その重さとは裏腹に、心は軽かった。

「あ……………あ……………よう、やく……………かいほ、う……………される……………」

暖かな温もりを感じながら、俺は瞼を閉じた。

「紫様。いくら何でもお戯れが過ぎるのでは？」

部屋を出た八雲紫に声が掛けられる。そこには、九本の黄金に輝く尻尾を持つ一人の女性が不機嫌そうな顔で佇んでいた。

「あら、遊びは大事なのよ」

「そう言う事ではありません。私が聞いているのは、何故、儀式の内容で出鱈目を言ったのかです」

「あら、嘘は付いていないじゃない？」

「確かにそうですが……それでも、わざわざ生かしておく必要は無いです!!」

「ええ。確かに、この儀式はその者の寿命がどうこうと言ったものは必要ない。けどね、藍。私は人間を愛しているの。それは勿論あの子もね」

「……………要するに、体のいい玩具が出来たから生かしておきたい……………?」

「あら、玩具なんてとんでもありませんわ。彼は私が愛した人間」

「だから、アリス・マーガトロイドの追ってから助けた。紅魔館で得体の知れない力のようなものを流し警戒させた。永遠亭で、わざと自ら

の正体をバラした。ようは遊びたかったのでしょうか？」

「愛ゆえの行動……ですわ。現に私は、あの子を救っている。違う？」

「やはり……歪んでいますね」

しかし、それも無理はない。

藍と呼ばれた女性は考える。

多くの身勝手な人間、妖怪の管理。幻想郷と外界との繋がり維持。小さな異変から、天変地異の如き異変の後処理などを筆頭に、八雲紫が行っている仕事の量は馬鹿げたもの。それに加え、その殆どが自身の精神をすり減らすもの。さらには、何度も何度も、博麗の巫女と言う理解者を同じ儀式で、自らの手で殺めてきたのだ。壊れるのも、狂うのも、歪んでしまうのも、無理はない。

「ええ、ええ、狂っていますとも」

そして。一番厄介な事は……

「だから、どうしたというのです？」

それを、自覚した上で。受け入れてしまっている。

「いえ……なんでもございませぬ。でしやばった真似をしてしまい、申し訳ありませんでした」

「そう。では、戻りなさい。仕事が残っているでしょう？」

「……御意」

藍はその場から去っていった。その、背中には哀愁が漂っている。

しかし、彼女の主はそれに気付かない。

「愛していますわ、愛おいしい人」

「いえ、どうせですから、あなたの言葉を借りましょう」

「捧げましょう。この」

歪んだ愛をアナタに

True End

歪んだ愛をアタタに

E
n
d

エピローグ

あれから二十六年。特に問題もなく静かに暮らしている。暮らし始めているところは、人里と妖怪の山との中間付近にある森の中。そのボロ屋を直しながら暮らしている。

暮らし始めた当初こそ、薪も満足に調達出来ない。食料を買いに行くにも一苦労。始めての農業。分からない、慣れていないことだらけ。それでも、なんとかここまで生きてこれた。

俺は生きなければならぬ。いや、寿命で死ななければならぬ。病気でも、他殺でも、自殺でもいけないのだ。

何度も死にたいと思ったさ。

街中で、『どちら様でしょうか?』『初めまして』

と、言われるのだ。

何度も

何度も何度も

何度も何度も何度も

何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も

あの人たちも、何度も訪れている八百屋でも、何処にも俺の居場所は無かった。

けど、同時にそれが心地好くもあつた。

誰かの生活を壊すこともなく、家族を引き裂くようなこともない。そんな安心感。

だから、俺はまだ生きていられる。生きてこられた。

後、どれ位生きていけば良いのだろうか?後、どれ位この虚しさと戦わねばならぬのか。

「……食材が切れかかつてるな」

一度頭の中をリセットし、現状を把握する。夜まで持つとは思えない量の野菜のみが、氷を使って冷やす冷蔵庫の中に入っていた。

「畑には………まだ育ちきっていない、罨は仕掛けていないから………買いに行くしかない、か」

畑に何か残ってはいないかと外に出てみるも、まだ収穫するには早

すぎる野菜たちが太陽の光を浴びていた。

やはり、肉も多少は食わなくてはならないので、森の中に罾を張っている。だが、今日に限ってはこわれていないかのチェックするため、に全て回収してきていた。

「魚を釣りに行ってもいいんだが……どうせだから明後日の分ぐらいまで買いだめしておこう」

太陽は真上より少し傾いているぐらい。これならば特に危険もなく人里まで向かうことが出来るだろう。

お金は、拾った貴金属や外から流れ着いたものを骨董品屋に売っている。しかし、お金を使うのもこう言った非常時のみなので溜まる一方。

戸棚からお金の入った袋を取り出し、外の世界で言う一万円ほど取り出す。それを腰巾着に入れ、人里に向かう準備は完了した。

冬が過ぎ、春に入ったとはいえ、まだ外は寒い。食材が腐りにくくなるのと、氷が簡単に手に入るのは有難い限りだ。しかし、こうも寒いと外に行くのは嫌になってくる。

厚着をし、外に出る。息を吐く度に白くなってくる程度には寒い。そんな中を歩いていく。人里まではざっと四十分程度は掛かる。薪には余裕があるから、帰ったら囲炉裏に当たろう。

しつとりと湿った草達。長年歩き続けて出来た通り道を真っ直ぐ歩んでいく。

今は春、カブやキャベツ、水菜もあるだろう。キクラゲなんかも置いてあるだろう。

煮付け、鍋なんかがいいかも知れない。だが、野菜だけだと少し味気ない。もう魚を釣りに行く気分ではないから、今日は奮発して鶏肉も買っついていこう。

なんて事を考えていたら、目の前から一人の女性が歩いてきた。その女性は手に大きめのかごを持っていた。日差し避けの麦わら帽子を被り、その隙間からは白い肌と金色の髪が覗いている。

「こんにちは」

「こんにちは」

こちらに気付いたのか、女性が挨拶してきた。
それに対し、こちらも挨拶を返す。

「こちら辺では見ない顔ですが、どちらから？」

「この道を少し外れた獣道の先にある森に住んでいるものです」
「……………」

女性はあからさまに警戒の視線を浴びせてくる。それは、しようがない事だろう。魔法の森とはまた違う位置にある、比較的小さな森。つまりは、妖怪達の根城になっけていてもおかしくない所から、見ず知らずの人間が現れているのだから。

つまり、彼女は、俺が妖怪か何かで人里に危害を加えないかを警戒しているのだ。

こんな視線を二十年以上も浴びていれば、嫌でも分かる。

「あはは……警戒するのは分かりますが、これでも何度か人里には訪れています。勿論、悪さをするためではなく買い物に行くためですよ？」

「そう……なら、そう信じておくわ。ごめんなさいね」

パチンつと彼女が指を鳴らすと同時に、俺を取り囲む様にして人形が現れる。いや、姿が見えるようになった。の方が正しいのだろうか。

最初から、彼女は俺を殺すつもりで人形を配置させておいたのだ。逃がさないように、見えないように細工された人形たちを配置して。

「それじゃあ、先を急いでいますので。さようなら」

「ええ、引き止めて悪かったわね。さようなら」

彼女と別れ、人里へと再度足を進める。

獣道はとつくの昔に歩き終わり、今はきちんと舗装……とは言つてもの道なのだが、比較的安全な道を歩いている。ここを真っ直ぐ後ろに進めば、妖怪の山。途中で右に曲がれば魔法の森へと続く。

さて、ちよつとしたイベントはあったものの、無事人里へと到着した。何時も利用している八百屋は人里の大通りの端にある少し古びた八百屋。そこが第一の目的地だ。

細道を進み、何度か曲がりながら大通りへと出る。大通りはいつも

通りの賑やかさだ。

「いらっしやいいらっしやい!!八意印の薬はいりませんかー!!ほら、てゐも声出して」

「なんで私が鈴仙と一緒にこんな事を……」

「アンタが師匠の部屋から薬を持ち出したからでしょうが……ッ!!そしてなに?人間が来なかったから野生動物に投げ掛けた?むしろこの程度で済んで良かったのよ」

「ちよいとごめんよ。風邪薬を五つほど貰えるかい?」

「あ、はい!!毎度ありー。つて、お客さん新顔ですね。それじゃあ今後ともご贖いにと言うことで、一つオマケしときますね!!」

「ありがとう。でも、キッチンとお金は払わせておくれ。俺一人だけオマケを貰うつてのも居心地が悪いんだ」

「むう、そう言うなら」

俺は約三千五百円を払い、五つの丸薬を携帯用薬入れ、印籠へと入れる。

「……はい、丁度ですね。それじゃあ今後ともご贖いにお客さん!!」

「あざしたー」

「ありがとうございます」

まるで姉妹のような二人の言動を見ながら、お礼を言つてその場を去る。こうして外で販売されることは少なく、見つけた時は出来る限り買うようにしている。家のストックも残り少なくなってきたのでちよとど良かった。

偶然の事にちよとど得をした気分になりながら、八百屋を目指す。

八百屋の前は数人の客と、店の店主やその妻、子供たちがせつせと働いてた。

『いらっしやい!!お兄さん見ない顔だね?まあなんにせよ、いいもん揃えてあるから見ていきな。安くしとくよ』

「それじゃあ……」

予想通り並べてあるカブ、キャベツ、水菜、キクラゲを真つ先に買う。外の世界とは見た目が違つたりするが、使用方法にはあまり違いはないので、気にしない。後はゴボウ、春菊、椎茸……ぐらいでいい

か。これなら三日四日は持つだろう。

店主に約二千円渡し商品を受け取る。野菜たちは風呂敷に包み家まで持つて帰る。

『はい、毎度!!』

「それじゃあ」

『また来てくれよ!!』と、珍しいな、吸血鬼なんて』
「え?」

唐突に店主が呟いた。その視線の先を追ってみると、手を繋ぎ、傘をさし、笑顔を振りまきながらはしゃぐ金髪の女の子。そして、苦笑いを浮かべながら引つ張られている姉の姿。その後ろに追従するメイド。気だるそうにしている主を、後ろから押し急かす悪魔。

そして、それを微笑ましそうに見守る女性。

中国風のドレスに身を包み、何時も被っている帽子は今日はなく、代わりにその長く、美しい朱色の髪を一本の簪で纏めていた。

『おや、お客さん吸血鬼を見るのは初めてなのかい?ここ数年前からチラホラと人里にも出てくるようになったんだ。ほら、赤い館……紅魔館だったか?そこに住んでるんだ。数十年前に吸血鬼と天狗との間で大きな戦争があつてねえ、勝つたのは天狗側。あの吸血鬼達はその生き残り。まあ、吸血鬼じゃないのも混じってるみたいだけどな。と、噂をすればなんとやら、一人こつちに来たぞ』

店主の説明を聞き流しながら、視線は吸血鬼一行を追っていた。その中のひとり、朱色の髪を持つ女性がこちらに近付いてくる。

鼓動が早くなる。

女性がすぐ隣に立った。

「すみません。ミカンを六つ頂けますか?」

『はいよー!!まいどあり!!』

「ありがとうございます」

彼女は店主からミカンを買い、後ろを向いた。

その横顔が視界に映る。そして、目が合った。

ドクンッ

心臓が一つ大きく跳ねた。

この数十年、何度も似たような状況になってきた。けれど、一向になれることは無かった。気付いているのではないか、本当は忘れられていないのではないか。そんな不安と希望が入り交じる。

「あの、私の顔になにか付いてますか？」

彼女が話し掛けてきた。心臓が痛い、息が苦しい。

「あ……………」

「あの大丈夫ですか？随分苦しそうですけど……………」

「大丈夫、大丈夫です……………」

手振りで大丈夫と表しながら、大きく深呼吸を何度か。

「すいません。お騒がせしました」

「そうですか。体が弱いのなら無理をはいけませんよ？」

「そうしておきます。ところで、その簪綺麗ですね」

「そうですか？ありがとうございます」

「贈り物としてとても良さそうです。何処で売ってあるのですか？」

「すいません…………それは分からないですよ。少し前に自分の部屋で見付けたのですが…………自分で買った記憶なくて…………でも、妙に大切に保管されてたんですね」

「そうですか…………そう言えば、この先の骨董品屋で見た気が」

「本当ですか？じゃあ、一緒に行ってみます？」

「いえ、私は遠慮しておきます。折角の家族水入らずの輪に入っているほどの勇氣はないですから」

これ以上は無理だ。これ以上いたら、彼女に泣きついてしまうかもしれない。そこから逃げるようにしてその場を後にした。

「随分遅かったじゃないか。男にでも絡まれたか？」

「そんな言い方をしてはだめですよ？それに、男の人ではなくて女の人でした」

「案外その女はお前に気があったのかもな。お前は同性にも好意を持たれそうだ」

「もう、いい加減にして下さい。と、すいません、この骨董品屋に寄っていいですか？」

「なんだ？なにか買うのか？」

「いえ、さっきの男性……じゃなくて女性の方がここで同じ簪を見たと言っていました」

「そうか、良いぞ。私たちは向かいの茶屋でゆっくりしているとしよう」

「はい、それでは行ってきました」

走って、走って、人里の入口の所で息を整えた。

何も考えず、家へと帰った。何も感じたくて、何も聞きたくなくて、いつも通り、何も考えず家へと続く道を歩き出した。

「すいませーん」

『はいはい、いらっしやい』

「あの、この簪と同じものを探しているんですが……」

『簪……？ほお!!ああ、あの人はキッチンと約束を守ってくれたんじゃない』

「これを買った人を覚えているんですか？」

『あー……確か……大きくて、気前がよかった……』

「はあはあ……なれないなあ」

「お疲れ様」

「八雲さん……お久しぶりです」

「ええ、お久しぶり。最後に会ったのは……十年くらい前かしら？」

「確かそれぐらいでしたね。近況報告として、本日も近況報告ですか？」

「まあ、そんな所かしら。所でかなり疲れているようだけど？」

「ちよつと……ありません」

「そう。その原因はもしかして……あれかしら？」

「えっ？」

八雲さんが俺の後ろを指す。

まさか……心臓の鼓動が早くなる。呼吸が荒く、息が出来ない。

嘘だ

「安心なさい」

八雲さんの言葉と共に後ろを向く。

そこには、中国風のドレスに身を包み、緑色の帽子を被り、長い朱色の髪を風に靡かせている女性

紅美鈴が、微笑みを浮かべ、目尻に涙を溜めながら佇んでいた。

「松さん」

美鈴が、俺の、名を呼ぶ。既に無くなったその名を、呼んだ。

ああ、頬が熱い。

俺は、泣いてるのだろうか？

美鈴が、その両手を広げた。

「大丈夫ですわ、何も問題ありません」

後ろから八雲さんの声が聞こえてきた。

「ああ……八雲さん、貴女は……酷い方だ」

今まで、ずっと耐えてきたのに……ああ、本当に……

「美鈴……めー……り、ん……」

「まったく、酷いのはどちらかしら。まるで私を嘘つきのようにな。ねえ？そうは思わない？」

「……そうですね、紫様」

男は動かない。あやつり人形の糸を切ったかのようにぐったりと、

動かない。まるで、蠟燭の灯火がフツと消えるかのように、動かない。その体はどんどん冷たくなって、固まっていく。

その両腕に、愛する人を抱いたまま。静かに、眠りについたので。

『ああ、そうじゃ……香霖堂の店主がめいど……じゃったか？に渡していた気がするのう』

「ああ、おそらく咲夜さんの事でしょうね。ああ、そう言えば咲夜さんから誕生日プレゼントととして貰った気が……今後も付けましようかね。ありがとうございます」

『いいんじゃないよ。お主が付けた姿を見れてわしも満足じゃ』

勘違いをしたまま、静かに眠りに付いたので……